

口にした切り、あとは身振り丈けであつた。これは三番叟劇の特色をそのまま出したのであるから何でもないが、「野崎村」の場では、粗末ながら、布片の書割だとか簡単な建築によつて、小さな場面が設けられ、初から田舎じみた舞臺が作られるには聊か驚いた。場面や背景などは、何もなしのあつさりした氣持のいゝものかと思つたら、決してさうではなかつた。そして太夫は普通の歌舞伎のチヨホ風に右手の床の上で語るのである。

さていよく拍子木がはいつて幕があくと、全く歌舞伎芝居、俳優が普聲を出さない歌舞伎芝居が、淨瑠璃節本位で行はれるのである。人形が動く代りに、人間が歌舞伎と同じやうに動いて、淨瑠璃本位で演技を進めてゆくのである。對話の處は、俳優は口の中で、観客にきこえないやうにしやべり、一見唇を動かしてゐるのである。口の動かし方で見ると、太夫と同じせりふをいつてゐるやうである。

俳優の動作には人形芝居の人形の動作のやうな、不自然な點は何もなく、振事以外は全く寫實的な動作のみである。そしてお光が化粧する場合には、左方樂屋の裏の方で、下座の三味線が入つて、床の太夫は口を閉ぢ、糸も手をやめて待つてゐるのである。何故にこんなことをするのかと、後できて見ると、それは歌舞伎の一座が、歌舞伎をやるつもりでやつてゐるから、太夫はやむなく俳優に合せられない邊を、まつてゐるのだといふ。

四

結局此一座は女歌舞伎の一座と義太夫節の太夫一座とを合せたものである。だから俳優は私の望むやうな、人形の動作をやつてゐるのではない。あくまで歌舞伎劇其儘である。歌舞伎の默劇である。「戀女房染分手綱」の「重の井子

別」の場をやつても、淨瑠璃芝居のあの場に似せた歌舞伎がやられてゐるに過ぎない。雙六の場面が見せられても、太夫はそこを原文通り語つてはゐない、姫の一行が駕籠で出發するといつても、駕籠はかき出されはしない、只俳優がいつ頃にやつてゐる丈けである。兎に角かういふ風なやり方をするとなれば、俳優がせりふをいふよりも、立派な洗練された音聲で、太夫が語つてこそ、始めて意義が全くなるのに、残念ながら、太夫にはまるでろく／＼音聲さへ出ない人がある。節廻しが幾ら物になりかけてゐても、聲が悪い上に小さくて低くて、淨瑠璃を語るといふことから、凡そ可成り遠距離に立つた人が多いので、淨瑠璃本位であるべきものが、全く俳優の身振のうまさの方が観客を引つけてゐる。けれども此處に、俳優の方には非常に徳をしてゐる點がある。それは俳優を用ひるよりか、聲變りをしないでいゝ女優を用ひて、歌舞伎の一座を作つたといふことは、無言劇であるから意味をなさなくなつてはゐるが、女をのみ用ひてゐるので、第一、丈が低くて凡ての人物が小さくて、人形に近い、可愛らしい感じを與へてゐることゝ、第二には、男役を女優が演じた場合の、音聲上の缺點と、力の足りない損失とを、殆んど立派につぐない得てゐることである。此外に又人形芝居に於ける、人形そのものゝ動作上の不自然さを除き得てゐることも徳をしてゐるのである。

かくして私の望む淨瑠璃本位の人形式默劇とは可成り距離はあるものながら、歌舞伎役者としての技巧の熟練をもつてゐるので、なか／＼見てゐて面白く、もつと人形式になればなるほど、義太夫節本位になればなるほど、前途が有望であると思ふ。けれども默劇俳優がいざといへば逆もどりして、歌舞伎をやるさといつた態度では、何の希望ももてないものである。そこで私の思ひ出すのは、「女文樂」である。

女文樂の人形の遣ひ方

一

昭和六年の事であつた。私は新しい人形淨瑠璃座「女文樂」のことを、『不死鳥』十月號（當時はまだ文藝創造と稱してゐた）に書いた。そして今日の唯一の人形淨瑠璃座である大阪の文樂の前途が、少くも人形遣の後継者を得ることの困難から、頗る悲觀すべきものであることを思ふて、女文樂の出現を謳歌しておいた。

元來此女文樂なるものも、文樂座の人形遣桐竹門造氏が、人形遣の前途を悲觀して、苦心の結果に發明した、人形の遣ひ方が中心をなすもので、昭和五年頃から始めたものだときいてゐる。ところで一度雑誌に書いたのだから足りてゐる筈だが、此遣ひ方が如何に面白いものであり、操淨瑠璃を復興せしめるに役立つものであるかを思ふて、後日の爲に書籍の形に残しておくべく、今一度其文を組直しておきたいと思ふ。

二

一體今日の文樂では、主なる人形は、近松以後に案出された遣ひ方にならつて、必ず三人で遣ふのが例だが、女文樂ではそれを一人で遣ふのだ。而もその遣ひ方が、裾から手を差込んでつかふ近松時代の一人遣ともちがつて、十一歳か

ら十六歳までの女の子が、人形を胴につり上げて一人でつかふので、胴吊式とでも云ふべきだ。そしてその遣ひ方の餘りにうまいのを不思議に思つて、宮戸座で上演中にたうとう樂屋へ頼んで、舞臺裏で遣ひ方を見せて貰つた。そして遣ひ方のうまい理由が分つた。

それはつまり、あの腰のぐにやぐの、足のふにやぐの、人形を、女の子でもうまく遣へるやうに、門造氏によつて發明されてゐるからであつた。即ち女文樂の人形の遣ひ方を一口で云ふと、主として三つの發明からなつてゐる。

先づ人形は文樂のよりか皆少しづつ小さいが、その人形の後頭には小さい環があつて、その環から二尺ばかりの糸が引ばられて、それが人形遣の頭へ、といふよりは寧ろ頸へ引かけられてゐる。頸といつても、女人形遣は髪をお下けにして、その下けた髪を頸の邊りの處で一種の金具を以て結へてゐる。その金具の孔へ人形からの糸は通されて、その糸が自由に動くやうになつてゐるので、女人形遣が首を動かすと同時に、人形も首を動かして頭をふる事が出来るやうになつてをり、人形は可成り微妙な動作をなし得るのである。これが第一の發明である。

それから人形の手は人形遣の両手にとりつけられるやうになつてゐるので、文樂の一人遣の人形の如く、左手がぶら／＼する心配はなくなつてゐる。ところで文樂の人形は大抵三人で遣ひ、三人の中の主なる人形遣が人形の頭と右手を遣ひ、次の人形遣が左手丈を、第三の遣ひ手が兩足を遣ふことになつてゐて、あまりに胴がぶら／＼することはないが女文樂では人形遣が両手で人形の両手の先をもつてゐるのであるから、一寸考へると人形の胴がぶら／＼したり、だらりと垂れたりする心配がありさうに思はれる。そこに第二の發明があつて、胴は至つて安定して、少しもぶら／＼もせねば、垂れ下りもしないのである。即ち人形の全身を支へる爲に、女人形遣は一枚の鐵の板様の胴巻を着けてゐるので

あつて、それには中空の二本の鐵の管が垂直に結びつけてある。人形の脊にはまたかぎ形になつた小さい金屬の棒が一本あつて、此二本の金屬の棒が、人形遣の胴に巻きつけてある金屬の管の中へ、うまく差込めるやうになつてゐる。差込まれた金屬棒は、管の中で、上下に自由に運動することが出来、人形の運動を少しも拘束することなく、而も人形の全身を支持して立派に安定させてゐるのである。之が爲に人形遣は十分に安心して、宛がら自分の手を遣ふが如くに、人形の手、指、手首、腕などを自由に動かし、同時にまた人形の體をも勝手に遣ひ得るのである。

第三の發明は人形の足に關するものである。今日の文樂では、足のみを遣ふ人形遣が一人あつて、それが主なる人形遣の脇の合圖を受けて、それによつて足文けを専門に遣つてゐるのであるが、どうひいき目に見ても、文樂の人形の足の運動は可成不自然なものであり、それに足がぶら／＼して、又甚だ見悪いのである。處が門造氏の發明では、女人形遣が着けてゐる袴の膝頭のあたりに布をあて、そこに人形の足を巧に結びつけてあるのである。だから、女人形遣が足を動かすと同じやうに、人形は足を動かすことが出来、而もそれが自然であつて、文樂の人形の足の遣ひ方とは比べられぬほど、うまく動かされるのである。

つまり頭と、背と、足に於ける三つの新發明によつて、女文樂の人形遣は、人形を遣ふといふよりも、むしろ人形遣自身が芝居をするのと同じことになるのである。即ち人形遣が動くやうに人形は動き、人形を動かさうと思ふやうに人形遣自身が動けば、人形は自然に活躍してくれるのである。従つて女文樂の人形は甚だ自由なものであり、又文樂の人形の如く、之を稽古するに、首と右手に三年、左手に三年、足に三年などいふ苦勞をする必要なく、要領さへ呑込めば、直ぐにも人形が遣へるのである。それに之を遣ふに、文樂の人形の如く、三人でなくて一人でやれるし、而も女の子位

で立派にやれるのであるから、第一經濟的に面白いものでもあり、勞資問題などにも關係なく、發達する餘地が多分にあるのである。

三

或はいふであらう。――

何といつても女文樂人形は三人遣のおつとりした文樂人形とは比べものにならぬと。けれども女文樂には發達の餘地は尙幾らもあるのである。未だ實際なか／＼亡びなどはしない義太夫節淨瑠璃の存する限り、それは今後大いに發達してもいゝものであり、その見込があると信ずるのである。いな常盤津だの清元だの説教節だの浪花節だの、他のいろいろな淨瑠璃風のものゝ殘存する限り、かういふものに應用したら却つて面白いかもしれぬ――そんなことを考へてゐる人はまだないだらうが――かう思ふ時に、淺ましい、物質主義、營利一過主義、おつちよこちよい主義のみが天下を風靡する今日、女文樂人形の存在は颱風の前に、可愛い女郎花が露草でも見るやうな心地がして、涙ぐましい氣持をそゝられぬでもなかつた。が兎に角折角現れた一種の可愛い女藝術である、敢て文樂と競争なんかする必要もなければ、出來ないといつて悲觀する必要もない。それよりかむしろ他の淨瑠璃にでも應用して、變つた面白味、ゆかしみ、やさしみといふやうなものを出すやうにして貰ひたいと思つてゐるのだが、その後此女文樂はどうなつたのであらうか、私は桐竹門造氏の苦心と其効果を思ふて敢て盛んな發達を祈らないではゐられない。(昭和十一年六月再記)

文樂をのぞく

一

暑さの絶頂、路面では百二十何度といふ日を、久し振に歌舞伎座へのぞいて見ると、丁度鑿太夫の床。其熱心な藝に動かされて、餘り好きでもない作り話の『合邦』にうつとりさせられる。次の『大森彦七』の大隅太夫と伊達太夫との掛合は要を得てゐるが、新作物のせいも、人形の技巧には、まだ所々鮮かさが缺けてゐる。殊に千早姫を負ふたり面をとつたり着けたりするあたりの熟練が足らぬ。藝術は些細な點まで關心を要することを忘れてはならぬ。土佐太夫の『酒屋』では、此前の時と何の差も認めぬ。大病後の太夫の藝も少しも衰へてはをらぬが、人形の藝も進んではをらぬ。「今頃は」のあたり、文五郎はお園を玄關の柱に抱きつかせてゐるはいふ。けれどもそれからやがて思ひ出にふけるまでに、太夫との妥協が依然としてついでをらぬ。土佐太夫は、人形が歸つて来て、思ひ出にふけるまでの間に、間をおけといふ節付はないといふ。人形では、間をおいて貰へないので駈足で歸つて、次のポーズに移らねばならぬ。兩者の間に依然として融合がない。一寸妥協すればよいのだが、それが出来ぬのは、太夫も名人人形も名人だからかも知れぬ。名人同士の意地の張合、そこに渾然たるべき藝術に欠陥が生じてゐるのだ。その他にも人形の動作には、詞章との間に調和のとれてゐない、改むべき所が少くないやうだ。低級な見物の喝采をねらつた、場當りのみ求めることは、作品を

生かすことではない。生かさぬことは殺すことだ。自分達が死ぬことだ。他を殺して自も分死ぬよりも、他を生かして自分も生き、全體を生かす、そこに演劇の綜合藝術たる所以があるのだ。どちらでもゑらい方が相手を生かしてやるのだ。いや相手を生かしてやる方がゑらい藝術家なのだ。——三味線吉兵衛も、調子に乗ると、依然として太夫の一語一語に對してウン、ウンノといふ。これは恐ろしい自殺であり他殺である。それにしても土佐太夫のあの名調子を早くレコードに取らぬことは惜しい。太夫自身にも永遠に自ら生きる事だから早速に自ら進んでとつては？

二

津太夫の『吃又』は、吃り方に於て感心させられた。ラヂオで此前聞いた時より熱意が足らぬ感はあつたが、パスを巧に使つてゆく態度と技巧は見上げたものだ。それにしても吃又の女房のお喋りはもつとテンポを早めてはどうだ。尤も地合の處は仕方がないが。それにつけても思ひ出すのは此間歌舞伎座で見た仁左衛門の女房である。仁左衛門はあの地合の處などを（自分が義太夫節に通じてゐるせいも）頭においてゐたためか、喋り足らなかつたやうに思つたが、義太夫節の地合のことなどを思ふと、一體で口の動きの早くない仁左衛門には、あれより早いテンポを求めるのは聊か無理だと思つた。これは餘談だが、近松の『傾城反魂香』を改作した此『名筆傾城鑑』の吃又には、あんなに女房の喋り場が少かつたかしら、修理の介との張合の場はあんなに略されてゐたのかしらと思つてゐると、近松にはない管の誓願寺佛の本願の處がかつぎ出される。怪しんで歸つて近松を引出して見ると、矢張誓願寺佛云々の件はない。それにしても此誓願寺佛のけしこくの話といふのは、成るほど此頃自分の調べてゐる古淨瑠璃『誓願寺本地』に出て來る話だ。

矢張新しい淨瑠璃を知るには、古淨瑠璃が必要なことをしみ／＼思はされる。

終の「重の井」は楽しみにしてゐるが、「お側の衆にはやされて……」からしかやらぬ。それに伊達太夫といふ人には「大森彦七」の千早姫では感心したが、此處では感心しなかつた。全體に心には力があり熱情はあつても、音聲其者に力がない。低聲をうまく用ふる事を知らぬ。いやその出来ぬ性質の此人は、力を出す上に於て既に先天的に損をしてゐる。今一工夫をせぬと、語り口に氣品がない。田舎の太夫をきいてゐるやうな恨がある。もつと中音と低音の出し方を工夫して、壯重さと力を表現することによつて、氣品をそなへるのが第一だ。

それにしても人形には種々な註文がある。重の井の述懐「現在我子に馬追させ……」のあたりの人形のこなしは詞章が顧られてをらぬ、もつと工夫がいる。それから、「先づ早う出てくれと泣く／＼いへば……」のあたりで、重の井が三吉をつき仆すのは薬がきゝ過ぎる。仆さなくても何とかして意味を表現出来よではないか。

何はともあれ「吃又」でも「重の井」でも、改作で氣には充たぬが、大近松の原作に縁が多い丈けに、そしてまた「大森彦七」にしても近松の改作の變曲だけに、まあ／＼私にとつては此二の替りは拾ひ物であつた。(昭和十一年七月三十日記)

帛人形を見る

帛人形の活動する様、云ひかへれば人形の遣ひ方を一度見ておきたいと、久しい間念願してゐるが、昭和十一年七月二十日午後から三越のホールで、若松派の説教淨瑠璃によつて行はれるのを見て貰へたのは嬉しかつた。「三番叟」は只太鼓のドンといふ音につれて、三番叟が躍り出て、ガチャ／＼いふ拍子につれて舞ひ、「我此處より外へはやらじ」との處を二人の人形遣の内の一人がいふ丈けで、あとは身振りのみで、何も無い。蔭の方で水の中で弾くやうな三味線の音がしてゐる。此場合の人形の遣ひ方は、今日の文樂式に、一人が胴と右手を遣ひ、第二の一人が左手を遣つてるやうだが、足を誰が遣ふかと明かでない。何だか第二の遣手が、手を遣ふ必要のない時に、兩足をつかふ、いな、兩足を遣ふ必要ある時には、左手は遣はぬらしいと思つた。

次の「小栗判官萬屋の場」といふのこなつて見ると、若松若佐太夫といふが、甚だ若くない老人が小さい聲で、爪びきのやうな細い音で彈語りを始め、大分長く序の文を語つて、人物の言葉が始まると、三尺計りの手摺の下から、万屋の主人と照手姫とが、まるで湧くやうにひよつこり出る。宿の主人を二人でつかつてゐるが、矢張左手を第二の遣手がつかひ、それが足を動かす時には、手をやめて、兩足の方にかゝるらしい、まだよく分らぬ。

ついで「照手二度對面の場」といつて、判官が餓鬼阿彌から眞人間にもどつて、再び照手に會ふ場となつて見ると、判官にはちやんと三人の遣手がつく。全く文樂式に、第一の遣手が胴と右手、第二が左手、第三が足丈けつかふのだ。これですつかり文樂式遣方の眞似をしてゐることが分つた。つまり眞似をしたものだ。何故帛人形としての特色を出さぬのだ。そして二人遣の場合には、想像通り、足を動かさねばならぬ時は、左手を閑却する、左手を動かさす必要のある時には足の動きはごま化して、いゝ頃に遣ふらしい。

女の人形には矢張足がなく、而も照手は一人遣だ。裾から手をさしこんで、立つたり坐つたり、前進後退、又はくりと廻つたりして、同じやうな動作を矢鱈くり返してゐる。それが身振りといふのか知らぬが、頗る不自然な動作をする丈で、手は動かさないからでもあらうが、一向動かさない、只時々首を少しかゞめる丈で、遣手の腕が動くにつれて、少しばかりゆらりと揺る、全く素人でもやれさうな動作をするのみである。まことに貧弱な遣ひ方である。ところが此貧弱な遣ひ方こそ本来の遣方かも知れぬ。一體で古い時代の人形の遣方といふのは、實際かうしたものだつたらうと思はせられる。

序に人形の頭は、男も女も、凡て掌中に入りさうな大きさだといふことを附加しておけば、あとの體の各部の大きさは自ら想像が出来るであらう。それから、語り方は、勿論人物の對話の時は、全く寫實的で、三味線が入らず、地即ち叙述の文とか、述懐の文の時丈け、三味線が入ることは、義太夫節と同様であるが、三味線の弾き方は、素晴しく素朴な音のみをだすだけだ。平生若松若太夫の弾く三味線などよりは、遙に單調でもあり簡單でもあるものだ。撥は鼈甲らしいが、音はまるで板でもたゞいてゐるやうだ。三味線は普通の三味線より遙に小さく見え、子供用かと思ふやうな気がする。兎に角こんなものが今日存在してゐることは愉快だ。序に家元若松若太夫の弾き語り方は、もつと派手だが、それは私には却つて面白くない。

帛人形の沿革や歴史については、此數年來、民俗藝術の研究が盛になつて、屢説かれてゐるから、今更述べることをひかへる。

歌舞伎座の重の井

「重の井」といふ芝居はよく知られた淨瑠璃劇でありながら、近來あまり屢歌舞伎には出されぬ。いや二流の歌舞伎では度々上演されてゐるのに、大歌舞伎で上演されたのを私は今度始めて見た。大阪では度々上演されるらしいが、兎に角東京の大劇場で私が見たのは始めてだ。それ丈け私は非常に興味をそゝられてゐた。たつた此間も文樂で同じ物を見出し、身振劇でも見たくせに、大劇場の歌舞伎座では如何に演ぜられるかと私の關心事であつたのだ。

先づ番附を見て、重の井を大阪の梅玉がやるといふのはいやだが、三吉を、あの好きな子供の慶三がやるといふのは嬉しいと思つた。ところが慶三の本當の三吉を見るに及んでがっかりした。黄色いセンチメンタルな聲をわざ／＼出して、てんで三吉らしくない、ひぬかの八藏を殺してもするやうな三吉には少しもなつてゐない。おまけに相の土山の歌が、あの高い調子の聲ではちつとも歌へない。淺草あたりの劇場でやつてる子役の上に一步も出でゐない。只可愛く／＼と仕立て、そのくせ動作はつまらない型にはめすぎて、やたらに芝居をやらせようとして、原作乃至改作が求めてゐる味はまるで出されてゐない。一體演出者が三吉といふ役を充分に理解してゐないと思はれた。作品の無理解！ それ丈けでもう演出の價値は殆んどなくなつてゐる。

梅玉の重の井に至つては豫想以上につまらなかつた。男役をやらせると相當にやれる優だのに、老ぼれ切つたのか、女型になるとまるで駄目だ。第一音聲が一語一語あとの方半分がかすれてしまふ。土間の十番目にも、既にきこぬことが屢ある。いやにやさしい女らしさを科白共に見せようとするのはいゝが、チョボの鏡太夫との呼吸もちぐはぐだし、(そのくせ太夫も頗るまづいが)音聲に力がない爲に、あの重の井の心持は身振に丈けは現はれても、白の上に出ないが爲に、甚しく倦怠を感じさせた。梅幸にやらせたらなあ! 今にして大に梅幸を憶ふの情が頼しく私の胸にせまつた。私はむしろ歌扇の方がもつとうまくやると思つた。延見子にやらせてももつとうまいだらう。權十郎の彌三左衛門は味があり、十六人も腰元をならべるとか、源五左文五左だとか若菜だとか、原作の名をその儘人物の上に出したりしたのも親しみがあつたが、矢張淨瑠璃とちがつて、奥などをもち出さぬのは物足らぬ。それにあの建築の貧弱さはどうだ。あれで大歌舞伎の大道具といふに至つては只呆れる外なく、淺草あたりのそれと何の選ふ所がないものだ。矢張猿之助親子の「壽式三番叟」の踊丈けが朱玉だと思つた。(昭和十一年九月二日)

江戸土佐淨瑠璃解題 (五)

○なにはものがたり

【體裁】 やはり土佐少掾物として、現存本中少いものゝ一である。半紙形八行、柱には五十丁となつてをれど、飛丁が多く、實数は四十七丁である。初行には、外題が以上の如く假名書になつてをり、巻尾には「難波物語」とある。木下甚右衛門板。

【刊年】 前附の一丁には、只土佐少掾橘正勝の字が見えて、例の「寶永五初秋」の文字はない。

【形式・曲節付】 六段曲。各段首尾に形式句はあるが、初段は只「扱も其後仁王八十八代……」と始まつて、序の文はない。曲節付は例によつて多く、第五段には、姫と道秋との對話がシテとワキの掛合になる指定があり、第四段に、主人公でもない關白の息道秋の難波までの道行がある。

曲節付中、やゝ珍らしきものには左の如きがある。

片ヲトシ、片ナヤシ、モロナヤシ、七ツユリ、イロシナリ、ウタイヤツシ

【梗概】 第一「さて其後仁王八十八代のみかどをば後深草の院と申奉りめでたきみかどおはします……」、帝難波の梅を觀覽あらんとて、百官を従へて難波の里へみゆきある。かねてよりの仰によつて、難波の庄芦屋の左衛門家年、

第三郎年秀、伊原藏人宗廣が御迎に出る。家年には二子あり、長は女にておしかの前といひ、大和春日大明神の申子、弟を月若といふ。梅見の御滞在中、關白道家の子道秋はおしかの前の色香に迷ふて、その夜ひそかに姫の室の戸をたたく。その中に又しても誰か忍び来て戸をたたく。姫は已むなく、道秋を先づ室内に忍ばせる。二番目に忍び来たのは伊原藏人宗廣にて、今まで再三姫に縁を求めたが、「その身ふぜうのもの」なれば、家年が承引せずしたので、今は直接に口説きに來たのである。そして強ひて妻戸を押開いて入らんとする時、家年の第三郎年秀が來て、宗廣をとがめ、明日梅見の勅使が立つたからとて、御庭の掃除にと引ばつて歸る。それをきくと、道秋も已むなくかりそめの戀をはかなみつゝ別れをつけて去る。

さて梅見の日になつて、まだ開かぬ梅を窺覽の最中に、忽然異形が現れて梅に並び立つ。宗廣が之を討たんとするを家年が止めると、異形は「我は是百濟國より此國に渡りつゝ君を尊み國土を守る王仁といふものなり」といつて、袂をかへし袖をかけて、「萬機の政穩かに慈悲の浪風おさまりて君よく船をうかめつゝ臣はにごらぬ水の上高き家の御せいには民のかまども賑ひて……」と仁徳帝の徳をたゞへ、更に「さて神木は花の兄和漢に徳をあらはして……春鶯囀の樂の音、春風ともるとともに、花をちらしてどうどうつ……今の太鼓の音によそへていでゝ花を開かせてみかどをいさめ申さんと」いつて、左右を招くと「ふしぎやな、一どに梅花開けつゝ、其身は梅にかくれ」る。かくて花木の精を示現せしめたといふので、家年は天晴文武の勇士だとたゞへられる。

第二 その後あし屋の左衛門は、功によつて難波の庄七百餘町を給はり、左衛門の頭に任じ、第三郎は瀧口になされ、帝は還御遊ばされる。處が宗廣は何の得る處もなかつたので、大に家年を妬み、難波の片ほとりに住むばいとうと

いふ盲人について、家年が昇殿をのぞんで琴を學んでゐるのを利用して、彼を討亡ぼさうとする。それが爲には、先づ有馬彌五郎といふ太刀の名人を、偽盲人に仕立てゝ討たしめようとするのである。さて或夜の事、宗廣に買収された梅とうのもとへ、秘曲「流泉秋風」の傳授を乞ふべく出かけた家年が、暫く此秘曲を聴いてゐると、「まことにあくごうぼんのふの迷ひもはれんと思はるゝ」曲である。従つて曲中に家年を討つ約束をしてゐた彌五郎も、感に打たれて討つことを忘れてゐた爲、梅とうは三度も秘曲を繰返し、而も調子をかへたりして合圖をしたので、家年の氣づく所となり、一大騒動になつたが、結局家年は負傷する。怪んで飛込んだ臣の八郎は、主人家年を引かつき、梅とうを引すつて歸る。かくと知ると弟年秀は、直に宗廣の家を襲ふ。そしてさんくの戦の後に遂に宗廣を討滅す。

第三 其夜あしやの三郎年秀は梅とうを引立てゝ都に上り、參内して、藏人宗廣の企みにて、兄家年は傷けられ、遂に死んだから、兄の仇を討つた旨を言上する。そして家年の姫と息子は此春死んだといつて、兄家年の所領を賜はり、難波に歸る。

さて家年の姫小鹿の前は戀路に迷ひ、藤原の道秋を思つて、金岡が筆にて、女鹿がつき戀ふ風情をかけた色繪をかけて、望の達せんことを氏神に祈つてゐると、忽然としてその繪が姿を消す。そこへ都より年秀が歸り、兄の所業は面白からぬとて、所領は年秀に賜はる御判を頂いた旨を告げる。一同驚き悲む中に、月若は、父が琴の秘曲を學ぶ爲に盲人の家へ通ふたを不覺といはれ、計略にかゝつたをとがめらるゝは心得ぬから、上洛して父の不名譽をすゝがんといふと、年秀は自分の罪がばれんことを恐れて脅迫する。けれども月若は、「共にのぼつて今一たび、申上げんとの給ふこそ」叔父の慈悲なるべきに、「さては佞人ござんなれ」といひつゝ、喧嘩別れをなし、最初叔父年秀の上洛に自分が伴

はなかつたことを今更になげく。

第四 藤原道秋は戀人が死んだときいて、悲のあまりに小倉山の山莊に引こもり、横笛を吹いて獨り慰む。そこへ一匹の鹿が来て、姫戀しくば難波の里へ行きたまへ、御たいめん疑なし、我は春日の神勅なりといつて姿を消す。道秋は乃ち姫が死んだといふは年秀の偽にて、悪計をめぐらしてゐるのだと思ひ、先づ姫の存否をさぐるべく、めのとのとねりの介一人をつれて、難波の里まで淋しい道行をする。

第五 あし屋の母子三人は今や、臣共からもみすてられて生活にも苦み、「あしやのさとに立出て、色よきあしを賣給」ひ、今日もそのため市へ出る。道秋は此里に来て姫の行衛をきくが誰も語らぬまゝに、花うる市を眺めて憂をはらしてゐる。そしてあしを賣りに来た若き人々を見て、道秋等二人はいろ／＼の問答をなし、遂に互に思ひ思はれた人であるとかかり、打つれ入つて深き契を結ぶ。(この邊謠曲が、りの調にて書かれ、シテとワキの掛合になつてゐる。)

第六 關白道家は我子道秋の行衛が分らなくなつて騒いでゐる處へ、とねりの介が歸つて事情を語るが、道家は親の定めぬものとの契は承知ならぬといふ。けれども北の方は、何事も皆縁だといつて切に請ふので、道家も道秋に遇ふて見ると、小鹿の前も氣品高き女なるに喜び、此上は年秀の悪事をあばかんとて参内し、一切を奏上して、折柄上洛中の年秀を召して罪を問ひ、兄の仇をうつた功によつて、死をゆるし、北面の侍に預けられ、月若には父の所領をお下しの繪旨を給はる。

【評語】 多少の柔か味もないではないが、調子の低い曲である。帝の觀梅に功があつた難波の家年をねたんで、宗廣が家年を殺すと、その仇を討つて、家年の弟年秀が、兄の所領を詐偽によつて横領する。家年の姫を戀してゐた關白の

子道秋が、觀梅の折に見そめた姫をたづねて、それから年秀の悪事がばれ、家年の一家が舊に復するといふのである。

主人が謀計にかゝつて亡び、横領の難にあふた後に、妻子が一旦窮迫に陥るが、悪人が亡びて再びもとの如く家が盛へるといふ、甚だ舊い仕組のもので、むしろ土佐少掾のものとしても新しくないものではないかと思ふ。

第一段の蕾の梅を一時に満開させるといふのは機巧仕掛の上演であらうし、金岡の畫いた小鹿の繪が、姿を消すといふにも多少の仕掛が用ひられただらうが、あまりに不自然な結構は多くない。一體で詞章にも、曲節付の上にも、文章の上にも、謠曲味が多いやうに思はれ、殊に第五段のシテとワキの掛合のあたりなど、それが著しいやうに思はれる。

【原據】 謠曲『難波』に負ふ處が多く、第一段の趣は殊にさうである。

○養 老 瀧

【體裁】 半紙形八行、四十二丁本。初行に「養老」とあり、奥に『養老瀧』とある。前附には刊年なく、「土佐少掾橋正勝」の字のみが見える。板元は木下甚右衛門。

【刊年】 前附に太夫名のみあつて、例の刊年の「寶永五戊子初秋」の字も見えず、従つて刊年も上演年も不明。

【形式・曲節付】 六段曲。各段首尾に形式句あり、次の如き曲節付が主なるものである。

玉ノフシ、トナセ、ナガラ、ナダキフシ、シクレヤツシ、ヘイケ、マイヤツシ、アフミ、アフミウツリ、キヌタウツリ、サツマウツリ、片タ節、片タヤツシ、片ナヤシ、ウタナヤシ、サナイ、サ、ナミ、キン詞、本地、ユリヤツシ、哥トメ、ユリウツリ、色サゲ、上諷、ツキ入、本フシ、本レイセイ、クドキ、カサイフシ、リウクワ、七ツユ

リ、三ツユリ、二ツ三重、早三重、ハコビ、一ジノミ等曲節付多く、忍の段、道行、四季の段の節事がある。

【梗概】 第一 「抑是は唐の玄宗皇帝の臣勇將軍し、めいとは我事なり、扱も是より東に當て國有、名を日本と名づく」で始まる。し、めいは此國の主當時女院だから、打従へ來れとの宣言を受け、官人じやまん、がまん、がんまく等を従へ海路此國につく。さて將軍が形勢を伺ふと、勇智の國にて、容易にとれさうに見えぬ。折柄釣をしてゐる童子にきくと、其所は松浦瀉と呼び、將軍が漢土より入來の事傳はり、國民皆待つてゐたといひ、更に國民は何を慰とするかと問はれ、「神代より歌をよみて有がたくも天地を動かし鬼神を感ぜしめ、男女をなかだち又はたけきものゝふの心をやはらげ、其外をそき花咲かせ、かんばつに雨ふらせ、ようをけし病を除く、奇特數々、ありそうみの濱のまさこのこの葉はつきぬ、和國の人のみか花に鳴く鶯、水に住む蛙まで唐土は知らず日本には歌をよみ候也」と答へ、それからいろ／＼と明智の程を示して將軍を驚かし、やがて彼等の來朝を奏上せんとて童が立去ると、大隅の隼人の正が急き來つて迎へる。將軍等は舟より上つて貢の品をもつて都へ急ぐ。

其頃の帝を元正天皇と申し、攝政を舍人親王、石の上丸不比等が左右の大臣たり、めでたき御代と榮えてゐる。此度唐土より來貢とき、若し野心あるにあらずやと、博學の阿部仲麿を童子にしたて、釣人として番をせしめてゐたのだが、彼は今勇將軍の來朝の趣を奏上して御感を受けた處へ、隼人の正が勇將軍をつれて參内する。貢物の中には八尺計の猛虎がある。やがて引手物として大力無双の石山源太が大鎧をもち出す。唐の下官數十人かゝつてその鎧を持上げるが動かす、がまん、がんまくの二人が汗だく／＼でやつとかゝへて持運び、やがて二人は恨をはらすべく、相撲をとつて力比べをせんといふ。源太は先づがんまくから、ついでがまんとつぎ／＼に負かすと、遂にじやまんとがまんの二人

が飛つて來る。源太はそれでも泰然として打破らうとするが、隼人の正等が勅命によつて差止める。

第二 勇將軍等はいよく野心を現はし、先程の危険に際して仲裁してくれた禮をするとして、隼人の正を招きて馳走し、實は日本を攻取らん計略にて來たが、其第一歩として仲麿の家人石山源太を討取りたく、ついでには仲麿の館を夜討の計劃なれば、同心になつて案内を頼むといふ。隼人の正が之を拒まうとすると、一同は頂かりの貢物猛虎を檻から出してけしかける。そして事成就せば隼人の正を國王として仰がんとし、隼人の正は即ちその詞の證文をとり、今宵を期して仲麿の館へ討入を約束する。

其夜隼人の正の手下の案内にて、勇將軍は討入をなすが、大戦の後がんまくは石山源太に首を討たれる。

第三 勇將軍及び隼人の正等は一旦退陣して評定する。そして隼人の正は參内して、漢使の罪を許され、同時に仲麿との和談の宣言あらんことを願ふところへ、仲麿等が參内して漢人の罪を處罰されんことを願ふ。けれども遂に異國人の事ではあり、御治世の初だからとて隼人の正の望通りになる。

(こゝに忍の段なるものがあり、やんごとなきお忍びを、仲麿が誠忠を盡して御諫めする場あれど、到底記述するところが出来ない。よくもかゝるものが語られたものと思はれる。段はその終にて結はれてゐる。)

第四 仲麿容顏美なるが爲に、あるべからざる運命に陥らんことの恐ろしく、思ひ煩ふ折柄、不思議の靈夢を感じ、美濃國たど山に身を隠し、不忠の人となるまいと決心すると、學問の功を成さんとして來た今迄の身はかなき運命が悲しいが、義の爲に榮耀をすて、伯夷叔齊を學ぶ身の潔さに心勇みて、石山源太と共に密に都を退ぞく。それをきくと隼人の正は宣言と偽つて彼を討つべく、じやまん、がまんと共に追ひゆく。

道行。「花の都を思ひ切り……」から、東海道を下つて、あほのが原にて、扇を芝にしいてやすむまで仲麿の道行が
つづく。

さて仲麿源太二人が休んでゐる處へ、隼人の正等が追つき來つて討つてかゝる。武術の達人なる仲麿と源太が、勇を
奮つて二十三人を切ると、じやまん兄弟は例の虎を放つて、二人にけしかける。源太は虎を見るなり飛乗つて三刀さ
し、飛下りて兩あごに手をかけて、虎を二つに引切り、並木の松をねち切つて大勢に割つて入り、はらりくと打ち仆
すと、敵は皆行衛知らずに立去る。

第五 都には、帝御惱あつて、花の御黒髮白髮に成り給ふと承る處へ、美濃本巢郡の民が參内し、去九月九日、たど
山に俄に泉湧き出で、瀧に流れ、其水は「人の飢を助け、諸病平癒、長生不老の水にして、白髮も黒くなり、老を養ふ
徳有ゆへ養老の瀧と語」と奏する。帝直ちに之に行幸遊はされることになり、お着の後、親王と官女と二人にて瀧を
叡覽あらせられる。

四季の段。「年をへし美の、中山道遠く、身は板橋の霜にたゞよひ白頭の雪につもれども老を養ふ松かけの泉の瀧は
藥にて、朝夕通ふ老の坂ゆきも安き立居かな……」。やがて瀧主の翁を召して、親王は來歴をたづね給ふ。翁は四季
變轉の景を見せつゝ、或は重陽とか菊慈童の由來をかたりなどして君をもてなす中に、帝の御髮は見る／＼黒くなる。
やがて雪ふる中にて翁は二八の青年となり、岩かけより仲麿を伴ひて出で、自分は元來周のじどう、今はほうそと申す
仙童にて、仙眼を開いて見ると、仲麿ほどの學童はない、故に日本にめでたき賢臣たるべきを思ひ、はごくんである。
願くは賢臣として用ひたまへとて、帝に従はせて仲麿をかへす。

第六 其後九州まで逃げ歸つた勇將軍隼人の正等は、更に漢土から渡航の兵を合して攻上るときいて、舍人親王は仲
麿と共に百萬の大軍をもつて之を討ち、先づ石山は隼人の正を亡ぼし、更に大戦の後に神風の助によつて、唐船を追返
してしまふ。「神と君との中つ國、他の國にはあらかねの土も草木も我大國、千秋萬せいめでたしときせん上下押なへ
て皆あふかぬ者こそなかりけれ」

【評語】 唐の玄宗の時に日本を亡ぼさんとして勇將軍なるものが來貢し、阿部仲麿を先づ亡きものにせんとして様々
手だてをするが、石山源太がつきそつて、武勇を揮うて仲麿を保護する。その中に仲麿は美顔なるが爲に、宮仕が苦し
く恐懼して、美濃に退隱する。たま／＼養老の瀧のことが御所に知れて、帝が行幸あり、瀧の主たる仙童の勸にて、仲
麿は帝に従つて再び都に歸り、やがて唐軍の來寇を討平けるといふのである。仲麿の傳記や、養老瀧の傳説や元寇の乱
などをつきまぜて想を構へたものと思はれるが、仲麿の美貌なることに對しては、筆にすることも出來ぬほどの事件が
仕組まれ、それがむしろ中心の着想になつてゐるが、よくもかゝるものが上演されたものと驚かれる。

【原據】 本曲前半は萬治三年のさつまた夫藤原直政の正本『箱根山合戦』の改作にて、仲麿の家臣の豪勇石山源太と
いふ名や、唐から來たといふ、じやまん、がまん、がんまくなどは皆『箱根山合戦』からそのまゝ借られた名である。
後半には謡曲『養老』が取入れられてゐる。

【出處】 養老瀧に關する出處は『續日本紀』で、その元正天皇の詔に「朕以今年九月一到美濃國不破行宮留連數
日。因覽當耆郡多度山美泉自鹽手面皮膚如滑。亦洗痛處無不除癒。在朕之躬其驗。又就而飲浴之者。或
白髮反黑。或類髮更生。或闇目如明。自餘痼疾咸皆平癒。……」とある。

兒島高德の淨瑠璃

昭和十一年十月一日發行の淨瑠璃時報を見ると、「備後三郎高德の淨瑠璃本現はる」と題して次のやうな記事を掲げてゐる。

備後三郎兒島高德に關する事蹟は殆んど太平記に據つてゐるが、これとは餘程觀點を異にした高德の事蹟を中心とする未刊行の淨瑠璃本が、津山商業學校教諭石井楚江氏の手によつて發見された。

この淨瑠璃本は、今から約百八十年前、明和年間丹念に書き上げられたもので、紙數百二十餘枚、表紙と續く二三枚は破れてなくなつて居り、末尾に「明和六年己丑年五月吉日枝川輪子爲磨作之、花押」「他に寫本なき故大切にされし」と添書されてある。

内容は元弘の亂から書起して、高德兄弟の忠勤振を五段に收め、文章竝に文字は實に立派な出來榮えで、作者の爲磨といふ人が如何なる人物であるか詳かでないが、その學識文藻の非凡であることが窺はれ、その全部が史實に據らぬとしても關係方面の地所名、傳説等が意外に正確である點から見て相當根據あるものと思惟され、高德の研究上好資料であらう。

太平記に據る在來の所説と異つた點を三、四摘記して見ると

1. 警固の侍佐々木判官入道道譽が北條方でこそあれ、内心は純忠無比の者で、身をもつて後醍醐天皇をお護りしたと
2. その道譽は高德の十字の詩を詠んでいよく高德の忠誠に感じ、それとなしに拜調をさせて、高德は天皇に、自分の意中を細々と言上したこと
3. 天皇の院庄における行在所が今までは守護職の館のやうに傳へられて居たが、これには清眼寺となつて居ることなどである。

明治以後某博士などが院庄の故事を疑つて、警固の侍の中に、佐々木入道等學者がゐるのに、十字の詩を解する者なく、天皇にお目にかけて點など抑々怪しいと云ふた説はこれによつて自然解消され、また近時行在所に就いて、清眼寺説も唱へられてゐる折柄注目を要するところである。

かういつて同紙は更に發見者の説として次の如く掲げてゐる。

明治以前における高德公の歴史的記述は、太平記のみと謂はれてゐるところへ、この淨瑠璃本を見出したのは大變うれしいことで、何かと非常に得るところがあると思ひます。内容を史實として全部受け入れることは出来ませんが、郷土本位にその地名や傳説を意外に正確に、しかも多分に取り入れて居る點、および太平記の所説と異つたところが非常に多いことは大いに注目研究の價値がありますし、全篇に亘り勤王精神が高唱され、若しこの淨瑠璃本が當時刊行されてゐましたら、わが國民の高德觀は今日のものとは餘程違つたものとなつてゐたでせう。

ところが此記事については、二つの點から後人の爲に記しておくべきことがある。其一つは高德に關する淨瑠璃がこれまででないといふ所説である。これは今日まで古淨瑠璃が充分に研究されてゐないから已むを得ないことでもあるが、私が萬治頃の古淨瑠璃と思はれる『後醍醐天皇』を親しく調べた所によると、それは全く高德中心の作であるといつてもいい位に、全曲高德の忠勤物語である。高德を抹殺する處か、むしろ名和長年を無視して、長年の行動までも高德の行動として脚色されてゐることの多いほど、高德本位の淨瑠璃である。珍本であるから一般の眼にふれる機會が少いが、私はそれを小田文庫で嘗て見せて貰つて、その寫眞までもとつて來てゐるのである。高德に關する淨瑠璃がこれまでなかつたといふ説は、これで完全に解消する筈である。

第二には淨瑠璃に記されてゐる記述を、直ちに史實として見ようとする前の淨瑠璃時報の記事や、發見者の説が餘りに乱暴な冒険であることである。こんなことは歴史家の一笑に付することであらうし、問題にもしないことであらうから、言を費すまでもないことであるが、作者の史實的考證でも添へられてゐない限り、文學的産物を數百年の後になつて、史實を書いたとか、史實によつたものと見るのは全く無理なことである。そんな眼で見たとしたり、『後醍醐天皇』ですら、大問題を引起すに足るほど、『太平記』には見られぬことばかりにみちてゐるのである。けれども今私は此處に『後醍醐天皇』が如何に『太平記』と異つた事件を扱つてゐるか、それが如何なる作かを紹介する意もなく、望の人は、原曲を閲讀するか、私の近く公にする『古淨瑠璃研究』についてそれを知られるかにまかせておきたい。

最近見た演藝

一 新宿の生玉心中

明治座の左團次一派の『慶安太平記』の丸橋忠彌にしても、『神靈矢口渡』の頓兵衛内の場にしても、或は『連獅子』や『黒手組曲輪達引』にしても、見るときには、何れも同程度のもので、それほど悪くもなく、又これぞといつて、殊にすぐれた作とも思はず見てゐたが、二週間もたつた今日となつては、何れもが餘りに頭に残つてゐないのがおかしいと思ふ。

さらばといつて歌舞伎座に於ける十月興行中『鞍馬獅子』も『三社祭』も、まして『乗合船』も、あんまり胸を打つでもなく、こしらへ物の感の強い新作物の『雪地獄』などよりか、同じこしらへ物ならば『近江源氏先陣館』の盛綱陣屋の場の方がずつと私の心を引きつけた。高綱の一子小四郎に、祖母が死をすゝめる場では、淨瑠璃を讀んだ時ほどの感銘は得られなかつたが、盛綱が高綱の首實檢をする場には、吉右衛門なればこそと思はせるものがあつた。

何にしても十月の出し物では、新宿第一劇場の『生玉心中』に私の興味がつなされてゐたが、さて行つて見ると、井手蕉雨といふ人が近松物を改作して、昭和九年に歌舞伎座で羽左衛門の嘉平次、左團次の父親、松蔭のおさがで上演されたものと同じ臺本であつた。大體の筋は後半近くまでは近松原曲通りだが、終になつて、嘉平次が長作を殺してわ

ざと、心中せねばならぬした行き方は、改作愚劇たる『時雨の炬燵』と同一筆法をとつて、劇的効果を半減するのみか俗つぽくしてある點が如何にも前回同様氣に食はなかつた。今の勘彌が嘉平次を、おさがを福助が、我當が父親を演じてゐる効果などは、問題にするにも及ばぬと思ふ。して見ると此興行では矢張『平假名盛衰記』の松右衛門宅の場が最も見答へがある筈だが、權十郎の船頭權四郎はいゝとしても、おまけに咽喉をいためたとかいふ我當が松右衛門とあつては、頭から問題にする丈けが野暮であらう。誰か「播磨屋」と聲をかけてひやかしてゐたやうに、矢張これは吉右衛門の畑のものであらう。(昭和十一年十月)

二 延若の碁盤太平記

昭和十一年の十一月一日、東劇で見た延若の『碁盤太平記』は、昭和八年二月に、鷹次郎が歌舞伎座でやつたのと全く同じものである。近松物かと思つて見てゐると、矢張近松物の名をかりた改作である。延若の由良之助にはむしろ死んだ鷹次郎よりか、引しまつた處があつたやうに思つた。でもあくまでセンチメンタリズムをねらつた俗向きなものである。女房と母親とを離縁したといひながら、二人はぢきに歸つて来て、裏へかくれてゐる。そしてあとでは顔を出して由良之助親子の出立を見送つて、見物を泣かせようとしてゐる。それが爲にひどく俗つぽくはなつてゐるが、わかりはよくなつて、役者にはしやすくなつてゐる。近松のやうに、二人に死なせたのでは低級な見物には物足りないのであらう。かうして今月も私の心を慰めてくれるものは何もなかつた。

(昭和十一年十月一)

三 群盜と吉野の盜賊

歌舞伎座の出し物に失望して觀覽をやめ、東劇の『碁盤太平記』にもあまりに感心しなかつた私は、求めて馬鹿になつて、明治座の甘いものを見た翌夜、築地小劇場に、新協劇團なるものゝ翻譯劇『群盜』見物にと出かけた。昔から新劇に狂的になつて、有ゆる翻譯物の上演をあさつた後、十年あまりも自ら新劇研究所を設けて、四五百人の研究生を指導して見て、いよゝ新劇に愛想をつかした私は、爾來新劇にあきゝして、此處數年新しい劇といふものに背を向けつてゐたのだが、久し振りにシルラーの『群盜』を見てせゝした。

要するに『群盜』は兄を父から引放し、父を監禁同様にして、家を横領し、横暴を極めてゐる中に、義賊の團長となつてゐた兄から攻められて弟は悶死する、兄は父を檻房から救ひ出すが、其子が盜賊だと知ると、父は驚いて死んでしまふ、自分の戀妻は一時弟の妻となつてゐたと知ると、その妻を刺し、自分は盜賊團から離れて罪のさばきを受けるといふ、昔からこの國にも有り來りの、所謂お家騒動物ながら、全篇が全く警句の連続、詩句の羅列から成つてゐて、心の底から微笑せしめ歡喜せしめずにはおかぬものがある。まことに世界的大詩人の作たることを思はしめると同時に、此劇に一回の入場料を拂ふならば、明治座などの入場料は五錢か十錢で澤山だといふ氣がするものである。兄になつた小澤榮、弟になつた瀧澤修、兩氏の音聲も美しく技巧も素晴らしいが、他の人々も生きゝした熱情の塊であることを思はしめずにおかぬ所がうれしい。

見物は少いが咳一つしないで、しんとしてシルラーの魂の叫その物に酔つてゐる。醉眼、爆笑、センチメンタルな

涙、そんなものは何處にも見られぬ。血、元氣、力、光明、希望、さうしたものが闇い劇場内に漲つてゐる。集つてゐる女性といふ女性が、皆眼のさめてゐるやうな、輝かしい顔をしてゐる。眼のあいた作りものや盲人ではないやうだ。見物の中には、休時間中に、豫備知識がないと分らぬといつて不平をいふ人もあつた。かうした只分ることを求めて、安價な涙を流したい、中年の男もないではなかつたが、大抵の見物は青年だけで、凡ての中で、私が最も老年であつた。兎に角「良心、天國までもなげすて、富を求めろ」やうな見物が少いのは何よりもうれしかつた。私は久しい間の眠からさめたやうな心で劇場を出た。

その翌々日は新橋演舞場に、前進座を見て驚いた。最初の作を見てゐると、何だか翻案物らしい。あゝ『群盗』の翻案だと思つて、プログラムを見ると、『吉野の盗賊』と外題して、シルラーの『群盗』の自由翻案だと出てゐる。翻案としては面白く出来てゐるが、前進座の出し物としては私には物足らなかつた。

次の出し物三好十郎作『嘯みついた娘』は純潔な田舎娘をかりて、所謂良家の内面を描いた皮肉なもので、存外面白いものであつた。此中からくすぐりを全く取去ると、もつといふものになつたらう。三番目の『勸進帳』は前回よりか非常にこなれて来たが、その代り情熱が少くなつたやうな氣がした。蝙蝠安の變曲ともいふべき『浮名三味線』は、あつさりしたのがよかつたが、一體でもつと上品な深味のものが望ましいと思ふ。(昭和十一年十一月)

江戸土佐浄瑠璃解題 (六)

○吾妻業平色小町

【體裁】 半紙形九行にて、他の同種の如く八行ではない。丁附には四十三丁とあれど、實丁数は三十丁。題簽なく、上記の題が初行にあり、終丁には「小町終」とのみ奥に見える。版元不明ながら、版の體裁からは木下甚右衛門版である。

【刊年・太夫】 本正本には土佐少掾の名は何處にも見えぬが、外題及び、土佐少掾語物目錄中の曲名から察して、土佐少掾の正本と斷定して誤はないと思ふ。例の前附もないから、刊年は一層不明である。

【形式・曲節付】 六段曲、各段首尾に形式句あり、初段は形式句からすぐに本文に移り、序の文はない。道行等の存在に關しては評語の項に記した。曲節付は多いが、次の如きが主なる珍らしいものである。

リウタツヤツシ、引取ハコヒ、モロナヤシ、オスフシクリ、本フシナゲ、サ、ナミ

【梗概】 第一「扱も其後陽成院の御時あほ親王の御末在原の業平とて公卿あり。」和歌に長じて男女皆之を慕ふ。家の執權に、立花追風とて知謀武勇の忠臣がゐる。御側去らずのわらはには陸奥しのぶの壺がゐる。又出羽の小野の良實の女に、小町とて色類なき官女がある。業平となれて淺からぬ仲である。或時小町の父良實が揚弓の會を催したとこ

る、業平中將と深草少將との間に争が起り、危くなつた折しも、小町が仲裁する。酒宴になると、酌人の女のわらはが、揚弓の始まりについて語り、一座をなごやかに散會せしめる。(この物語の處が一種の節事になつてゐる。)

第二 その頃、大伴黒主は、こはだの里のある女に忍び通つてゐたが、ある冬の事、怪しき者が道に仆れてゐるのに近づいて見ると、病人だといふ。よく見ると、それは甥の深草少將である。少將は小町に戀して、云はるゝがまゝに十九夜通ふて、明日は小町に遇へると思ふと心ゆるみて、「ほり水はだるにしみ通り、心もたゆるばかり」といつて泣く。さては業平を戀する小町にたばかられた汝は可憐だ、何とかして謀をめぐらして、本意を達せしめてやらうといふと、少將は喜びながらも、丁度小町から業平への玉章を拾ふてもつてゐたのを黒主にわたして、突然苦んで死んでしまふ。黒主は甥の恨をはらし、且つは小町が自分へもなびかぬ恨を報ふべく、例の玉章を携へて、禁裡に至つて、出鱈目をのべて、今夜忍べとかいた、小町の玉章を差出す。乃ち業平は勅説によつて召され、五條の中納言にせられ、小町は黒主に預けられ、業平が館は黒主にあげ渡せとの宣旨がある。かくて黒主が業平の館を受取らうとすると、留守の巨どもは頭として應ぜず、戦になる。戦の半に在原の行平が来て、勅勘をこばむなとさとして事靜まる。

第三 小野小町は黒主の手にわたりながらも、猶中將をのみ戀うて、「思ひつゝぬればや人の見えつらん夢と知りなばさめざらましを」と歌ふ。そこへまた黒主が来て戀を強ひる。小町は已むなく、脱出を決心し、今宵は母の忌日だから、明夜忍べといつて黒主をかへし、直に密かに忍び出て、路を迷ふ中、火影を見つけて宿を乞ふと、菴の老人は夜半に深草少將の姿となり、小町の側に近づいて「あらうらめしや君ゆへに此世のみかはめいとまで重ねてうきめを三つ瀬川沈みはてぬるくるしみを少しはあはれと思しめせ……」といつてかきくどく。(こゝが節事になつてゐる)小町は恐

ろしくなつて、夜半に目さめて逃げようとする、少將がすがりつく。やがて夜があけて見ると、菴と見えたは少將の墓である。其處へ少將と親しき、しんが僧正が墓参して故を問ふので、一切を白状する。僧正は萬事を引受けて、已がゆかりのものある關寺へ小町を送り届ける。

第四 小町に逃げられた黒主は、お預かり者を失ふた罪の恐ろしさに、業平の殘黨四五人をかりたて、首を討つて禁裡にまゐり、昨夜盜人が侵入して戦ふ中に、小町に逃げられたが、此者共の首を斬り取つて見ると、業平の殘黨と承る、凡てが業平の所業なるべく、彼を討伐の勅命を賜はれ、東國にありとさく彼を討ち、小町も捕へんと奏し、うま／＼と勅命を拜する。

さて業平はあとを追うて來た陸奥のしのぶの亟と共に、淋しき旅路を東に下り、むさしと下總の境の隅田川につく。そして「名にしおはゞいさことはん都鳥わが思ふ人はありやなしや」と歌つて、小町をしたひつゝ、舟より上つて、宮戸川のほとりに、怪しき小屋をしつらひて住む。

第五 其後、しんが僧正は小野良實、在原の行平と共に参内し、此度の事、實に小町のいたづらから事起れば、三族の刑に處せられ、業平を勅免ありたいと願ふが、折柄黒主の罪がばれて、業平小町はゆるされ、行平には黒主を召捕れとの繪旨が下る。

さて東の業平は、小町を戀ふて心が狂ふほどにくらしてゐる中、むさしの國入間の長者の女たのもの前は、業平を見て戀ひこがれ、菴を訪れ來て戀を求める。けれども業平は小町との仲を物語つて、新なる女をどうすることも出来ぬ折柄、行平等が迎に來り、一同打つれ入間の郷の姫の家へゆく。

第六 その中に黒主は業平を討たうとして来るが、業平の臣しのぶの巫は、また黒主を討つべく、業平は死んだことに云ひふらさせ、業平を縁結びの神として宮を建てる。人々の参詣する折柄、黒主は業平の死をきいて喜の酒宴を張る。此時業平は手柏といふ遊女に扮して黒主に近づき、忍ぶの巫と共に首尾よく黒主を生捕り、丁度尋ね来た小町と共に都へ上ることとなる。

【評語】 業平と深草少將と二人をかつぎ出して、小町をしたはせ、少將の死後は大伴黒主を活躍させて、盛に横暴をはたらかしめ、小町も業平も悲境に立たしめるのはいゝとして、五段目に至つて、又しても人間の長者の姫といふのをかつぎ出したのは何の爲か、業平の物狂ひを面白からしめようといふのはわかるとしても、その姫なるものが六段目では煙の如くになり、後半に至つて小町も少しも生きてゐない。ことに六段目では、色々な變名をかつぎ出して、それが結局實は業平であつたり、その臣であつたりするといふ書きぶりになつてゐるのは、土佐少掾の物にありふれた筆法ながら、如何にもあきくする。尤も人形を見てゐれば容易にわかることかしらぬが、讀んでゐたり、聽いてゐたりしたのでは、一寸頭をかきみだされるのである。

なほ第三段には、深草少將の亡魂の歎の節事があり、第四段には業平の東下りの道行があり、第五段には業平の物狂ひめいた節事があり、全體として色々な曲節上の面白味によつて技巧がこらされてゐるのはうれしい。さるにても共に比ひなき名歌人であり、古今無双の美女と美男とを取合せ、黒主といふ凡才歌人をかり來り、之を敵役として、才子佳人を悲戀に泣かしめる處、着想羨むべきものありながら、抒情味の割合に乏しいのは頗る物足らぬ。

【出處・原據】 『伊勢物語』、謡曲『通小町』及びお伽草子『小町の草子』等から構想をとつたもので、小町を多情

な女としてゐるのはお伽草子によつたものであらうが、黒主を業平の戀敵としたのは、井上播磨の語物たる『業平一代記』を改作したものと思はれる東京帝國大學圖書館蔵の古淨瑠璃『井筒』によつたものと思ふ。古淨瑠璃『井筒』では中納言忠興が井筒姫に横戀慕し、譏奏して、井筒はお預の身となり、業平は東國遠流となることになつてをり、侍女を通じて、忠興は井筒を口説くことになつてゐる。『井筒』の井筒姫を小町に、忠興に黒主をおきかへると、本曲になるのであるから、本曲が古淨瑠璃『井筒』を改作したものであることは疑ふ餘地がない。

謡曲『井筒』は直接本曲とは關係が乏しく、むしろ謡曲『關寺小町』とは多少の縁がある。尙本曲の構想に關しては、拙著『古淨瑠璃の新研究』の『井筒』の項參照を要する。

序ながら土佐少掾の段物集を見ると、例の小町が少將の亡靈に出遇ふ節事の所に、『通ひ小町』といふ題がつけてある。

【影響】 此正本の刊年といふよりも、上演年が明かでないために、その影響についても明言しがたいことが多く、紀海音作、享保四年豊竹座上演の『業平昔物語』とも關係はあるが、近松の作である『井筒業平河内通』や、元祿七年都萬太夫座興行、富永平兵衛作『業平河内通』や、安永四年四月大阪嵐座興行、奈川龜助作の『競伊勢物語』などは深い關係を認めがたい。又紀海音の『小野小町都年玉』や、それと酷似する『大和歌五穀色紙』と密接の關係がある。

○大塔宮熊野落

【體裁】 土佐少掾物の殘存正本として珍らしきものゝ一で、半紙形八行、柱には四十六丁とあれど、實丁は三十九

丁。初行に上記の外題があり、巻末には唯「大塔宮」とある。奥に木下甚右衛門版と見える。

【刊年】前附に、例の如く「土佐少掾正勝」の字は見えるが、例の「寶永五戊子仲秋日」の刊記も、これにはない。

【形式・曲節付】六段曲、各段首尾に形式句あり、初段は「さても其後」から、すぐに本文につづいてゐる。

三段目に、大塔宮の南都から熊野への道行があるが、それは『太平記』からかりたもので、それ以上多くを出てをらぬ。四段目にある熊野にての、観音への祝詞は節事として見るべく、五段目に於ける宮の忍びの場は、曲中最も目立つた場である。

曲節付は多い方で、次にあげたのは、目立つて多い曲節付である。

大ムスビ、スエムスビ、キンムスビ、ツメムスビ、小ムスビ、上ケムスビ、色ムスビオクリ、フシノリ、イロノリ、イロコトハ、イロサゲ、イロヲトシ、キンヲトシ、三ツ引、イロ三ツ引、イロセメ、イロクトキ、イロナケ、早ナゲ、本フシナゲ、イロシヲリ、早三重、一ツ三重、二ツ三重、シガノフシ、本フシ引取、キンフシクル、フシウツリ、ユリウツリ、片ツメ、クリ上ゲ、ノリミ、大ノリミ

【梗概】第一 本朝九十五代後醍醐天皇の御時、比叡山大塔の門跡を兵部卿親王と申奉る。當今此宮と心を合せ御策謀あつたが、事露見に及んで、關東方が宮を失ひ帝を遠島に流し奉れといつてゐるのをきくと、藤房は謀つて、一先づ帝に笠置への行幸を乞ひ奉り、時を見て四方に兵を募らせ給ふやうにと奏し、村上義光を招いて笠置の地理を述べさせる。

第二 やがて宮の御計畧にて、大納言師賢が天子に代りて山門にかくれ、一山の衆徒が之を守護する。六波羅に意を

通はず淨林房の阿闍梨は、事情をさすると、之を六波羅に報ずる。六波羅勢は直に攻よせる。村上是盛に智謀をめぐらして奮戦しつゝ、遂に宮を南都へ落し奉り、その後を追つて急ぐ。

第三 兵部卿の宮は南都はんにやきに忍びおはしますが、遂に敵兵來り探す。宮は大般若の經箱にかくれ、一方の箱に蓋をしておかれると、敵は蓋のある方のみをさがして一旦立去つたので、宮は再び箱をかへて忍ばせ給ふと、敵は又しても蓋のあいた方をさがしに戻つて、幸に無事ならせ給ふた所へ、木寺、相模、赤松、村上等八人が御跡をしたひ來て、宮の御無事なるを喜ぶ。やがて宮は八人と共に山伏姿にて熊野へ落ちたまふ。(此處に道行文がある。) 熊野へつくと、やがて權現の御前にて祝詞を奏し給ふ。其時いづくからともなく童子が一人現はれ、熊野は危険だから、十津川の方へ渡らせられ、時節を待たせ給へとの權現の御つけを傳へる。

第四 宮達は十津川さして急がせ給ひ、ある辻堂の附近にて、一家に立より、食を乞ふて、物の怪になやめる女房を加持し給ふ。「それ十方の諸佛さつたくわう大慈悲のちかひの海いづれ淺きはあらね共觀音妙智力しめちがはらのさしもぐさ……日本六十餘州に一千餘ヶ寺の觀世音おのゝ大悲の門を出、りしやうの道にやうがう有、げにもかれたる木なりとも、花さかせんとの御せい願何ぞあやまり候べき」と、陀羅尼を讀みたまひ、人々も皆力を合せて祈ると、病者は元氣づいて物の怪は夢の如くに去る。

第五 女房の物の怪を見事に拂はれたことから、宮一行は竹原戸野の兵衛の家に滞在し給ふ中に、大塔の宮だといふことがわかり、兵衛は一層宮を崇敬し、遂に還俗させ奉り、黒木の御所を建て、うつし參らせる。

兵衛の弟に竹原太郎季忠といふがあり、彼は熊野の三山の別當淨辨僧都に内縁あり、關東びいきのものなれば、宮を

討ち奉つて勳功に預らうとしてゐる。

宮は或夜庭に出て、月を觀ながら過ぎ來し方を思ひやつて、色々と追想にふけらせ給ふ折柄、琴の音のするにつれて、忍びより給ふと、兵衛のおとの姫が花も恥ぢらふ姿である。宮は心動きて、近づいて言ひより給ふが、姫は自分の羞を思ひ、宮の前途を思ふてお言葉に應じない。已むなく宮が引かへさうとしたまふと、姫はかけいで、御杖にすがりつき、宮を導き入れ奉る。

その時宮の御留守の室へ、竹原太郎は忍入つて、宮を害し奉つたつもりであると、番の當人なる赤松則祐が見事に竹原を討取る。

第六 やがて宮は危険を感じて吉野へと落ち給ふ。途にてもせのせうじの一隊は、道を遮るが、宮は泰然として名乗をあげ、通せとのたまふと、宮に抗するも長多いが、さらばとて唯はお通し申せぬ故、旗を賜はるか、二人の勇士を頂きたいといふ。已むなく旗を與へて通らせ給ふた後、村上義光が追つて來り、庄司の軍を尻目にかけて通らんとして、宮の御旗を見つけるなり、「忝くも一天のあるじにておはします萬乗の君の御旗を、おのれら如きのぼんぶとして勿體なき次第とて、御旗を奪取り、旗持たる大男をちうにつかんで引さげ、遙の谷へとつてなげ」あら人神の風をして、宮に近づく。いもせの庄司後を追うて來り、戦烈しからんとする時、竹原八郎入道同じく戸野の兵衛の亟が、一隊を率ゐてかけつけ、宮に味方する。庄司等今は仕方なく降参する。宮はそれより二千餘騎を率ゐて、「花の吉野に立て籠り、京鎌倉滅びて後天下を納め給ひけり、千秋萬歳めでたしとて貴賤上下おしなべて皆あをかぬものこそなかりけれ」

【評語】 外題の示す如く、大塔宮が叡山をのがれて南都に入り、そこに大般若の經箱にかくれて危険をのがれ、更に道行をして熊野に入り、改めて十津川にて、戸野の兵衛の家に休み、そこに女房の爲に加持し、再び吉野に落ちたまふまでの敘述であるが、如何にも味の少ないものである。それもその筈、『太平記』その儘の文だからである。多少の柔か味といへば、戸野の家にて、兵衛の乙の姫に宮が忍びたまふ場に『十二段草子』の匂ひがするだけである。

【出處】 第一二段も『太平記』によつたものであるが、殊に三段目以後は、『太平記』第五卷の、「大塔宮熊野落の事」の一項を殆ど丸抜にしたものである。宮が般若經の箱に忍んで、身を逃れ給ふた事は勿論、竹原入道が娘を近づけたまふたことも、『太平記』に「竹原入道が息女を夜のおとへ破れ召、御覺異他なり」と記されてゐる。それから竹原の弟が宮を討たんとしたことは、『太平記』には「竹原入道が子供さへ、父が命を背て、宮を討奉らんとする企有と聞しかば」と出てゐる。そして全曲の筋はおろか、文章までその儘『太平記』からとられてゐる所が多い。宮が琴の音に引かれて、竹原の姫の處へ忍び給ふあたりは、『十二段草子』を原據とする『日本大王』『日本王代記』『神武天皇』等の忍びの場のまねである。尙元祿元年十月十二日竹本座上演の『大塔宮熊野落』は、本曲と同物ではあるまいか、土佐掾が之をその儘かりでもしたのではなからうかと思ふが、本曲の刊記が不明だから未詳である。

【影響】 享保八年二月十七日竹本座上演『大塔宮職録』には、宮が十津川にて戸野の兵衛の許に潜まれた項が取入れられてゐる。

【體裁】 東京帝國大學圖書館藏本。小形十七行十三丁。挿繪兩面五あるが、第三の繪は兩面共に上半分が本文で費され、下半段が繪になつてゐる。

内題に「太子傳」とあり、奥に「木下新板」とあつて、文字及び挿繪の筆致等全く『當流羽衣松』に酷似する。唯版形が少し小さいかと思はれる。誠に細字で難讀限りない。

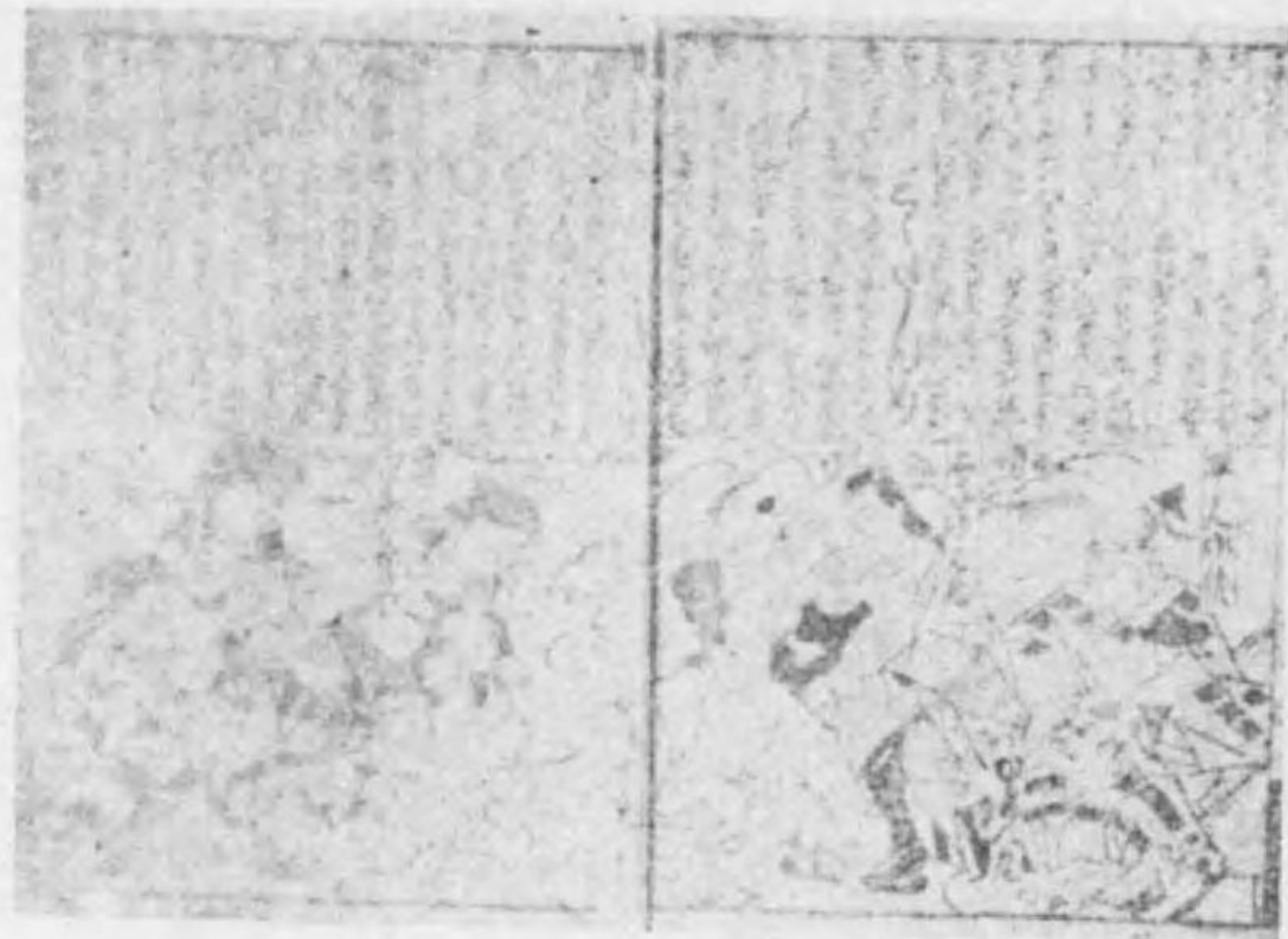
【太夫・刊年】 土佐少掾の語物に『太子傳』と稱するものがあると傳へられてをり、版元から見ると、これがその『太子傳』だと思はれる。外題は同様でも播磨のものとは思へぬ。

形式から見ると、寶永正徳頃のものらしい。

【形式】 六段曲。各段首尾に形式句あり。

初段「扱も其後虫のなくねもしづかにて民くささかへばんぜいと君をことぶく秋つ國……」

【梗概】 初段 敏達天皇の御甥宮を上宮太子と申す。此時の左大臣を蘇我馬子といひ、又物部大連守屋とて、へんくつがまんの神道者がゐる。ある秋の夕のこと、蟲の音を御覧賞の時、はだの川かつが、大唐から日羅上人が來朝し、たことを奏し、天竺のびしゆかつが作つた彌陀の像を太子へ獻する。乃ち寺を建立して日羅をとよめ佛法を弘布せよと御沙汰が出る。ところが守屋は佛法の流布こそ日本の神をけがすことだといつて、懸命に反對する。馬子は之に對して「我朝の神をしんだんにてはせいといひ、天竺にては佛といふ」、處によつて名を異にするが神佛別に隔ては



太子傳 第三圖 (藏大帝京東)

ない、「神儒佛道三つなれども、共に勸善長惡のたゞ一つに世を道びく」、といつて辯護し、太子に味方して佛道を弘むべきことをすゝめる。かくて守屋馬子の二人が争ふ時、太子が仲裁されて一旦事済むが、守屋はやがて、きがみの源内、わきの平太をして、馬子の建てた寺から佛像を盗ませ、日本を魔國とせんと企てる。

とよらの寺で、日羅上人が佛像及び佛法の來歴を述べてゐる處へ、源内等が飛込んで、佛像をつかんで逃げようとする、佛法守護のいだ天が飛出して二人を押つぶし、佛像を奪ひ還す。

二段目 太子と日羅は守屋の事を奏して、討伐せよとの勅を仰いだ時、守屋の弟小連守國が、兄が佛像に對する無禮で熱病にかゝり狂的となつたから、日羅の御祈禱を許され、再び忠誠を盡せるやうにして頂きたいと奏する。太子の指圖にて、日羅が守屋を訪れて歸佛安心をすゝめると、守屋は神妙に命を守る。日羅が佛像を側に置いて祈禱すると、守屋の病は忽ち平癒する。手下は之と同時に飛出し佛像を奪取る。これは最初から守屋の計略であつた。手下は日羅に斬つてかゝる

が、刀を振上げると、其五體がすくんで動けぬ。その間に日羅は忽然鷹の姿となつて飛去る。守屋は怒つて、佛像を火に投じて燻にかけるが、如何にしても熔けぬので、難波の海に投ぜしめる。

そこへ川勝が皇軍を率ゐて攻寄せる。戦の後に守屋軍は河内國へ逃げる。軍にはづれた小連は、早見てつどうの爲に追つめられて首を討たれる。

三段目 聖徳太子は守屋を追拂つて、十七條の憲法を設けて、民をあはれみ給ひ、なほ時々早見父子でうじ丸をつれて都を忍び出で、下情を察し給ふ。或時住吉の邊りにて休ませ給ふと、芹摘女が歌つてゐる。「實や浮世の事わさみやもわらやもはてしなき民のいとなみ様々に男たがへず女はこかいをちはかたつゝならわしのこのまかのまのしつのがめかこてんに澤ながれたのもに出てねせりつむよめや娘のはしたなくこへをかしくもうたうたふ哥京上郎のおあそびは哥よみゑかき花結びしづはつたなや野に出てひな哥うたいくさをつみな、草は何々先せいやうの朝より春の野に出つむ若菜その七草はあら玉の……いつかりせうにあふひ草またてこがれてしのね草哀はかなき戀路かな」。太子はかうした四季の歌をきいて、あはれと思召したか、言葉をかけ給ふと、芹つみの姫達は智略を以て太子の宮仕をする事となる。それは跡見の姫榊の前と、一人は川かつの姫明石の前である。やがて二人は宮に入つて、拍での姫、川上姫と呼ばれることとなる。(此場は「古今の戀の手本や」といつて、情あふるゝ場として敘述されてゐる。)やがて太子は住吉さして出給ふと、松原から守屋の郎等東松坊が攻めて来る。早見藏人は之を見ると、早見てつどうを太子に變裝させて、野馬に乗せて落ちさせる。敵は巧に謀られて、太子は無事に御還り遊ばされる。後にて早見てつどう調子丸等は敵を脅して追ちらす。

四段目 太子は愈々心を修め經を寫し、佛道に専念し、遂に一日舍人調子丸をつれて入唐したまふ。即ち御愛馬に乗つて、「天に向て目をふさぎ御手を合心中に念じ給へばふしぎやなこくうに二しの白道立てうし丸諸共に雲井はる

かに上らるゝ三日三夜と申には音に聞えしかうしうのかうさんに入給ひ、くはこにてなれしほけ經を」、黒馬に取つて、西方頻りに戀しきまゝに、「駒にまかせて玉ぼこのたどろ〜と行道の名にのみ聞しさうれいの東はしんだん西は又西天竺のさかい山白雲ふもとに横切て……」道行をして、「名に高きけいそく山によちのほり四方を見給へば三千世界めのまへにつゞら折なる細道を上れば下る爰かしこ……」、やがて様々の世の姿を見つゝ天竺れうじゆ山につき給ふ。と忽然天帝につかへるならゑんけんごといふ力士が現れ、先頃御出の事帝釋宮へ聞えたからお迎に來た、「これより喜見城とうりの都へ御上り天帝へ御對面あるべしと申詞の下よりも白雲そぼだちつゞきつゝ平地をあゆむごとくにて喜見城へ付給ふ」。暫くして「ぐぶの官女四天王天かいけまん玉のはたこがねのいすに召れつゝ天帝出御」あり、太子を迎へて「御身は是くせくわんをんむぶつせかいの衆生等をすくはんための方便にかりに人かいにどうぢん有なんゑんぶしう大日本のあるじ今用明の太子と出生有まつたもりやはあしゆら王佛法はめつなさしめんとはもをなしく出生せりすいぶんこつつくしつゝ佛敵のもりやをたいぢし佛法こうりうし給ふべしりきを加へゑさすべし」といふ。太子は惡魔降服の弓矢まで貰つて城を出たと思ふと、刹那にして和國の内裏に立給ふ。「誠に佛法ふかしぎの佛の方便がたしときせん上下おしなへ皆かんぜぬものこそなかりけれ」。

五段目 其後守屋は兵を整へて、河内國稻村城に據り近國を攻め、遠からず都に討入らんとすると奏する。太子と馬子は大將として討伐を命ぜられ、主上には八萬の軍勢の出陣をみそなはず。「一番は東方の持國天を片取てそかの馬子の大臣青地の錦のひたゝれに……二はんは南方増長天跡見の大臣……三番は西の方廣目をかた取て大將いもこの大臣……四番は北方多聞天をかた取て大將の川かつ黒地の錦のひたゝれに……五番には惣大將軍聖徳太子の御出立た

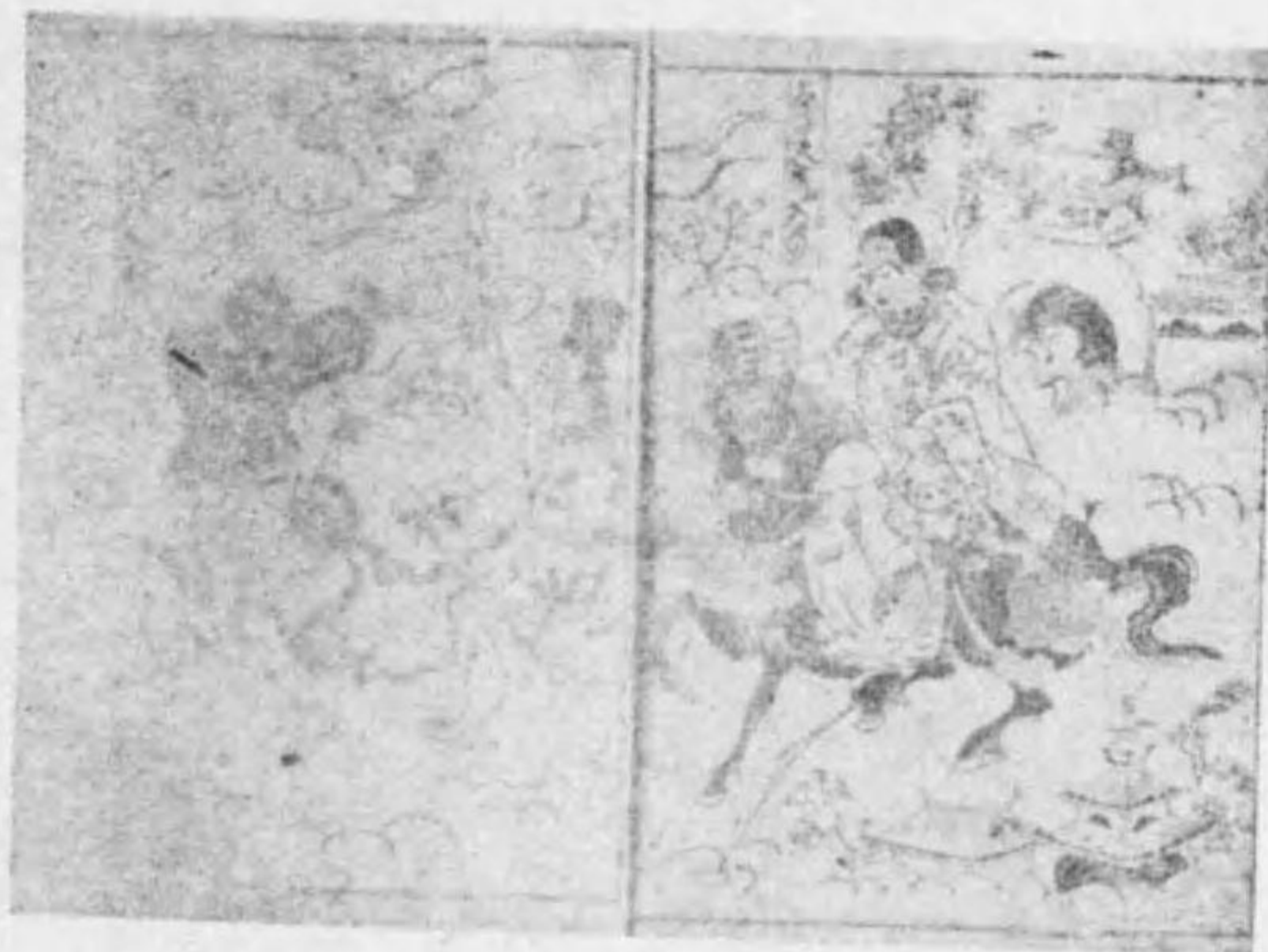
いしやく天をかた取こんれうの御ひたゝれくれないのお袴……」（と節事がある）。

やがて守屋の城を取巻いて戦となる。奮戦の後守屋が太子を追かける。「既にあやうく見へし時むくの大木有ければ小たてに取て戦はんと駒をかけよせ給ひしにふしぎや此木二つにわれ太子をかくし奉る」、守屋怪みながら木を引倒すと、「忽此木さつと割れ、中より太子出給へば四方の枝より多門天持國天増長廣目四天王出現有」守屋を攻めつけ、太子は彼の首を討ち給ふ。

六段目 やがて太子は天王寺をたて、舞樂を奏せしめて祝賀したまふと、其時、怪鳥一羽飛來つて、守屋の執心だ、佛法を滅さすにはおかぬといふ、乃ち上人が鳥に向つて珠數を投げると、それが龍となつて鳥を喰はへ、二つに引さくと、鳥は地藏となり、龍はまた元の珠數となる。「千秋萬歳めでたしと皆仰がぬものこそなかりけれ」。

【解説】 要するに佛教傳來當時の物語によつた太子と守屋との争を描いたものである。

【出處・原據】 『日本書記』卷第二十、第二十二等によつたもので、日羅との關係は『元享釋書』にも見ゆ。徳川初期のお伽草子『しやうとく太子本地』や、寛文期の『聖徳太子御本地』や、延寶九年三月の『聖徳太子傳記』等にもよる。詳しくは拙著『古浄瑠璃の新研究—慶長寛文篇』参照。



（藏大帝京東） 圖四第 「傳 子 太」

江戸土佐浄瑠璃解題（七）

○艶色萬歳頼政

【體裁】 帝國圖書館藏本。『新群書類從』第五にも收めらる。半紙形八行、四十五丁。前附に土佐少掾正勝の名と印とがあり、版元木下甚右衛門とある一丁があり、表紙見返しには、「一、酒呑童子」から「四八、大嶽丸」に至る「六段物板行出來合目錄」なるものがついてゐて、奥の行には「艶色萬歳頼政卷の終」と見え、最終に、半丁の「開板廣告」があつて、それにも「小傳馬町三丁目木下甚右衛門刊」とある。柱には「頼政」と見ゆ。

【太夫・刊年】 正本太夫が土佐少掾であることは、前附によつても明かだが、例の寶永五云々の刊記は此前附には見えず。

【形式・曲節付】 六段曲にて、大序は

第一「名のりかけたるほととぎす、なのりかけたるほととぎす、雲の上にやひゞくらん、これは兵庫のかみ、源の頼政也、さても當今御しんでんの上にして、よごとにあやしきこへ有て、御のうおもくましませば……」

にて始まり、普通の曲とは趣を異にしてゐる。以下の各段は皆「其後」にて始まり、六段とも、段尾には普通の形式句がある。

曲節付は例の如くであるが、謡曲から材をとつただけに、初段にはウタイの曲節付が多い、其他に眼立つた曲節付は次の如くである。

アフミムスビ、エイカン、本地、マイハリ、クトキ、カイトウ、レイセイ、イロナヤシ、上方地、サシ、サナイ、アミトヤツシ、サツマウツリ、片タヤツレ、サ、ナモ、テントン、ラダキフシ、シヲリ、馬方フシ、トヨノフシ、ヒロヒ、アタル、ノリミ、サイツメ

その中、最も珍しい曲節は、テントンと馬方フシの二つである。

テントン 馬方フシ
そこがあつくはこなたへこされ、こはすゞしき柳かけ敷の扇の風なをす、し、扇めせ、ちうはもそふよ (三段始)

初段管弦舞樂の所、まこもの前の最初の襲撃の場、頼政とあやめの前とが都へ歸る途の場、胡蝶が怨靈となつて争ふ場などは、曲節付殊にこまやかである。又四段には四季の節事がある。

【梗概】初段 當今御寢殿の上に怪物が出るとて、頼政勅諭を蒙つて、一夜猪早太と共に鶴を退治し、從三位に敘せられ、薄緑といふ寶劍に御衣一重、宇治の一郡と、官女の一人を賜はることとなり、時忠の女あやめの前をのぞみ、五月五日の管弦の際にゑらべと仰せを蒙る。

やがて管弦の舞樂の模様がながくと描かれてゐる。さてあやめの前とまこもの前と、二人の官女の舞を見て、關白から何れをのぞむかといはれると、頼政はあやめの前から千束にあまる文は貰つてゐるが、顔をどつちか明かにするところが出来ないで、取あへず「さみたれにぬまのまこも、水こゑていづれあやめと引ぞ煩ふ」と詠じて、關白元實から、あやめの前を引合され、その手をとつて歸らうとすると、大和國の住人石門將軍の末葉、石川次郎秀門なるもの

が、矢張鶴を取つたから官女を賜はりたいとて入來る。猪早太がその鶴なるものを刺さうとすると、それは偽の鶴で、その實化物の人間であつた。

第二 石川秀門は内裡にての狼籍の上に、不覺をとつたことから、都を退いて嵯峨あたりに蟄居し、家臣黒塚江内を近付け、元來自分が最初に鶴退治を命ぜられて辞退したのが誤だが、頼政の功名の基は「彼が家の調法に、雷上動といふ弓、兵破水破と云矢有、並なき名きにて、此弓矢を持し故」だ、之を奪取つて仇を報ずる方法はないかと相談し、忍びの名人をして之を奪取り、捕虜にされた弟秀重も取かへさせようとする。

かくて三十人の盜賊を頼政の邸に送つて、見つけられて大騒の中に、盜賊は大平平けたが、捕虜の秀重が、知らぬ間に寶藏に忍入つて、三つの名器を盗み去る。かうなると番をしてゐた猪早太は、頼政から散々にお目玉を頂き、名器を取かへすまでは勘當だといはれ、命かけてそれを取返すべく飛出す。

第三 まこもの前はあやめの前に戀を奪はれ、何とかして仇をとらんものと、頼政とあやめの前とが宇治川で遊ぶを見つけて、近づかうとして、柳の枝が折れて、川へ落ちる。そして泳いで頼政等の亭に近づくと、溺れて死んでしまふ(この邊は曲節付も濃厚で美文から成る)。

やがて頼政等が奥へ入らうとすると、まこもの前は、頼政の袖をつかんで、今日こそ思ひを達すべく宮中をぬけ出て來たのだといつてなかにげない。次の間にゐた渡邊きおう瀧口は已むなく女に切りつける。女は稻妻の如く飛めぐる。主従が劍をぬいて怨讐を切つて川へ投ずると、遂には望を達せずにはおかぬといつて女は消える。

第四 二三日の後に頼政夫婦は宇治の別業を出て、ゆら／＼と歩みながら、都にかへる。(此邊に一種の道行風の曲

節)そして其途中で頼政は病にかゝる。

猪早太は主家の名寶を取返さんと苦心してゐる時、敵の弟秀重が、頼政を害すべく、邸へ忍入らうとするを見ると、之を引捕へて、やつと名寶が秀門の家に隠されてゐることを知る。

第五 行法にすぐれた三井寺の法眼淨明が、頼政の病氣祈禱に出かける途中、怪しき女が現はれて、祈禱に行くをやめよといふが、法眼がそれを拒むと、忽ち震動雷電して、乗物共に淨明は空中にまきあげられる。やがて落ちた淨明と一雷法師とは、祈禱によつて、まこもの前の怨靈を消してしまふ。

丁度頼政の邸では、四季の立花をそろへて頼政の病氣を慰めてゐる。「世はならはしの人心、四季をりく」とさきかはる花に心をなぐさめてかざりならべしからへいじいづれおろかはなければども春はまづさく八重櫻の香をなつかしみ鶯の……花一々かぞへうたひしはいとやさしうこそ見へにけれ。」

頼政が立花を見て喜ぶ時、蝶一つ飛來つて、まこもの前の怨靈なりといつて、見る見る變化となつてあれ狂ふ。頼政が切つてかゝると、怨靈は焰を吐き手がつけられぬ所へ、法眼淨明が來て祈禱をする。遂に守り本尊の不動が劍をぬいて切りはらふと、怨靈は閉口して、二度と來ぬといつて姿をけす、頼政は忽ち本復する。そこへ猪早太が名寶を奪返して、秀重の首をさげて歸る。

第六 この段は短いが、要するに秀門退治の戦のみにつきてゐる。終に近く、秀門があげられてゐると、白雲がまひ下り、彼の五體が惱亂した時、「有がたや雲中より、不動明王出現有、佛王法の敵をなす、秀門を立所に、めう罰あたふるなり、是勸善懲惡の、誠を顯す所ぞと宣ふこゑの下よりも、秀門が兩眼忽ちぬけ出血をはきて、終にむなく成ければ、明王はしうんにのり、こくうに上らせ給ひけり」。

【評語】 頼政が鶴退治をして、あやめの前を恩賞に賜はる件に、石川秀門の嫉妬の狼籍を結び合せ、更にそれに頼政に戀するまこもの前の怨靈をからませ、存外柔か味や舞踊味の多いものとされ、さすがに艶色萬歳の頼政物語であるが、終は矢張戦争で結ばれてゐる。外題を見ると、頼政が主人公であるが如く見えて、中頃からは、まこもの前が主人公であるが如く思はれ、最後には秀門が主になつたりして、頗る統一を欠いてゐる。従つて折角の複雑な仕組も、あまりに雑然たるに止つてゐるのが惜しい。さるにても、五月五日の宮中舞樂の場や、まこもの前の最初の嫉妬の場、ついでは狂乱の場など、頗るにぎやかなものである。尙あやめの前の活躍は殆んど見られぬが、最後に於て、秀門の眼玉が飛出して死ぬあたりは如何に演出したか。寫實的にやつたとすれば、存外後の上演物であつたかとも思はれる。

【出處・原據】 鶴退治のあたりは、謡曲『鶴』及び『頼政』によつてゐるが、五月五日の舞樂に於けるあやめの前とまこもの前の舞のあたりは、『源平盛衰記』第十六卷「菖蒲前事」の條によつたものである。そこには菖蒲の前を、鶴退治の恩賞として賜はることとなつてはをらず、舞に出た女性も、二人でなくて三人となつてゐる。そしてまこもの前なる名も出てはゐない。これは此曲の作者が、「あやめ」の名から思ひつたものであらうし、二人にしたのは餘り艶色に過ぎるからであらうが、まこもの前をして嫉妬せしめたのは、元祿以後の作たる所以であらう。その他秀門の事件に、如何なる原據があるか知らぬが、恐らく、いゝ頃な材料を組合せたのであらう。第四段の四季の景事は、『十二段草子』によつたものである。

【影響】 鶴退治については、文政十一年上演『頼政鶴物語』に關係がある。まこもの前の嫉妬の事が、直接影響した

淨瑠璃には享保十七年九月豊竹座上演、並木宗助、安田蛙文作の「源平待賢門夜戦」がある。又「小夜中山」とは深い関係はなし。

讀本物で頼政に關係あるものには、『頼政現在稿』、『頼政軍談』、『頼政澤邊の草』、『頼政名歌芝』、『頼政一代記』、『頼政扇芝樂』などがあるが、本曲とどの程度の關係があるかを明かにせぬ。

○新撰紅葉狩

【體裁】 松更文庫藏本にて、珍らしい殘曲の一。半紙形八行、四十六丁。初行及び卷末に上の題あり、柱にはたゞ「紅葉狩」と見える。奥附に別に木下甚右衛門刊とある。

【太夫・刊年】 刊年は明かでない、前附も失はれて、例の寶永五云々の刊記もないが、奥附に「土佐少掾橋正勝直之以章句……」の文句があるから、土佐少掾の語物であること疑ない。

【形式・曲節付】 六段曲にて、各段首尾に形式句あり、

ヲクラヤツシ、サツマヤツシ、近江ウツリ、色拍子、相ノ手、ウタヤツシ、エイカンフシ、玉野フシ

位が多少變つた曲節付で、ウタイの章が割合多いかと思はれる。第五段に、紅葉の前の、京から三井寺までの道行がある。又初段に乱舞、八景の節事、第三段に立田山の紅葉狩の節事、第四段には名所物語の節事がある。

【梗概】 第一「扱も其後松拍は霜の後に現はれ忠節は國あやうきに見ゆるとはまこと也ける言葉なり」こゝに六十四代の圓融院の御時、信州戸隠山に鬼神が出るので、民どもが其害を訴へるので、藤橋平の三將に之が退治を命ぜられ、

三將は三上の山の麓にて勢揃をする。一番に依藤太の子藤原行春、二番に餘吾將軍維茂、三番は橋諸兄の六代の末葉橋岩田丸遠平、この三人の勢揃があつて、集つた總數は一萬八千餘騎。やがて酒宴がひらかれ、乱舞が行はれる。「あやおもしろのきしの花のけしきやな、櫻の木の間にもるはたの家々のはたじるし、天も色にまゝりや、おもしろの春べやあやおもしろのはるべやな、たけき心はあらかねの、その土も木ももるとにわが大君の國なればいづくに我のすむべきと……」と、此處にウタイの曲節付がつけられてゐる。

さて出陣の見送りに來た維茂の子清若丸が、父に別れて竹生嶋に參詣すると、そこには藤原行春の姫紅葉の前が、父の戰勝祈願に來て、海上に舟を浮べて琴を弾いてゐる。清若丸は之をきいて茫然としてゐる。(こゝに八景の節事がある。——塩ならぬうみのおもてによもの浦、うらゝかけてながむれば八つのながめはもくぜんたり、こゝも名にあるからさきや……)二つの舟が岸につくと、そこに戀物語が始まるが、かくと知ると、姫君のお供の壬生の雲平は、自分の戀が叶はぬ怨からやいて姫を罵り、清若丸を手ごめにして逃去る。そこへ清若丸の郎等片盛がかけ來り辨財天に祈ると、天女が忽然と現はれて、片盛を背負ひ、水の上を走つて雲平の後を追ふ。水中にて争ふた後、片盛が雲平の首をねぢ切り、大蛇の首に乗つて陸に上ると、清若丸も無事に上る。此時辨財天は大蛇に乗つて、平氏は觀音を信するから之を守る、殊にいもせの縁を結はん爲に助けるといつて、姿を波間に消す。

第二 此段は三面の鬼神と諸將の戦とを敘する序に、行春と遠平とが功名争をして、行春が遂に遠平の爲に殺されることを述べ、最後に此鬼神といふのは、正平年中に依藤太の爲に討たれた將門の靈魂で、御門に恨をなすと同時に、藤太に報ひんとして、今藤太の子行春の命を奪ふのだと述べる。それをきくと維茂は鬼神と組んで難なくその首を打つ。

第三 遠平は都に歸ると、鬼神の腕を取つた功名争から、行春を殺した自分の悪事を、すつかり維茂の悪事であるやうな顔をして、行春の御臺につげ、行春の執權八郎をして維茂を討たしめようと謀る。

平維茂は鬼神退治の功によつて、大和國を給はり、或日立田山の麓を通ると、美人が出てさそふ儘に、紅葉狩の酒宴の席につらなつて「見てもく見あかぬは吉野の櫻のだの藤立田のみち……」〔此邊曲節ゆたかである〕と、歌ひ舞ふ姿に見とれて轉寢をしてゐると、美人は鬼神となり、其他の侍女は皆化生と姿をかへ、例の行春の妻と八郎とが飛出して、戸隠山の仇討をすべく斬つて出る。維茂は其故を尋ね、凡てが遠平の謀計に基づくことを知り、却つて死んだ行春の遺書を出して御臺達に見せ、鬼神に姿をやつしてゐた遠平を討つてその首を斬る。（此段は存外はつきりしてゐて、巧妙に出来てゐる）

第四 その後維茂は一切を帝に訴へると、遠平の所領を行春母子に給はる。やがて姫君紅葉の前の戀は漸くつのが、例の清若丸は元來出家の志ありて、鞍馬に隠れてゐるとき、姫の侍女、朝日、夕日、しもよの三人は、大原女に扮して清若丸に近づき、「あれ御らんせよしんく」としける木立のもりて世に戀を祈るかいつはりのなきをたゞすの神ち山……」と、曲節多い名所物語をして、遂には清若丸を口説いて、姫の爲に結ぶの神の役をはたす。

第五 清若丸は一旦紅葉の前に對して、三人の侍女を通して婚約はしたが、再びそれを破つて三井寺にかゞみ、叔父の和尚によつて出家を願ふが許されぬ。

姫君はその後氣が狂ふて、道行をしながら三井寺につく。そして狂女となつて寺の鐘をつかうとする時、止められて歎き悲む折しも、名月の夜を月見に出た清若丸が見つけて慰め、二人の廻り會ひを祝して、和尚が縁を結ばせる（此邊

頗る支離めつれたる文から成つてゐる）

第六 （極めて短い場にて）遠平の郎等三人が惟茂に仇討せんとするを、片盛が平げる。

【原據】 戸隠山の鬼女に關する傳説は『今昔物語』に見られ、それをとつて脚色したのが謡曲『紅葉狩』で、更にそれから出た大和掾の『紅葉狩』とは、本曲は筋の上の直接の關係は乏しいが、結局その改作である。

【評語】 平維茂、藤原行春、橘遠平の三人の鬼神退治、遠平の功名盗み、に配するに、維茂の子清若丸に對する、行春の娘紅葉の前の戀を以てし、更に第三段には立田山の紅葉狩を加へたもので、大和掾の『紅葉狩』に比べると一層情味もあり、曲節にも富んだものとされてゐる。上演すると相當に賑かなものであらう。

【影響】 大和掾の『紅葉狩』に材料を得てゐる近松の『艳狩劍本地』には、四段目で維茂が鬼女退治をしてをり、その續篇とも見られるのが、寶曆六年竹本座上演の『平維茂凱陣紅葉』である。なほ本曲は謡曲『三井寺』の翻案である『三井寺狂女』と多少の關係がある。

歌舞伎でも『紅葉狩』は屢々上演されてゐるが、それは所作事が多く、安永二年の江戸中村座の『御ひいき勸進帳』、全五年七月の江戸森田座の『色見草月盃』、文化七年八月中村座の『掛奉色浮世圖繪』、嘉永二年九月市村座の『餘波五色花魁香』などにも取入れられ、明治二十年十月新富座上演河竹黙阿彌作にも『新曲紅葉狩』がある。黙阿彌作は有ゆる古曲の長所を取つて、九代目團十郎が作らせたものといはれ、今日上演される『紅葉狩』はこれである。

讀物としては墨川亭雪麿作、文政十一年刊『紅葉狩吾嬬錦繪』六卷などがある。

西鶴置土産と待夜の小室節

東劇に於ける眞山青果氏の『西鶴置土産』は、近頃面白い芝居の一つであつた。結末に於て聊か物足らぬ所はあつたが、あくまで他人の合力を拒んだ淋しさ、心地よさの中の意地張のすが／＼しさ、さうしたものが何ともいへない嬉しいものではあつたが、あんな心の底を書いたものは、一般見物には却つて受けなかつたやうだ。でも毎月芝居を見るものゝ爲には、せめて折々かうしたものを一つは加へることを忘れて貰ひたくないものである。

それにしても歌舞伎座といへば、いつも見なくもいゝやうなものばかり并べてあるが中に、五月は『待夜の小室節』が一つだけ私の心を引いた。近松の原作をどんなに小細工したものであるか知られたかつたからである。

第一場は白子屋の場、第二場は白子屋裏の場、第三場は千貫松原の場。

第一場は白子屋の場といひながら、小萬と興作との対面はいゝ、ひぬかの八蔵が出て来るのもいゝ。けれども如何にも筋が薄へら過ぎて、チヨボも何も用ひず、下座のみがうるさい程活躍してゐる。それに八蔵と興作のつかみ合ひの最中に、三吉を飛出させたのは、役者はうまくつかへても、三吉をして盗をさせる爲には分り易くされてゐても、少しく三吉の出し方が早過ぎる。いや、それもいゝ／＼。まづ／＼此場は、何とか匿名士の脚色としてはいゝ方である。

けれども第二の白子屋裏の場といふのは、何といふ妙な場であらう。原作では此處は三吉が姫御前の金袋の盗みに失敗して、審問を受ける處を、重の井が人目を憚りながら、三吉を我子と知られないやうに、殿の許しを願ふ處で、其苦

心こそ面白く、ついで三吉が八蔵を叩き殺すといふ奇怪な場であるのが原作の趣向だが、それを不自然と見たのか、改作者が自分の腕を信じ過ぎたがためか、全くさうした趣向から脱却して、原作の面影は殆ど無視されてゐる。唯第一場の續として、八蔵が興作を打つてかゝる處へ、不自然にも重の井が一人で出て来て、人を拂つて、倒れて居る興作に向つて、散々に問責し、三吉をつかつて金袋を盗ませた罪をとがめる。面白くもなければかしくもない。器用には作り上げられたが近松は此處で叩き殺された。理窟つぼく分り易くはされたが、情味も何もなくなつた。チヨボが用ひられて、何やら唸つてゐるが、たわいもない寝言にしか過ぎない。

興作は罪を悔んで自害を計る。重の井がとめる。妙な時家老の本田が出て来て、重の井をつれて引込むと、父の未進米で座敷牢に入れられてゐる小萬を、興作が引張り出して、心中に出かけてゆく。

第三場がまた極めて妙である。小萬興作が松原で心中前の物語をしてゐる處へ、三吉が飛出して来て、罪を許されたことを語り、重の井からの手紙を出して興作によませる。つまり三吉も興作も罪を許して、官仕をさせるといふのである。かうなると小萬は一人のけ者にされてゐる恰好である。つまらなささうに小萬がそれをなげくと、興作は三吉に向つて、母の許へ歸つて、立身せよといふが、三吉は却つて氣易い父の側を去らぬといふ。興作が日本一の不孝者、親でもない子でもないといつて、三吉を斬らうとして脅す處へ、重の井がまた一人で来て、興作を今一度世に出してくれといつて小萬に金を渡す。興作と小萬とは、ぼうとして夢のやうに逃げてゆく。重の井はそれを三吉と共に淋しく見送つてゐる。

原作のやうな武士らしい、意地張屋の、面白い興作は姿を隠して、大衆にだけは頗る分り易くなつてゐる。それでゐ

てさすがの大衆も一向面白くなさうである。

かうして近松といふ立派な佛像は、削直し削直されて、方々膏藥を張つて、下手な役者にもやり易くなつてゐる。だが巨匠の面影はどこにも見られなくなつてゐる。新しい時代の作者といふものはまことにゑらいものではある。(五月)

明治座の文樂

一

六代目かの土佐太夫の隠退といふ鳴物入りで、いつも七月に上る文樂座が、今年は一ヶ月早く六月の明治座を賑はしてゐる。

土佐太夫が隠退するといつても、斯界から全く身を引くでもなく、唯文樂座を脱退して、自由な身として、思ひの儘に藝に遊ばうといふのであるらしいが、此機を利用して、昔の「古今の序」にまねるのではないが、文樂の諸太夫に對する概括的私見を述べて見る。——といつてこれは十二日の『源平須磨躰』の古靱太夫と、『伊賀越道中双六』の津太夫と、『冥途飛脚』の土佐太夫と鏡太夫を中心にした話である。

古靱太夫に對して、私の最も引きつけられるのは、彼の見事な語り振である。態度である。如何にも自信をもつた、ゆつたりとして迫まらざる、大きな態度である。如何なる役といへども、明確な意識の下に立派に噛み分けて、之を思

ひのまゝに表現し得るといふ自信である。彼が終始一貫堂々として、凡ての人物を見事に表現し得るのは、全く此信念と腕とがあるからである。辨慶を表現する時には、彼は自ら立派に辨慶になり切つた自信をもつてゐるのである。あね輪を演ずる時には、直ちに轉じて、あね輪の人物に身を引下げてゐるのである。古靱にはかうした磨きあげた技巧があると同時に、又それをなし得る理解と意氣と情熱とがあるのである。といつて彼には若い女の聲を見事に表現し得る自信はなさうであるが、幸にして淨瑠璃は語物である。純然たる寫實を以て足れりとする近代劇とはやゝ趣を異にする語物である。女でなくても、技巧を以て女のまねをなし、若くなくても若きものを真似て、大体の氣分さへ出せば足れりとする特に浪漫的な藝である。古靱の情熱と理解力と技巧とは、かくして濕ひの足らぬ彼の音聲を、或程度まで補ふことを得しめてゐるのである。

思ふに彼の語り口と態度と意氣と、情熱と理解と、聲量と技巧とを以てして、此上更に艶のある音聲を出すことを恵まれてゐたとしたらば、彼は古今に絶する名太夫であつたであらう。けれども古靱に艶のある高音を求めることは無理な註文である。それは如何ともすべからざる天資であるからである。私はむしろ彼がその缺けたる天資を補はうと腐心する努力と技巧とに敬意を表すべきであると思ふ。

清六の三味線と共に、年を追うて漸く枯淡にして氣品あり、壯重にして而も熱情あふるゝ古靱の神技に對して、私は益々魅せられつゝあることを感ずるのである。

二

津太夫はさすがに紋下である程あつて、其語り口といひ態度といひ立派なものである。殊に今度の音聲はむしろこれまで聞いたよりか、一層の濃みもあり、品もあつたが、何とはなしに情熱と氣力とに幾分の乏しさを感じしめた。古鞭の線の太い語り口に比して、どちらかといへばこれは地味な語り口である。彼があくまで眞面目に落着いた遊い技巧を見せてゐる所は、よく紋下たる貫祿を見せてゐるといつていい。

彼の相棒である綱造の三味線に至つては、全く神韻漂渺たるものがある。平作の死ぬあたりの彼の弾き方は、蔭で弾かれる胡弓に其責任の大半をまかせてゐるとはいふものゝ、綱造の手は靜に拍子をととりつゝ、常にかすかに糸にふれて、全く弾かずに弾いてゐるといふ態度である。かうして彼は津太夫の低い音聲をあくまで全的に生かさうとしてゐる。その用意の周到にして餘韻あること、驚くにたえたものである。

『冥途飛脚』の中の巻を近松の原作通りに、土佐太夫によつてきかされたのは何よりもありがたかつた。この夜こそ近松の靈は浮び出て、にや／＼と笑つてゐたことであらう。

といつても、例の羽織落しの處までの大隅太夫の出來榮には、頗る物足らぬものがあつた。近松物であるせいか、如何にも語り悪さうでもあり、何となく落付がないやうに思はれた。忠兵衛が歸つて来て、八右衛門に出逢つて、色々なことをたくしかける處など甚だ忠兵衛らしくなかつた。だが八右衛門が出鱈目な證文を書く所は巧であつた。

何といつても大隅の語り口と、人形の所作との間には、まだしつくり合はぬ所が多分にあつた。殊に羽織落しの邊りには、榮三の人形にも頗る感心させられなかつた、折角の語り方もむしろ殺されたといつていい。さういへば駄荷がついて「來年も仕合馬」のあたりだとて、勾欄はもつと賑かにすべきではなからうか。

三

土佐太夫の聲は高い聲ではあつても、一體で大きな聲ではない、柔かい情味のある音聲で、繊細な表現をする上に於ては、立派な腕をもつた太夫である。七十六歳といふに、若々しい聲も出れば艶のある音も出せる。けれども古鞭のやうな、線の太い強い大きな聲が出ないのだから、三絃たるものは充分に此邊をのみこんで、どこまでも太夫を生かすことに工夫をしなければならぬ。ところが文樂の至寶とかいはれる吉兵衛は、あまりに熱心である爲か、全く思ひ切つて三味線を弾いてゐる。自己を忘れてゐるほどウン／＼と掛聲をしてゐる。太夫の聲が滅茶／＼にならうが、そんなことはどうでもよいといふ風である。折角土佐太夫が懸命に工夫をこらしてゐる、例の『三世相』の名文句の「傾城に誠なし」のあたりでも、文句を知つてゐる二階にゐた私にだつて、判然せぬ所が多かつた。土間の前の方だとて、うつかりするとあれでは太夫の苦心も水の泡であつたらう。

批難の朝を告げるのは、藝道に於ても矢張駄目である。綱造が津太夫を完全に引立て、立派に生かしてゐるに反して、吉兵衛は土佐太夫を生殺しにしてしまつてゐる。全く惜しいものである。だが忠兵衛がはづみで封印を切る場の趣を出さうとする周到な用意は、さすがに吉兵衛によつて立派に現はされて、「ポツ」といふ音が糸の上に明かに聞えた。

さもあれ、土佐太夫の人物の「詞」は、幸に弦なしであるだけに、思ひの儘に表現されてゐた。彼の強さに乏しい音聲の弱點も立派に隠されてゐた。梅川の口説に至つては、一層の巧妙さを思はされたが、「涙は井出の山、ぶ、き」の所などが、昔の節付風になつて居ないのは物足らなかつた。

新口村に於ける鍛太夫は、態度といひ、表現といひ、なか／＼枯れた味を見せた。乏しい聲量もよく之を技巧で補ひ得て、悔るべからざる味があつた。もつと氣品がそなはつて來たら、一流として推賞するに足るであらう。

その他呂太夫も、久しく聞かない間になか／＼立派な風格を備へて來た。落つて來た。叶の三味線との間に懸隔がだん／＼少くなつて來たやうに思はれた。全くの思ひがけない拾ひ物は、伊達太夫と源太夫とであつた。共に音聲も美しいし、語り口もいゝ、二流としては前途を矚目せしむるものがある。

かうして一夜を楽しく過すことの出來た私は、久し振りだからであつたかも知れぬが、毎月見る三四の歌舞伎劇よりは、文樂一座の方が數等の上にある藝術であることをつくつく感じさせられた。そしてこれまで久しい間、其昔操芝居が衰へて、歌舞伎劇のみが盛になつた原因について疑をもつてゐた私は、それは後代に至つて、淨瑠璃の作者に立派な人がなかつた事が、その衰因の主なるものでなければならぬことを、今にしていよ／＼しみ／＼と痛感させられたのである。

(昭和一二、六、一三)

江戸土佐淨瑠璃解題 (八)

○平假名大全

【體裁】 紫蘭文庫藏。極めて珍らしいものゝ一つにて、他に何處にも見ず。半紙形八行四十三丁。木下甚右衛門版であることが奥附及び前附によつて知られる。

【太夫・刊年】 土佐少掾の語物であることは、表紙見返にある目録及び前附奥附によつて明白ながら、前附に例の「寶永五戊子初秋上旬」とある以外に、眞の刊記を知る法がない。

【形式・曲節付】 六段曲にて、第五段首以外、各段首尾に形式句がある。

初段「扱も其後、角て稻荷の神前に、源氏には播磨の守從五位の上義朝、平家には安藝守……」

の如く、初段には序の文がなく、却つて、第五段に六ヶしい段首が見られる。

節事は第一第三、四、五段にあるが、道行はない。

△第一段の白拍子島の千歳わかの前舞「天下泰平長久に千歳の秋も色かへぬよろつ代までも君が代のおさまりさかふことぶきは蓬萊山に住絶は甲に不老の薬をおひ、松の岩根に打浪はとう／＼たたりとう／＼と、なるは鼓の音ならん、千歳の鶴は……」

△第三段の湖上の節事「義朝けうに入給ひ御袖の下よりも、ひとよぎりを取り出し中通しにて露はらひ、哥口しめし音もたへにふかせ給へは千歳は、やかてこきうをしらぶれば、和哥はひんかのこゑあけてみよし野や〜芳野の山はいさしらずしがの山こへきてみれば、雪にはあらで花のふゞきよの、櫻は舟を唐崎の松のもとにこぎよせて、いさはよりも御あかり、……」

△第四段の義朝養老の湯入の節事「梅が香とめしふり袖もいつか留湯のうつり香に汲や出湯のうらゝかに、霞ながる、山川のつきぬためしを今爰に、引や車にかめをすへ、おひをやしなふ湯をたゝへ、手にとるつなもくれないの、色をふくめる小娘のそるふ爪紅しほらしく、かたにかけたる、染ゆかた、はてなもようの一やうに、しゃんとこつまを取上たきみがさかつきこうかいに思ひ指くしきつけて、よくもゆふたる髪のうへいかにあれたる大ぞうもつなきとめなん粧ひにうたふふしこそやさしけれ、いせのこまんかはせ寺参り、おつや申てよがたりきけば、とのとちぎらは淺黄染……いと顔見てきへ〜と雪のはたへをきよらかにあらはれあらふみゆとのうらちに入こそみやびなれ、角て義朝御入湯ましませはみあかに参るやさ女霞はかりのそら焼は四方にくんじてさなからに……御あかに参りし女房にまきれたりし鎌田が妻女おそばにちか付て、あれなる湯かめは養老の名湯にて侍候へば入れ申せと父庄司申付て候ゆへ、女房共は定てさやうに申候はんが、必ず御入有べからず……」

△第五段の石橋の獅子と胡蝶「樂の音空にひゞきて面白や、山々の谷のしみつかとん〜とどるとどまらす霞の間より見渡せば空にかけたる石の橋そはたつ岩に咲匂ふ色ふかみ草紅白の花も幾重の春の末し〜は花てんにしつ〜とゆるき出つ、のとかなる日影に向ひ目をふさきおきもせずねもせぬをりにひら〜と風に小てうのさそひよりまふつとまりつたはふる〜……」

△曲尾「千秋萬歳目出度とて貴賤上下をしなへて皆仰かぬものこそなかりけれ」

曲節付中主なるものには次の如きがある。

サツマウツリ、ユリストテ、本三重、ホウカツウ、本フシ、キンツナキ、近江ムスヒ、レイセイ、一字上ケ、ウタトメ、早ナケ、ヘイケ、キン詞、キンムスヒ、ツメムスヒ、大ムスヒ、小ムスヒ、ヒロフ、片ヲロシ、ハヤ三重、ハコビ、スエムスヒ、モロヲロシ、ギントル、マイハリ、アミトヤツシ、ツキ上キン、アタル、クトキ、サシムスヒ、玉ノフシ、シナリ、半ナヤシ、小倉フシ、ヲグラ、七ツユリ、サイツメ、サナイ、シグレヤツシ、カイトウ、イロサケ、ユリトメ、色詞、中玉、ヲス地、三下リ、キリ山、アイノ手

【梗概】 第一 稻荷の神前に、源氏は播磨守義朝、平家は安藝守清盛等が打ならび、鳥羽法皇が卿相雲客女官達を具して棧敷へ入御あると、神職藤友太夫が、天下泰平寶祚萬歳武運長久國家靜ひつを祝ひ、様々言上して後、其頃名高き白拍子嶋の千歳わかの前がみこ姿で立出で、屋臺で舞を舞ひ、「天下泰平長久に千歳の秋も色かへぬ、よろづ代までも君が代のおさまりさかふことふきは蓬萊山に鶴龜は……」とわかの前が歌ふ。かくてこの練物を出した義朝に對して、法皇には御感の御詞を賜はると、清盛は甚だ不平で、伊勢路より召した嶋の千歳等は白拍子だ、かゝるものを法皇の叡覽にそなへるのは意を得ぬ、何故に惡魔朝敵退治すべき兵具をも神へそなへぬのだ、畢竟女色に耽つての物好だ、法皇はおほめあつたのでなく、おひやかしなされたのだといつて笑ふ。義朝は此時神樂湯だてのいはれを語り、「それは中央なり、庭上に釜をすへ水をいる〜……」といつて、清盛を嘲ると、清盛方のものがあばれようとするが、猿田彦に扮した爲朝が出て腕を見せる。益々事が大きくなるとする時、法皇のお聲があつて一同引下る。

清盛は家に歸つて今日の事を憤り、先づ爲朝を打とるべく難波瀬の尾を送るが、爲朝と澁谷の金王が之を追拂ふ。

第二 爲朝は望にまかせて東海の武者修行に出される。或時義朝が武術の試合を四條河原にて催すと、平家はこれこそ今夜夜討をするものと思ひ込み、三萬餘騎を以て四條に押寄せる。思ひかけぬ源氏方では已むを得ずして戦ひ、兩軍

争ふ中に關白から扱ひがあつて、兩軍が和する。

第三 義朝は一日和歌の前千歳をつれて近江の湖水に遊び、自分は一節切を吹き千歳は胡弓を調べ、和歌の前は歌ひ舞ふ。(此處が節事になつてゐる)歸途、何者かに襲はれた時、女裝した金玉丸が討つて見ると、それは平家の侍監物荒次郎であつた。やがて又途中にて長田忠致の一行に遇ふと、清盛が襲撃の用意をしてゐるからといつて、長田は義朝等を自宅へ連れ歸る。

第四 義朝等は長田庄司忠致の野間の邸にある中に、金玉が策にて、平家討伐の爲に攻上らうとすると、既に清盛に通じてゐる長田は之をとめて、今少し時期を待てといふ。

その夜鎌田兵衛正清の妻は、義朝に近づいて、危険暗示の文をわたし、更に義朝が湯に入つた時も、正清の妻は湯女に交り義朝に近づいて、所謂養老の湯なるものゝ危険なことを教へて、父長田庄司の計劃の裏をかいて義朝を救ひ、又金玉をして伏兵等を追拂はしめる。やがて義朝は、祖父平井保昌は平氏ながら源氏に盡したに反して、長田の今の不忠以ての外なれば、討首にするといつてゐる時、長田の娘たる正清の妻は、父を訴へた功によつて、父の助命を願ふ。義朝は娘の忠義にめんじて長田をゆるす。

第五 爲朝は武者修行の途、伊豆沖の島にて、二人の強者を平げたり、文珠ぼさつに出遇つて、石橋にて、牡丹に狂ふ胡蝶を捕へんとする獅子の舞を見せられたりして、遂に義朝の急を教へられ、獅子に乗つて一飛に都へ歸る。

第六 長田が義朝を討損じて以來再び忠勤を盡すので、清盛は何とかして義朝を討たうとし、遂に景清の勳によつて義朝の館を襲撃する。覺悟してゐた源氏方との間に又戦が始まる。そこへ爲朝が歸つて來て大に活躍する。其時文珠ぼ

さつが又現はれて兩家を和睦せしめる。

【評語】 源平兩家の勢力争を描いたもので、その間に琵琶湖で義朝が千歳和歌の前との遊覽、長田が義朝を殺さんとして失敗、長田の娘正清の妻の忠義、金玉丸の忠節、爲朝の伊豆沖の島にての修行、文珠ぼさつを借りての獅子の舞、稻荷祭に於ける千歳和歌の前の風流舞などを配して相當賑かにしたものである。思ひもかけぬ所に節事をはさんだりして、見る眼は喜ばせてはあるが、筋としては一向に面白くなく、殊に文珠ぼさつをかつぎ出したたりした浪漫味は、むしろわざとらしさがあつて氣障である。土佐物としても良きものではない。

【出處・原據】 義朝殺害の條は、『平家物語』にも出てゐるが、これは舞曲『鎌田』の改作である。島の千歳女和歌の前に關しては、延寶四年七月刊『島の千歳女和歌の前』と關係がある。元祿六年三月竹本座上演の『平假名大全』との關係はわからぬ。或は同物か。

【影響】 元祿三年の正本『鎌田正清』又は寶永八年の『伏見常盤』等に、正清の件が取入れてあるが、正清に關したものは、古くから説經で語られてゐるから、どちらが影響であるか判然せぬ。

○楠湊川合戦

【體裁】 紫蘭文庫藏本。これも珍本の一つである。半紙形八九行、三十九丁。奥に木下甚右衛門板とあり。

【太夫・刊年】 刊年は明かでないが、奥書に土佐少掾正本の文字が見える。

【形式・曲節付】 六段曲にて、各段首尾に形式句がある。けれど少しも節事らしい場がなく、又道行も景事も何もな

5、全くの戦記である。

第一段「扱も其後つらくくかのせいすいをくわんずるにまつりことの善悪によつてちらんをなす、然れは天下のあんきは君に有、いはゆるげうしゅんけつちう是こうせいのかたみ也、されは上一人よりおこつて、下萬民にいたるとは是せんけんのいましめなり、爰に本朝……」

【梗概】 第一 本朝九十五世後醍醐天皇の御時、河攝紀泉四國の守護を楠正成といふ。正成或時尊氏が朝敵となつたときいて、公卿の態度が悪くて、自分の諫言が用ひられざるを歎く。

尊氏は一旦都の戦に敗れたが、九州に勢を得て、再び都に攻上る事となり、直義は二十萬騎をもつて陸路を進み、尊氏は三十萬騎を以て海路を進む。内裏には之をきいて、正成、忠顯、長年其他を招いて評定あり。坊門宰相の言として、正成は攝州に至つて、義貞と共に朝敵を退治せよとの命が下るが、正成は此時それでは大軍に對して勝目がないから、義貞をも召還され、君は再び山門へ御幸あり、正成も河内に歸り、尊氏都に入らば、兩方より挟んで敵を攻める方策を取らんと言上する。一座の人々は正成の説に賛するが、坊門宰相清忠一人が反對するので、正成已むなく最後の腹を定めて彼を嘲り、一門に對しては、「一人成とも生残りたるもの共は、君に對し忠を盡し、若時至つて清忠ていの愚人共がうせはて、時節もよしと見るならば義兵を擧げ、朝敵を滅ぼし、君を御世にたてよと申置べし、かほどに君を思ひ奉る正成が最後の詞死しての後に御覽せよ一事もたがい候まじ」といつて、攝津に下る。

第二 正成は決死の戦をする覺悟にて、十一歳の正行を櫻井驛に招き、色々と教訓をなす。「……かまひてく君に對し奉り、うしろめたきありさますな是第一の孝行也」、弟を愛し郎等を恵め、和田正遠、恩地左近の太郎を父と思ひ、

かまひて母に談する勿れ、又學問を忘るななど、其他數十ヶ條を書置き、常に之を讀めと遺言する。正行は此時父を恨み、共に戰場に赴いて討死しようと思ひが、正成は正行を全く君の御爲に残すのであることを説いて、三代相傳、身を放さぬ一腰を正行に與へる。又和田恩地に向つては千早城に歸ることをすゝめ、一度は尊氏の世となるだらうが、時を見て再び君を御代にたて申すべく、「叶はぬ時は君諸共に討死して、末代に至るまで忠臣と呼ばるべし……今朝家の臣と成て四ヶ國の守護を給はるのみならず、數ヶ所の所領給はる事、君の御恩いかでかほうじ申べき、かゝる大恩を忘れて朝敵に組せん事は畜類よりも劣る也」といふと、和田恩地等は此度は討死をやめよといふ。けれども正成は、成るほど尊氏は追散らし得るかも知れぬが、尊氏が亡びても、今の世では朝敵が絶えぬ、「つまりは武家の天下とならん事鏡にかけて見る如く、……所詮正成が死すべき所は只今也、……正成義を一べんに取て只討死と極めたり、……」といつて、遂に涙の別をする。かくて五千餘騎は故郷にかへし、正成は七百餘騎を以て兵庫に向ふ。

第三 正成は兵庫につくと義貞の陣へ案内し、互に對談の後部署につく。やがて戦となつて、正成は僅に七百の兵を以て、直義の二十萬騎を追散らす。

第四 直義勢の敗軍を見ると、尊氏軍の吉良石堂畠山等は楠の陣に攻よせる。直義軍は再び楠軍を攻めるが、直義は又敗けて退く。

直義軍はやがて尊氏勢と合して楠軍を包圍する。正成軍は敵を追散して後で見ると、七百餘騎あつたのが、今は七十三騎になつてゐる。十一ヶ所の傷を負うた正成は、今は已むを得ず「湊川の北なる在家に引こもり心靜に自害の用意」をする。

第五 正成がいよ／＼自害しようとしてゐる處へ、尊氏の使者だといつて、須賀壹岐守が訪れ、正成の兵略にて足利軍は幾度となく敗られた、前代未聞の事故、足利軍は兵を引くから、正成にも生きて河内へ歸れといふ。正成は使者に對面し、生きたくば一方の軍を打破つて生きるは何でもないが、存する所あつて、唯今自害すると答へる。仕方なく須賀は歸るが、後にて、正成は十八歳の竹どう丸一人を河内に歸し、十六度も合戦して敵を追散らした模様から、一同の武勇の様、自害の状況などを語らしめて、後の世に傳へんとするが、竹どう丸はなか／＼應じない。けれども正成はこゝろと教へて、遂に納得させ、「とかく弓取は命を輕んじ名を重んずるより外別義なし」と正行に傳言せしめ、髪を切つて持歸らせる。やがて正成は自害して志貴の宇右衛門に首を打落させる。和田橋本は正成の首をもつて尊氏軍を訪れて首を渡す。そして二人は陣に歸つて、一同の屍をつみかさね、家に火をかけ、兩人さしちがへて死ぬ。時に建武二年五月廿五日、正成年四十三。

第六 竹とう丸は千早に歸り、一々形見の品をわたして、正成の最後の様子を語つて後、潔ぎよく自害する。

尊氏は攝州の戦に勝つて後、意の如く入洛し、威を振つてゐる處へ、高峯前守が正成の首を持参すると、尊氏は悦びながらも、昔は親しき友の事として、生きた儘の對面を望んで涙を流す。人々は之を見ると「天晴楠、世の常ならば敵の大將何とてかくはの給ふべき、弓取のあやかりものは正成なりとて各涙を流す」。やがて直義の勸によつて、尊氏は正成の首を楠の館へ送り届ける。正行等は父の首を見て今更のやうに歎くが、和田恩地は、尊氏のこの態度は心から出たものにあらず、今迄正成の説ける事を利用して、楠軍の士氣を失はしめん計略だといつて、いよ／＼正行の元氣を引かせる。「和田恩地がふるまひあつはれゆゝしき良等、さすが正成が臣下なりとて、貴賤上下おしなべて皆感ぜぬものこそなかりけれ」

【評語】 第一段は、正成の術策が用ひられず、坊門宰相清忠の態度を嘲つて死戦の腹をきめ、攝津に下る場、第二段は、所謂櫻井驛の別離にて、正成決死の戦をすべきことを明かにし、正行をしてやがて賊を滅ぼさしむべく、五千の兵を千早に送り、七百餘騎を以て兵庫に向ふ悲痛な場。第三段は、戦の場で、正成は七百の兵で直義の二十萬騎を追散らす。第四段、楠軍は又戦には勝つたが、七百騎が今は七十三騎になつてゐるのを見ると、正成は愈々湊川で自害の用意をする。第五は正成が尊氏の使者を返して後、之までの戦況を遺族に傳へしむべく、竹どう丸を千早に送つて、靜に自害する場。第六は竹とう丸が千早に歸つて使命を果して後の自害、尊氏が正成の首を送還する理由と、その裏をかく楠軍の状況。要するに太平記本位の戦記殆どその儘である。

ところで、唯一つ此處で考へられるのは、かうした單純な戰記的記述が如何なる上演を見て、如何なる結果をあげたかといふことである。正本を見ても、曲節付の打方は他の同じ土佐物に比べて遙にまばらである。曲節が濃厚であつたらうと思はれる所は極めて乏しい。太夫は唯昔の太平記讀のやうな態度で語つたのかも知れぬ。それより仕方がなささうである。従つてまた人形の活躍も甚だ少かつたのかも知れぬ。讀者を引つけたのは、唯内容だけであつたのではなからうかと思はれる。

【出處】 『太平記』十六卷によつてゐる。

【影響】 『楠正成家傳軍法』、その改作たる『楠正成軍法實錄』（享保十五年八月豊竹座上演）や『楠河州傳』などと關係がある。近松作『吉野都女楠』や其抄畧作『神通女楠』とは直接の關係は少い。

江戸土佐浄瑠璃解題 (九)

○山居法師
官女忠節源氏三代四天王

【體裁】 紫蘭文庫藏本。小形十七行十二丁。両面繪四。題簽なく、初行に上記の如き内題があり、奥に江戸本問屋開板とある。柱には「木會」とあり、段物集の柱にも「木會」とあるものと同一内容で、極めて珍本の一種である。

【太夫・刊年】 奥に「右此本者土佐少掾橋正勝直傳之以正本寫之令板行者也、元祿七歲甲戌八月中旬」と記す。

【形式・曲節付】 六段曲。各段首尾に形式句があるが、初段が「さても其後」で始まる以外は皆「其後」で始まつてゐる。曲節付はない。

初段に「瀧の景」、二段目に山居法師の庵室の風景の節事、ついで「大ぶ坊道行」があり、又五段目には巴が官女姿にて義仲の耽溺を諫める「いさめの官女」の節事がある。庵室の景以外は段物集中に収められてゐる。大序は下の如く始まつてゐる。――

初段「さても其後爰に仁王八十、安徳天王のちてんしなの、國には、木その駒王よしなかとて、源氏のちやくりうおはします、生年は十八歳、文武二道をかね給ふ、然るに平家は父よししかた公の類の敵なれば、如何にもして清盛入道を亡ぼし、源氏のそくわいを達せんと、あけくれはいかんをくたきすか大明神へきせいをかけ、ふかく念し給ひける――」

【梗概】 初段 義仲は文武二道に秀でゝゐるので、父の敵たる清盛を討滅ぼして源氏の世とせんとしてゐる。乳人木曾忠三兼遠は年六十一にて、父を討たれた義仲が二歳の時から世話をしてゐる。兼遠に五子あり、長を樋口次郎兼光、次を今井四郎兼平。末は巴姫とて十六歳、力男子を凌ぐ。又兼遠の姪には山吹といふ女があり、此外だての小彌太といふ弓矢の達人も義仲につかへてゐる。

或時兼平が武者修行に出ると、義仲も平家の様子をさぐるべく、小彌太一人をつれて忍びて都に出る。丁度六月の事とて暑烈しく、清盛は攝津つゞみの瀧に暑をさける。

(こゝに瀧の景の節事がある。段物集に「瀧の景」とあるのがそれで、段物集の柱には「木會」とあつて、本曲の内容が暗示されてゐる。)

義仲は清盛を討たうとして、小彌太に止められ、夜をまつてゐるが、其時忽然光り物があつたので、不吉を恐れた清盛は近くにゐた安倍保近に占はせる。そして不吉の前兆だと云はれると、直に六波羅に歸る。義仲は已むなく清盛を追うて都に歸り、また忍びて彼を討たうとするが、怪まれて危い處をのがれる。(挿繪の第一圖は即ち清盛の瀧の遊覽の所で、左下には義仲と小彌太がゐる。)

二段目 義仲は小彌太と共に、危難をのがれて歸る處を追手につけられ、巧に落ちのびるが、爾來清盛は、様々に畫策して、義仲の行方をさぐらせる。

その頃西山に一人の僧がゐる。眞休といひ、興福寺再建に關して清盛に恨があり、此處に隠れてゐる。(此庵室の様が、段物集に「山居ほうし」と題して、「そともにしげる夏こだち蟬の聲しんく」と、かけひつたひの岩し水……」

と節事になつてゐる。

難波瀬尾は眞休の葦の邊をさがして、義仲が此地を通つて、法師によつて落された事を知り、彼を捕へようとする
と、眞休は難波等一同を谷に投げ込んで、信濃をさして逃げる。

(此處からまた、段物集には、「大ぶ坊かくめい道行」と記され「佛ももとは捨し世の、なかばはくもる習にや……
文のつてさへ長濱に行末まぼれ白ひげの神にのつとを奉る、それ神といひ佛といひ……こひねがはくは淨海を生死の
海に漂はせ、あとは源氏の白浪に君をかめて臣は水くもらぬ御代となし給へとかんたんくだきほつせなし……ち
ぜんに聞えたるあちの山につきにけり、是義仲がぐんしやにて大ぶ坊かくめいとて名を後代にとどめたり、しうじう
三世のきゑんやときせん上下おしなへて皆かんせぬものこそなかりけり」と段が終るまで相當長い道行になつてゐる。)

三段目 信濃の木曾兼遠が義仲をかくまつてゐるだらうといふので、城の四郎は度々使を出した後、遂に兼遠の城を攻
めるが、兼遠の娘の巴は勿論、姪の山吹、ついでは巴の母あこやまでが、大の鐵棒をふるつて攻めつけ、樋口次郎兼光
と共に、心を合せて奮戦する。平家軍は遂に散々の敗北をする。(第二圖には、その模様が書かれてゐる。)

四段目 やがて城の四郎長持は力攻めにするこの愚をさと、兵糧攻にせんとして城を遠巻にしてゐる。

其頃武者修行に出てゐた今井四郎兼平は越前に來て、あち山につき、更にわざ／＼奥深く入らうとすると、一老人
あつて、山奥には人を食ふ鬼神がゐるから早く下れといふ。けれども兼平は、むしろ行法によつて鬼神に佛果を得させ
ようといつて、進んで山奥に入る。やがて山奥で兼平が寝てゐると、鬼神が出て攻めかゝる。兼平が取組んで争ふて見
ると、鬼神にはあらで人間である。名乗りあつて見ると、彼は根の井大彌太秀國である。二人は物語の後に、城の四郎

を攻める事を約する。そこへ又義仲は、今は名を改めて大ぶ坊と呼ぶ眞休と木曾の小彌太とを従へて、鬼神退治に來
て、争の後に秀國と兼平とを得、四人を己が四天王となし、頼光が足柄山にて四天王を得た例にならつて、四人を「源
氏三代の四天王」と名乗らせる。

五段目 やがて平家の催促あつて、城の四郎は兼遠を急ぎ攻めてゐる所へ、義仲が四天王をつれて後より攻めかける
と、四郎はたまらずして逃げ出す。兼平は之を追かけ、捕へて義仲と共に兼遠に面接する。兼遠は大に喜んで、更に進
んで都に上り、叡慮を安め奉らうといふ。かくて越中越後信濃皆木曾殿の手に入り、義仲はゆたかに暮す。

(ここに節事がある。段物集ではそれを「いさめの官女」と題してゐる。「世はみな戀のながれ川渡りそめつゝ木曾
殿は兼遠が末の娘巴の前に御ちぎり浅からざりし中なりしが、又この頃は引かへて色にはいで、山吹に、御心をうつさ
れて、兼遠おや兄弟が思はんところもいかゞとて、ひそかに忍び出給ひ竹のゝ里へといそがるゝ……此山吹と申せし
はさかりは少し過ぎけれど、又たぐひなき女にて、ほの／＼さけるとよみ給ひし源氏のおもひ夕顔にもおとらぬほどの
美しよくなり……」。木曾がそこへ忍ぶと、巴は義仲にすてられた怨めしさをもらすべく、神の枝をもつて、官女姿で
來る。巴は侍女小百合について、山吹と問答し、「もとより御身と自らも夫婦いもせの中ならず、かりそめぶしのたは
むれに、人めの關も候へは、かへらせ給へ」といふ。ところが此時巴は狂女の風に見えても狂女でなく、その實は色に
狂ふ義仲の「君をいさめの官女のてい」にて來たのだといつて、玄宗が楊貴妃を愛したが爲に、國がみだれた例を引い
て、「今の義仲の大敵は大相國清盛なり、城の四郎を滅ぼして、其勢にのつとり、近國君に従ふを天の與へと思召、よ
しかた公の御恥辱すゝがんとは思さずし、色に迷はせ給ふにより、忠臣巴ぐし君となつて、馬かいが原は竹野の里、楊

貴妃は山吹よ、がいせん爲に來りたり、御ゆるされの有ならばと、かんざしぬぎすて、思ひ切つたる其氣色たぐひまれにぞ見ゑにける。」これまでが「いさめの官女」として段物集にのつてゐる。）

かうなると、義仲は二人の武勇の有様が見たくなつて、むしろ兩女の争を見てゐると、共に薙刀とつての勝負の體はまことに勇ましい。義仲はいさといふ時、喜んで二人の間に割つて入り、兩人をほめつゝ、「此上は末の松山波こそとも兩人共にかはるまじ」といつて喜ばせ、兩手に花にて歸る。

六段目 「そのうちきそどの諸國を切したがへ、いせいをふるい給ふよし六はらへかくれなく小松の三位これもり……」等平家の軍勢が、義仲を攻滅ぼすべく、加賀越中の境なるくりから峠に進み、此處に大戦争があつて、巴山吹や四天王等が平氏の軍を加賀國へ追ひまくり、更にぐんぐんと攻めて、義仲軍は愈々勢を得、最後に四天王の大活躍によつて、いもせのてつせん、かたせの源五、源六、山上九郎等四人の剛の者を討ち取り、殘黨を追散らし、「それよりも木を殿は北ろく道を打したがへ、都へせめ入給ひけり、義仲のいせいのほと干しうばんせいおんかど出めでたきとも中々申ばかりはなかりけり」

【評語】 義仲が平家を滅ぼさうとして苦心する中に、清盛から搜される、やがて義仲はくりから峠にて平家の大軍を破つて、愈々都へ攻上るといふ、義仲の旗揚までの物語の間に、兼平等の四天王を得ること、義仲が山居法師に助けられて都から落して貰つた事と、彼が巴と親しみながら更に山吹を戀して、官女姿にやつした巴御前から諫言される事などを交へて面白い物語としたものである。五段目の濡場が最も興趣深く、兼平等が偽鬼神として活躍する場には聊か公平味もあり、更に巴と山吹の武者振は、『大力女』などの亞流を示すものである。普通の土佐少掾の物語よりか、文

章が明瞭に出來てゐて理解し易いのは注目すべく、他の作とは作者も時代も異なることを示すものと思はれる。

【出處】 『源平盛衰記』及び『吾妻鏡』などによる處が多い。けれども五段目の巴と山吹をかりての柔かい場は創作か、又萬治頃の淨瑠璃及びお伽草子『木曾物語』や、謡曲『木曾』『巴』『兼平』等とも多少關係がある。

【影響】 寶曆六年三月十八日豊竹座上演の『義仲勳功記』は本曲に負ふ所があり、小説としての『義仲勳功圖繪』十卷、『義仲一代記』五卷、天保三年鳥有散人作『義仲朝日鑑』、嘉永三年柳下亭種員作『義仲旭軍配』、安政四年三亭春馬作『義仲勇戦録』なども多少の關係をもつてゐる。野田、富松の物語『契情我立袖』に影響す。

○柏木右衛門古今集

【體裁】 東京帝國大學圖書館藏本。半紙形八行四十四丁、前附があつて、それに例の太夫名や刊年などがある。木下甚右衛門刊にて、柱には「古今」と見える。

【太夫・刊年】 前附に土佐少掾橋正勝とあり、例の寶永五、戊子初秋上旬の刊記もあるが、眞の刊年は不明。

【形式・曲節付】 六段曲。各段首尾に形式句がある。

第一「偕も、其後、こへをあはせて、ゑいさらとはやせやつなこもろこへに、拍子をそろへて、引花に、たはふれゆくは小てうかと、とはど何とかこたへまし、をんどとる身はおかしげに、ずきんたすきものずきのあふぎかざしてうたひける……こへそろへいざやひかふよひくときに、かゝる所にかひげんじのいやうに柏木の五もん……」

かうして、二十一行の間、歌めいた詞章がつゞき、やがて本文に入る。

【梗概】 第一 甲斐源氏の末に柏木右衛門吉清とて文武二道の優男武州大くぼに住めるが、東山義政公に出仕の爲上京し、都の名残に、紫野大徳寺へ参詣の途中、勅願寺の住職たる一休禪師が、つなこの音頭を取るを見ると、一休ならで一興ぞと笑ふ。一休は之をきいて「いや是も又一休也過去も未來へ通ふ一休、雨ふらはふれ風ふかはふけ」といふ。「紫野よりぎをんまで通る間の一休それは聞へて候が……」櫻の木にのり給ふゆへんはいかに」「文珠は獅子普賢は象、我が祖達磨はあしにのる皆はおのくりやく有、愚僧も無常せんべつの道理を以是にのる、あしたの花は夕べのちり、ひらく扇は生するてい、たむ扇は寂滅の教をみせて人々に、ばつくよらくのをんどを取櫻を引と思すかよ、是ぞまことの善の綱、速汝執綱喝々」といつて、一休は四條の祇園に入り、柏木は家に歸る。

折から春の花のさかり、祇園の櫻は紫野の名木を移したものとて、人々之をながめんとて集る。

爰に山中鹿之助照勝とて、西國無双の大力がある。菊池退治に功名をたてたが、赤松滿祐入道性具が足利よりのりを討つた時、讒言にて、義政公の勘氣を蒙り、横難を救はれんとて、北野天満宮に吉廣の名刀を献じて、歸途祇園の櫻を見に来て、小娘の接待の酒に酔うて櫻の下に寝てゐる。そこへ柏木右衛門は來た。彼は二八にならぬ月の眉の小娘を見て、何人ぞと問へば「菅原の宰相道直が妹、名は待宵」と答へ、母の忌日ゆゑ人々に布施をするといふ。柏木も我名を名乗つて後に、これから退京するといふと「待宵姫はよしあしもみそめしけふのはつ花は夢かうつゝか君ならでたれかそれとも乱れがみとりあげさせ給はれと短冊とりいで上の句を書付て進らる、柏木は下の句を短冊に認めて、待宵姫の方へつかはし給ひ取かはし」人目をさけて互に名残を惜しみながら別れる。

「爰に又洛陽に二階堂金剛左衛門鳴風とて、ごうあく無類の好色者、しかも其身富貴にして奢りを極め」てゐるがあ

り、待宵姫を見ると、直に立寄り手を取つて口説き、遂にいやがる姫を強奪して行かうとする時、鹿之助は目をさまし、鳴風を七八間投飛ばし、待宵を歸宅させて、乱暴者を追拂ふ。

第二 菅原道直は今官を辞して八瀬に退き、祇園の事以來、待宵姫を謹慎させてゐるが、姫は天神の申子にて、美にして心ばせよければ、人々に慕はれてゐる。一日北野の宮司から明廿一日和歌を興行するといふ案内が來る。

鳴風はその後も逆がみ鬼太郎、くまべの介等を招いて待宵姫強奪を計つてゐる。即ち今宵の歌の會の最中道直を襲ふて後に、姫を奪はうとする。かくて夜になつて遂に道直を待伏せして、戦の後に道直を殺して、鳴風等は一先づ姿をか

くす。

第三 柏木右衛門は待宵姫の事を思ひながら、兄道直が討たれて姫の行方が知れぬときくと、待乳山に参籠して神の力を頼む。一七日の満願の前日欄干に倚つて四方の景を見る。そこへ十六歳計の振袖姿の「吉原揚屋町立花屋が乙姫、その比全盛うへもなき薄雲の君」が賑かに参詣する。柏木はわざと女の前に扇を落して近づいて聞くと、女は銅土久といふ男に請出されるが厭さに、縁切りの願がけに來たといふ。柏木はそれに同情し、明日請出してやる約束をして、二人で拜殿に上る。

其時そこへ一休が來て休んでゐると、天神のお告があつて、柏木と待宵は過去からの縁で一處にする、今銅土久といふは鳴風のこと、待宵をねらふ不都合者だから殺せとある。一休が此話を、参詣に來た柏木に物語つてゐる時、廓から薄雲をつれに來る。

第四 山中鹿之助は武運の回復を龜戸天神に祈る。

待宵姫は思ひ人をたづねて都から隅田川を渡る、(川渡の所が聊か道行になつてゐる)。そこへ又銅土久が來合せて待宵を引立てようとする。折柄天神の加護にて鹿之助が來て、土久を泥中に投倒し、姫をつれて大久保の柏木右衛門方へゆく。

第五 柏木の宅へは一休が來て、共に待宵をさがして、疲れてゐる時、鹿之助が姫をつれて來る。さて鹿之助の要求にて、昔柏木と待宵姫とが交換した歌を出し合つて見ると、共に「とへかしなそのかよひちはとをく共人の詞の誠なりせば」といふのである。互に天神聖天の擁護を謝す。

やがて柏木右衛門の父と山中鹿之助の父とが親交があつたといふので、柏木は鹿之助の出世をはかるが、その前に先づ柏木の仇討をと用意する。

さて銅土久は今薄雲を請出して楽しく暮してゐる。二人が酒を酌んでゐる中へ、忽然若き男が出て茶の徳をとへ、酒と茶との十徳を双方唱へてゆづらず、舞などもあつて賑かに時のうつる時、若人は柏木右衛門の姿を現はし、薄雲の加勢を得、更に山中鹿之助も飛込んで來て、遂に土久の二階堂鳴風を討つ。待宵はその首を打落す。

第六 柏木は薄雲の方便にて仇を討ち、彼女を馴染の方へ送り、一休和尚鹿之助待宵もともに、先づ金龍山へ、ついで龜戸天神へ禮參する。一休は此時、仇を討つて喜ぶな討たれた人を思へ、「討つ人も討たる人も夢の世に何かうつゝのかたき有るべき」といつて、都に上る。柏木と待宵とはやがて祝言の式をあげる。其時鹿之助は本領を安堵される。

【評語】 筋が容易に理解しがたいほど、人物の名を取かへたり、わざと技巧的に複雑にしてあるが、一口に云へば柏

木右衛門と待宵とが戀し合つてゐる間に、鳴風といふ暴漢に待宵が強奪される。けれども一休和尚や山中鹿之助や、薄雲女郎などが加勢して、暴漢を討つて正しきものゝ戀を遂げさせるといふのであつて、その間には神託も應用されてゐれば、偶然といふことも屢々利用されてゐる。そして廓の情調が取入れられ、遊女が顔を出してゐるので、元祿期の情趣は味はれるが、複雑ならしめ、面白からしめんとして技巧的にあせりすぎて、乱雑と不統一の誹は免れがたいものである。

第五段に於て柏木が土久と茶と酒の徳を語り合ふ所に、「夫酒は百薬の長たる故に是を呑、茶に何の益か有、是は愚や茶の十徳申すもくどし……」のやうな詞章が重ねられてゐる。これが『古今集』の序文に於て、和歌の徳がのべられてゐるに似せて書かれたといふので、外題に「古今集」の語を用ひたものと思はれる。

【出處】 出處の手掛りは乏しいが、曲中に大久保の柏木右衛門の家といふ語がある。現に東京淀橋區内に大久保といふ地もあり、近接して柏木といふ地もある。此近所の傳説にでもよる所があるか。それとも『源氏物語』中の柏木右衛門と、柏木の地名とを結んだだけのものか。

この他龜戸とか待乳山とか隅田川など江戸の地名が出るのはいゝとして、何だか待乳山と金龍山とが混がらがつてゐるやうな書き方になつてゐたと思ふが。

なほ土佐少掾の語物に『新古今歌合』といふのがあるが、それは『古今集』といふ本曲と縁がありさうに見えて關係のないものである。前者は『定家』即ち『新道成寺』の改作である。

江戸土佐浄瑠璃解題 (一〇)

○通俗傾城三國志

【體裁】 帝國圖書館藏本。半紙形八行五十丁。版元木下甚右衛門の前附が一丁ある。『新群書類從』第五にも收む。【太夫・刊年】 前附によつても土佐少掾正本であることは明かだが、それには例の寶永五年の刊記は削られてゐる。内容に傾城味の濃厚な事、及び『通俗三國志』（嘉長翁、一に僧義徹譯）が元祿六年刊である事などから見て、元祿終から寶永頃のものであることが知られる。

【形式】 六段曲、各段首尾に形式句があり、第四段に品川八景の節事があるが道行はどこにもない。

【梗概】 第一 「楮も其後、駒もいさみてなるすゞの、馬子が歌にかしまたちあつまのそらに、かほむけて、朝日にほふとを山やと山の、さくらはなかさる、からあやにしき、色ふとん、しやんとりかけかががさの、うちみゆかしき花と花……」と「新吉原京、三浦のほう順このたび、三がのつの色合、京の名色花月の君、なにはのゑん色むめがへ様、この御二人を呼び下し」吉原の若紫と三人を拜まふといふので、京阪の二人は今品川へついで、明日江戸入をしようといふのである。若紫は名古屋山三利春のあい方だといふので、一處に迎へに来て、先づ品川の揚屋で、梅津の人もんが取もち役となつて、對面の酒宴をなし、やがてそれ／＼が各地の道中の仕方をする。「都難波津この江戸を三がの津とは申せども、その第一の松の君、さも大やうに立いづる、花のめもと花の口、ちよつとさしくし洗ひがみみふりせ

いころ年のほど、たとへていはん花もなし……」と、先づ若紫の姿から、花月、梅ヶ枝と三人に對する曲節の豊かでありさうな形容があつて、「月雪花の三つの君小つまかいとりふりかけて、互にあとさき見合せて、さしにも廣き大座敷、二三四五道中は心ことばも及ばれず」。そこへしゆすの頭巾に菅笠姿の若い男が飛込んで来て、梅が枝に近づいて、實を見せるといつて、右の小指を喰ひ切つて血煙を吹きつける。山三がそれをとめようとする、男は「御身に討たれし不破の伴左衛門が弟同名伴作の廣也」といつて仇討をしようとする。郎等が引組んで首を討たうとすると、山三利春は之をとめて、「それがし父同姓三郎左衛門を伴左衛門に討たれし時、こつすいにてつし無念さを、思へば彼も兄のあだ、うたんと思ふは武士の道、尤も至極のところ也、いまだびやくの者なれば放ちかへせ此名古屋がうんのつきずんばうたるまじ」といつて放ちやる。

第二 其昔四國の住人で、今四谷にすむ、がまそがう大十冬虎といふ富める浪人は、「生得ねちけ肝ふとく力普通に超え」近頃若紫を手に入れようとして苦心するが、意の如くならぬまゝに、郎等に相談して、それも名古屋山三が有る故だからといふので、不破伴作が敵討した體に見せかけ、先づ山三を殺すべく、暗討を計つて、前祝をする。

不破伴作は梅が枝の色に迷ひ、山三を討ちそこねたが、これも腕に力の足らぬ故とて、之を伴左衛門の後室柏木に語ると、柏木は之を人事ならず無念に思ふ。伴作は乃ち柏木のとむるもきかず飛出して姿をかくし、爾來夜毎に金龍山の仁王に願かけして、遂に仁王よりも強さうになる。

ある春の夜、山三が土手づたひに、若紫の所から歸る途中、ある男は不破伴作だと名乗つて山三に討つてかゝる。丁度そこを通りかゝた伴作は怪しみながら、前に命を助けられた恩を報せず討つは卑怯と心得、兎も角も様子はあとで知

れる事と思ひ、山三を助けて逃してやり、伴作になりすましてゐる怪漢十河と組んで、一行十人を追拂ひ、力の強くなつたことを仁王に謝する。

第三 「其後蒲十河大十は、若紫になづみしが、ふと花月にあひ初て、ちひろの海のふかまと成、ちかきにねびきのさたきはまり」その用意をする。又難波の梅が枝は山三に打込み、山三を我物にしようとして色々の悪企みをなし、山三が若紫に贈つた吉光の守脇差をまづぬすむ。

爰にまた伴作は團助と名のつて下郎となり、梅が枝に命かけて通ひ、今夜梅が枝一人の時に近づき思をあかすと、梅が枝は之を利用しようとして、吉光の脇差をわたして、御身とわが仇なる花月を殺してくれたら親しまふといふ。

若紫と山三とが酒盛をしてゐる所へ、花月が遊びに来て、禿を呼んで嶋臺かささらせた煙草の名をよませる。(此處に節事がある。——「花の名所は多けれど、わけてよしのは色も香も、よそにかつ山からさきや、さかりはいまだわくらの、その山からのほととぎす、暗の五月になきわたる、聲も高崎いはくらの、山なたてじやとはらびるに、うへみぬわしのをのながく、ながくし夜のひとりねに、君をまつらにすみのへや、なきあかしたるむしたばこ……)かうして長い節事の後に、更に若紫の知恵試しのやうなことがあり、やがて若紫が嶋臺を煙管にて打つと、百羽の雀が飛立つ。一同が捕へようとして騒ぎ、若紫と山三が一羽を捕へて去つた後で、花月の袂から一羽が飛立つたのを、花月は縁起悪く思つてゐる時、團助は飛込んで彼女を刺殺し、わざと若紫のたのみによるのだと偽る。

その時十河が花月の處へ来て、花月が殺されてゐることから大騒となり、下手人について若紫と梅ヶ枝に嫌疑がかゝり、團助、十河の斬合となるが、伴作の團助は巧に逃げてしまふ。

第四 「其後不破伴作照廣はわかげのそこつ仕出して虎口をのがれ夫よりも、やきがねを顔にあて、面相引かへ名を改め、柴忠太と號しつゝ其身いさうにつくりなし、うき世を忍びゐたりしが」、花月を梅が枝が殺したと定まり、梅が枝が大阪へ送還されるに方つて、十河がそれを貰ひ受けたを、伴作は奪取らうとする。

丁度淺草觀音へ寄進の材木を曳いてゐる十人計の人夫共に近づき、伴作の忠太は神通力を見せて、彼等を手下とする。そして丁度廓から馬に乗せて、罪人として梅が枝をひいて来る十河の郎等と争はせ、忠太は梅が枝を引かつて行衛をくらす。

ある暮春の一日、山三は若紫をつれて品川沖に舟遊をなし、漁人を招いて八景を語らせる。——「まんづ向ひの海つゞき八名のしほあいきはもなく、なみによせたるあわのくに、かすみかくれにほのみゆるゑんほのばいせんなみにいり……」、やがて漁人は我は龍の都より迎へに来た白龜だといつて、山三等を海底の龍宮へつれゆく。

八龍王の都龍宮城——こゝに『三國志』をかつぎ出して、山三は赤帝、伴作は白帝などと呼び、伴作を討たんとせば、觀音妙智の力によれと山三は教へられる。やがてまた元の舟に乗つて、山三等は淺草川へ歸る。

第五 「其後武州入間の郡金龍山淺草寺の觀世音、衆生利益の結縁に三十三年目」にあたり、三月十八日に開帳がある。山三利春は龍王の命にまかせて参詣し、やがて見廻すと、「若紫あまた上郎打つて數々のさげ物思ひ……」にいで立つや、そめしゆかりの忘れぬ、ふかき色香の若紫、銀の花びんに松のしん……」など飾らせ、禿に引かせて出る。全盛の高尾も出る。それらのさげ物を見てゐる中に、春雨が降り出したので山三が暫し拜殿に雨をよけてゐると、傍にあるびんづるが面の薄衣をとつて動き出す。よく見れば、忠太と改名した不破伴作である。兩人斬合ふ中に、山

三が敗れるかと思ふ時、「きくはんにかかしからかさ、おのれとぬけて」、大風をふくみ、二人の間に邪魔となる。伴作怒つて「からかさかけてはつしときる、つばもとよりかたなはおれ、はつと見れはこはいかに、久米の平内兵衛なもりが、せきぎやうにきりつけ」てゐる。伴作が怒つて更に飛かゝると、老僧が飛出して割つて入り、伴作に向つて汝が兄は人を討つなから討たれたのだ、「此上心をひるがへし、山三と水魚の結びをなせ、汝今打果さは不破の家をつぐものなし……」といつて観音の姿と現はれ、紫雲に乗つて舞上る。二人は歡喜の涙を流して互に親みを結ぶ。それと知らず梅ヶ枝は長刀鉢巻で伴作の味方に来る。そこへ花月の怨靈が出て梅が枝の首をとつて消える。又十河の一黨がかけつけて、二人を戀の敵と討つてかゝる、そして場所が狭いからとて、更に大道へ出る。

第六 さて十河と山三、伴作が争ふてゐる最中に、山三と伴作が観音を念ずると、ふうてん、らいでんの二人が空より來りて十河を押へつける。そして二人はいつか山三の郎黨長七、官八にかはる。かうして二人は観音の功力に助けられて繁昌する。

【評語】 頗るごた／＼した難解の筋だが、結局不破伴作が兄の敵名古屋山三を討たうとして、遂に観音に導かれて親み合ふいきさつに、蒲十河が戀敵として、二人を討たうとして討たれる顛末をなひませたものに過ぎない。その間には、京の花月と、難波の梅ヶ枝と、江戸の若紫の間に於ける戀情と嫉妬心がとり合はされ、最初には三都の道中姿、次には煙草の名寄の節事、更に品川八景の景事、龍宮の情景、淺草觀音開帳の賑など、様々の風趣を取まぜて、まことに面白をかしいものとされて、元祿情調が豊かに見られるが、仕組としてはとりとめもない物である。外題の來る所以は第四段の龍宮の場に説かれてゐるが、要するに支那三國志が當時翻譯されて人氣があつたので其軍談の有様を、日本にあて

はめて、山三と伴作とが、その中の人物だといふ事にして、傾城味をからませて、通俗傾城の字を冠させたものらしい。ところで寛文以前の淨瑠璃に於ては、野心あり、力あるものが、他人の妻子や家を強奪したに對し、之を回復し復讐することが淨瑠璃の内容であつたが、此時代になつては、強奪されんとするものは、姫君や奥方でなくて、遊君傾城と變つて、之を強奪せんとし仇討をするものは、武士や大名でなくて、浪人や町人と成り變つた所に、時代の姿を見ることが出来る。換言すれば、中世文學の模倣に過ぎなかつた貴族的文學が、平民文學と變つたことが明かに見られる。

【原據・影響】 之に關しては『名古屋山三郎』『名古屋山三六條通』及『續三國志』の終参照。

○續 三 國 志

【體裁】 古鞞文庫藏本。極めて珍本の一。半紙形八行四十七丁。柱に「續三國志」とあり、奥に木下甚右衛門刊。

【太夫・刊年】 刊年は不明なれど、『傾城三國志』が土佐少掾の語本である事からも、土佐少掾の正本であることに疑はない。刊年は後に記す所から、寶永の終頃か。

【形式・曲節付】 六段曲にて、他の正本とかはり、段付が第一、第二、第三、四段目、五段目、六段目となつてゐる。第二段首に形式句がないだけで、他の段の首尾には皆形式句がある。

第一首「扱も其後、爰に澤田民部彌道永のやさ娘、お吉と申は、いにしへの、小町衣通なんのその只此、君そ天が下、色の帝と夕雨の、ふり袖ながき夜もすがら、とせん慰む手習に、能書の聞へ世に高く、澤田のお吉と申けり。すゞみがてらに吉原の、夜みせ見物御供の、腰元までもぐちならぬ……」

第二首「かやうに候者は熊谷安左衛門稻荷大明神の末社にて候、扱も名古屋山三利春は……」

曲節付は相當濃厚な方で、左にあげたものは目立つたもの、中でも點をつけたものは珍らしいものである。

ウタウツリ、ウタヤツシ、片ヲロシ、玉ノフシ、リヨ、イロツメ、三ヲ上ル、マイギン、ウタトメ、サシ三重、ア
イノ山、同ジフシ、下セメ、下ギンセル、タイナイ、本フシ引取、ギンナヤシ、與作フシ、本レイセイ、本地、二
上リ、シ、ウタ、トル、色詞、七ツユリ、上方フシ、三ツユリ、今キンハコヒ、シヲリ、ヨセ、ヲス、サイツメ、
片タフシ、近江ムスヒ、イロサゲ、ハルクル、今ギンヒロフ、中玉、イヨコノフシ、トメ、トナセ、早、ヒシギ。

初段の若紫の三國志興行、第二段の若紫と山三とが文を焼く場、第三段のお吉の湯島天神への道行、第四段の碓打の場、柏木の夢の場、第五段のお吉の千住への道行、吉原の廓の繁昌、第六段のお吉の家へ蘭丸堅治の婿入の場などは、皆曲節濃かな場である。殊に道行を二ヶ所も用ひて賑かにしてある。

【梗概】 第一 澤田のお吉はお供のものと吉原の夜店を見てゐる。

其頃蘭丸堅治とて、都育ちの四國者が、無双の男色山三と睦み、若紫が三國志興行を思ひ立つたといふので、始めて吉原に出かけ、高尾に初會の約束をする。

蘭丸は夜店を見てゐる中に、お吉の袖に刀をふれて、互に戀風にさそはれてゐる時、山三が蘭丸を引ばる。腰元はお吉を引ばる。かうしてお吉の袖は引ちぎられる。お吉の下部彌太平と、蘭丸の手下衆平内との間に争が起るが、そこへ若紫が来て蘭丸、お吉山三をつれて揚屋へ入り、蘭丸とお吉とをとりもつ。それを見ると、初からお吉に心を寄せた彌太平は無念さに飛出さうとする時、「紫三國志はや興行の刻限としらせ頭を打大鼓」に、彌太平も仕方なく避け蘭丸お

吉は見物に出る。

若紫は「あすは名古屋の山三さまねびきし給ふその名残に、若上郎らを召あつめ……」八陣を語つて、女郎三國志女諸葛孔明と名を残さんと思ひ立つ。「抑諸葛孔明が呉魏にむかひし八陣は、天地風雲龍鳥虎蛇の八つなりき、本朝に傳へては、一に魚鱗、二に鶴翼、三に雁行、四に彎月、五に鋒矢、六に衡輓、七に長蛇、八方圓、魚鱗を一となすゆへに、之を初會に例へたり……いかなるたけき武夫のや竹の弓もよわ／＼と引に引かれぬ戀の矢をいとげて身請する時は、かいろ満足第八の方圓の陣、是ならんと辯理を盡してさはやかに語りければ、一同はげに傾國の孔明と」ほめそやす。その時彌太平が呉の孫權だといつて飛出すと、若紫は孔明が此にゐるぞといつて酌をする。討たんとすれば酌をして、遂に敵を酔つぶれさせてしまふ腕に人々は感ずる。

第二 名古屋山三は淺草觀世音を信仰してゐるが、その山三が、「今日絶對絶命の卦にあたる故守護いたせと觀世音」の命があつたので、稻荷大明神の末社熊谷安左衛門は守護の爲山三の家へゆく。

不破伴作が川風に吹かれてゐると、これも深川筋へゆくといふ女が螢を一人でとつてゐる。伴作が近づいて送らうといふと、敵は討たぬかといひ出す。伴作が怪しみてたづねると、それは、伴作がこの前梅が枝にたのまれて討つた花月の怨靈である。争ふ中に怨靈は空にのぼる。

名古屋山三と若紫とは深川にしんみりと暮してゐる。丁度七夕の前夜である。二人は七夕姫に文を手向ける心にて、昔の色々な文をとり出して見てゐる中、調子の蓋をとれば煙の内より化したる姿が出て、天女となり、「あすはいもせの夜、今宵伴ひ天上の榮花を見せよ」といふ。その中に數多の文は「鵲の橋となり、青赤の虹たなびけば、山三紫覺へ

すも、いと面白く乗移り、雲のかけはしはてしなく陸地をはなれて上り、虹は蛇となり、我は梅が枝の怨靈だ、御身に心が残り、にくきは若紫といふ。その時客か来て大蛇を大地へ蹴落す。と紅葉の木が動いて、紅い葉が鱗となり、大蛇と現はれて、我は花月の怨靈だといふ。即花月と梅が枝の大蛇はからみ合つて争ふ。不破伴作が来て斬つけるが手にあはぬ。すると先程の客は我は熊谷安左衛門で「色欲のいましめを蛇道の苦患にいらせた」といつて、兩蛇を切つて消えうせる。三人は危難をのがれて拜謝する。

第三 「其後蘭丸堅治年高は、かのうつりがの片袖をはだをはなさず持給ひ、江戸七ヶ所の御社へ戀の誓を」かけ、今日は七夕とて湯島天神へ社参する。澤田のお吉も中橋の宿を出て、弟子どもをつれて天満宮へ参る。（此邊が道行になつてゐる。）——「久方の日本の橋にぎはしくきそう、肆ときめきて、太鼓さゝらのさら〜とおどるをんどのはりあげたこゑがよいとて立とまり、しばし詠で通町……思ふ戀路をいかでかは水にはなさし湯島なる天満宮にぞ着給ふ。」お吉が祈請をした處へ、蘭丸は駒から下りて社参し、戀の成就を祈請する。

丁度お吉が蘭丸の姿を見つけた處へ、例の彌太平が駈つけて来るが、腰元どもが彌太平を押隔て、二人を遇せると、互に心變らじと契ふ。其所へ彌太平が飛んで出ると、蘭丸のお供久米平内も飛出す。かくして危い處で、主人達は歸つた後にて、彌太平と平内とは戦ふが、遂に彌太平が姿をかくす。

四段目（第四となくて） お吉はその後一間住居の佗しさに、十三夜を幸、碓に事よせ拍子をととり、「すでに拍子の程もよくあさのさ衣うつ音に昔戀しや忍はしや忍ぶにあかぬはしかきや……」と慰められて居ると、蘭丸から文が届く。それによると、彌太平は四國に於て、蘭丸の父河野太夫をうつた阿波の鳴戸左衛門龍臣と申ものに紛れない、即ち

親の敵を討たんとするのだが、若し刃の露とならば菩提を弔ひくれよとある。お吉は悲しく、人々を眠らせて後、書置をして、忍び出て行方知れずになる。そこへお吉戀しさに彌太平は忍び来て見ると、お吉がゐない。腰元を起して聞かぬ。乃ち序に寶藏に忍入り金箱を背負うて逃げてゆく。

牛嶋の木母寺では、不破伴左衛門の七回忌の供養がある。伴左衛門の妻柏木は、弟伴作が敵山三を討たずして、却つて一味するを悲み、自ら夫の敵を討たうとして、男装して大念佛の仲間に入り、勝利を祈念してゐる。其時石碑が二つに割れて不破伴左衛門が現はれ、今日は山三が葛城を身請の約束鳴原へゆくといつて去るあとを追うて柏木も急ぐ。

「かつらきは名古屋山三にうけられて今宵くるわを出舟の月諸共に身ごしらへ鏡にうつる湯あがりの」姿を見ると、不破伴左衛門は昔の戀人が慕はしく抱きつく。葛城は山三の女房として今宵廊を出るものをなぶるなといつて怒る。そこへ柏木が飛込んで此體を見て驚き、散々にたしなめて、その羽織をぬかせると、それは衣冠正しき大王となり、又左右にも大王が出る。中の大王は、我は魏の曹操、左は吳の孫權、右は劉備玄德といつてゐる中に、又曹操は伴左衛門、孫權は蒲十河、劉備は名古屋とかはる。その中へ葛城が割つて入り、柏木に向つてさとし、汝も争をやめて、出家して、伴左衛門が追善をなせば、一蓮托生の疑ない、我は淺草の觀音だといつて、花の姿となり光を放つて飛ぶと、夢は破れて、木母寺の鐘が響いてゐる。柏木は即ち髪切つて出家する。山三は寺を建て、柏木を住職とする。

五段目 お吉は願禮妾となつて、道行をなし、千住の宿にさしかゝり、上野の方をながめて心細く見かへつてゐる。と丁度阿波鳴戸左衛門龍臣をさがしてゐる蘭丸堅治年高と、久米平内兵衛長守の弟同平内左衛門長照の姿が其處に見える。お吉は喜んで蘭丸を抱きつく。そこへ伴作が来て、阿波の鳴戸左衛門は今吉原を徘徊してゐるから、敵討の手だて

を計らうといふ。かくて九月十八日吉原にて首尾よく蘭丸堅治は敵を討つ。

六段目 蘭丸はめでたくお吉と夫婦になる。伴作も山三も蘭丸も皆領地を復される。花月梅ヶ枝の怨靈は僧の供養にて成佛する。「名古屋堅治不破伴作佛法の威力をかんじ、怨敵退散めてたくも、富貴にさかへ給ひけり。千秋萬歳めでたしとて貴賤上下押並て皆あふがぬものこそなかりけれ」

【評語】 續篇として事件を展開する程の價値もないのだが、此處で三國志の意義が少しく明かにされてゐる。つまり伴作の兄伴左衛門と、蒲十河と、名古屋山三郎三人をならべて支那三國時代の曹操孫權劉備に比べて、若紫が取持役となりて、三人をして争をやめしめ、觀音の利益によつて悟を開かせたといふことであるらしい。

そして本曲の構成は、伴作が山三に對する敵討をやめて親しんでゐる間に、伴作の兄伴左衛門の妻柏木が、自ら敵討をしようとする事件、蘭丸堅治はお吉の下部彌太平が父の仇の龍臣であることを發見して、遂に敵討に成功するといふ事件を骨子として、その間に蘭丸とお吉との戀愛、花月梅が枝の怨靈、山三の若紫身請事件などをからませた、まことに雜然たる統一なき而も迫力の乏しいものであるが、各段には節事や機巧仕掛の人形の活躍を取入れ、支那の史的事實をからませるの聯想的興味などを引いて、面白をかしい中に、觀音の功力を見せようとしたものである。

文章は前篇よりも一層不明拙劣である。人物と事件の運びでは、別曲の『名古屋山三郎』とも關係してゐる。

【原據・影響】 元祿六年刊『通俗三國志』（嘉長翁、一に僧義徹譯）五十一冊の影響を受けて、元祿末頃生れたものかと思はれるが、恐らく文七事件を扱つた『達髮五人男』（寶永四年西澤與志著）『風流三國志』（寶永五年、與志著）等の影響で、寶永六七年頃に出たものではなからうか。其後『續三國志』等の小説は度々出てゐる。

人形の舞踊

私には舞踊、殊に日本の舞踊はわからない。西洋の舞踊もわからないけれども、わかりさうでゐて、わかりたくて、日本の舞踊があまりにもわからない。従つて他人が面白いとか、うまいとかいふのが、何の事かわからない。いさゝか癪である。そこで私は日本の舞踊を見て面白いといふ人に、何處が面白いのか、何が面白いのか、何故に面白いのかと聞いて見る。ところがその時の答は矢張常識的で、何ともいへない面白さであるとか、理窟はわからないけれど只面白いといふのである。矢張私と同様にわからないのだ、と思つて私は愈々不安心になる。

ところが何故に日本の舞踊はわからないのであらうか。私は考へて見る。舞踊そのものの成立の根本原理、手足や體の運動が感覚に訴へる作用、之に伴ふ歌詞の意義、運動美、音樂美、舞踊の發達の傳統的意義、少くともかうしたものに於いて、殆ど何も知つてゐない私である。他の舞踊が面白いといふ人の多くだつて皆同様であらう。わからないのが本當である。

例へば『道成寺』や『累』や『辰橋』などの舞踊を見るには、少くも之等の歌詞を充分に暗誦し、理解し、その舞踊に供ふ音樂を理解し、三味線の味がわかり、その踊り方が、能樂から如何に影響を受けて來てゐるか、如何なる傳統的

發達を遂げてゐるか、歌詞と肢體の表現との象徴的乃至寫實的關係、などが相當にわかつてゐない限り、『道成寺』も『累』も『戻橋』も何もわからない筈である。だから普通の演劇や文學や美術がわかる以上に、史的傳統的形式的要素乃至音樂的要素に對する知識をもつてゐないと、舞踊は立派にはわからない筈である。少くとも日本の舞踊は、象徴的、傳統的、形式的な型や約束を知り、能樂を理解してゐないと、充分に面白味が呑込めないやうである。かう思ふと、日本の藝術中で、最も厄介なのは舞踊であるやうである。覺えるにも、見たり味つたりするにも六ヶ敷いやうである。只感覺に訴へただけでは如何にも物足りないからである。多分の知的要素を含んでゐるからである。

二

數年前文樂座の人形遣桐竹門造氏が多年の苦心によつて案出した女文樂——十四五歳の女の子をして、特別な遣ひ方によつて、人形をつかつて、淨瑠璃芝居をやらせるのである——を見た時に、其遣ひ方の巧妙と、仕掛の輕便なのを見て感心し、此女文樂をして、淨瑠璃芝居をやらせるもいゝが、一步を進めて、長唄だの常盤津だの、清元だの、歌物に進出せしめて、歌物をもつと芝居化し發達させたら面白からうと私はいつたことがあつた。その時の私の考は、微妙な寫實的な動作は、之を子供に求めることは六ヶ敷くても、簡単な舞踊的表現は、女の子にも容易に出来るであらうし、また却つていゝ、効果があげられるだらうからと思つたからであつた。と同時に私の考は、之等の歌物に關して、これまで行はれてゐる舞踊、傳統的な型にのみ重きをおいた舞踊の外に、新様式な、歌詞にもつと密接な關係をもち、成るべく歌詞を簡單に翻譯し、象徴味よりも、割合に寫實味の多い、新しい歌謠的な舞踊、吾々にもつとわかるやうな新舞踊

を案出し振付して、之を女文樂にやらせたらどうだらうかといふ意味であつたのだ。その時にはさうした説明は試みなかつたが、そのつもりであつたのだ。さうすることによつて、新時代の舞踊を發達させることが出来るだらうし、新時代人にも充分に舞踊の賞翫が出来るだらうし、本當に舞踊がわかりもするだらうし、面白くも味へるだらうと思ひ、又それによつて、折角案出された女文樂を發達させることが出来るだらうと思つてゐたのであつた。

三

昨昭和十二年の暮に、新橋演舞場に於て、年中行事の花柳界の人々の舞踊會が催され、その中に文樂座の人形の大立物たる文五郎と門造の兩氏も演出すると聞いて、歌物に對して如何に人形の舞踊が演出されるのだらうかと、私は多大の興味を想像して出かけて行つたのであつた。そして其結果は全然豫想の外に物足らないものであつた。人形の踊が下手だつたからではない。勿論花柳界の人達の歌の技巧には、これといつて、感心させられたものはなかつたが、人形の舞踊が人間の舞踊と同様にわからなかつたからがつかりしたのである。實際人形の舞踊は面白さうには思はれたが、正直にいふと殆どわからなかつた。思へばわからないのも當然である。『道成寺』は平生長唄の『道成寺』に於て、俳優の舞踊に於て見てゐたものと、同様な型で、長唄の地で行はれたに過ぎず、『累』にしても、平生歌舞伎劇に於て、清元で行はれてゐると同様に、矢張同じ型で人形を踊らされたに過ぎず、『戻橋』だとして、歌舞伎の劇場で見てゐたと同様のものを、矢張常盤津の地で、人形の舞踊によつて見せられたに過ぎなかつたからである。私は最初人間の舞踊とは、多少は異なるものを見せられるのかと思つてゐたのであつたが、その考がそも／＼の誤であつたことを知つて、我な

があまりに愚であつたことを知つて恥しかつた。ひよつとしたら、もと／＼人形劇から出たこと多いかも知れない人間の舞踊ばかり見てゐて、今更人形に於て異つたものを求めてゐたのは、飛んだ愚なことであつた。と思ふと、私は全く失望せざるを得なかつたのであつた。

そしてその時私は更に考へた。これでは歌物を女文樂にやらせたら、女文樂を歌物の世界に進出せしめたらといふことは無意義である。新に舞踊の形式を案出して女文樂にやらせたらといつたとて、それを案出する人の頭が、既に型にまづつてゐて、一步もぬけ出せつこはない。これはどうしても本當の新人が出て來ない限り出来ることではない。私のいふやうな、新時代人にわかるやうな舞踊の案出と、本當に吾々にわかり、本當に面白いと思へる舞踊を發送させるのは容易なことではなく、日本の舞踊の前途は依然として暗たんたるものだ。猿之助のやつてゐるやうな新舞踊、やつぱりわかつたやうな、わからぬやうな舞踊で、長いこと、いや永久に我慢する外はないのかもしれない、——遂にこんなたわいもないことを考へさせられ、人形の舞踊といふことについて、淋しい氣持にならされてしまつたのである。

江戸土佐淨瑠瑠解題 (二)

色里 對面會我

【體裁】 岩瀬文庫藏本。演劇博物館にも藏本す。半紙形八行四十六丁。奥に木下甚右衛門刊とあり。『新群書類從』第五にも收む。卷末に「色里開關對面會我」とある。

【太夫・刊年】 前附にも奥附にも土佐少掾橋正勝直之正本と見える。けれども前附に、例の寶永の刊年はない。尙この曲の心中道行と、かつこ物狂とを抜萃した段物集の表紙には、「高尾さんげ」なる段物と同様、右側に一行にして「内匠太夫、同虎之助」、左側に、一行にして、「土佐少掾橋正勝直傳、ワキ内匠源太夫」と記されてゐる。

【形式・曲節付】 六段曲。各段首尾に形式句あり、一段目に女郎を辨天及び十五童子に比べる節事、三段目に十郎と虎の心中道行あり、四段目首の少將の道行は段物集では「かつこ物狂」といひ、五段目に遊女屋名寄の節事がある。

第一「扱も其後、あまつこやねのべうゑいに、そがの太郎すけのぶとて、さがみの國に名をえたる弓取一人おはします、……」

【梗概】 第一 曾我太郎祐信は子なくして、工藤祐經に討たれた川津三郎の二子一萬箱王を後室共に貰ひ受けて、箱王を箱根に上せ、一萬を十郎祐成として家をつがせ、其祝儀が終ると、工藤祐經は祐成に向つて、伊東の家の讓物は最早必要がなからうから、當時の嫡孫たる我に譲れといふが、十郎はきかず、強ひられると祐經を討たうとする。此時朝比奈が遮り、祐經を討つと、天下の掟を二重に破ることになる、即ち工藤の父は汝の父に討たれたから工藤が

汝の父を討つたのだ。二度の仇討は許されぬ。又養子は實父の敵を討たぬ筈だといふ。かうしてなだめて其場は静まる。

大磯化粧坂の小櫻屋に、祐經と大藤内が遊ぶ。そして少將を辨天とし、他の女郎等を十五童子に扮せしめ(こゝに節事)、酒事後、祐經が寝たところへ、五郎朝比奈が、ついで十郎が来て、敵祐經を討たうとして見ると、祐經は逃げて、代りに大藤内が寝てゐる。五郎等は少將が祐經を逃したものと思ひ、苦しめようとする時、宿の亭主が遮つて、祐經は龜壽といふ女郎に馴染んでゐるから、時を見て仇を討たせようと約する。

第二 朝比奈は大磯の騒が父に知れて勘當される。五郎も法師にならず男になつたとて、母から勘當される。

頼朝は右大將に任ぜられたとて、祝の爲に能を催ふし、諸大名から町人にまで一日觀覽をゆるす。此時平家の殘黨盛久は頼朝を討つべく時をねらつてゐた事とて、途中に女を殺して小袖を奪うて着、道に立つてゐると、梶原景時がぬれかゝる。即ちそれにつれられてお能場に近づき、時をはかつて合圖をすると、味方は討つて出る。戦は暫くつゞく。

第三 大磯の虎御前が全盛の折柄、梶原景時は虎に思をかけて通へども、虎は意に従はぬのみか、道にて散々に景時を辱しめる。偶々團三郎が館屋に扮して、色々の館を敷へたてて賣りに来る。折しも景時が鎌倉から急使に迎へられて歸つた後、虎は團三郎を我が部屋に案内し、十郎の事をたづね、父大納言の紀念の裝束を團三郎に着せ、十郎と思つて思をいやし、「かむりかきぎぬ着しつゝ、さてもひひなのはじまりは、淡島の御神、住吉の明神に名残を惜しみ……むすびし中も理と、夕つげ鳥のなかぬ日は、ありとも君にあはぬ夜はなふおぼへぬと、諸共に肩にもたれて立

ゐたる、姿はさこそよめには、色と思はぬ人ぞなき」(と節事)所へ、十郎は忍び来て、此様を見て嫉妬し、二人に向つて怒鳴りつける。ところが、時宗は兄が廓通にうき身をやつしてゐるを嘆いて、何とかして虎から遠ざからしめようと思つて、かゝる事をしたのだと、團三郎が辯解すると、十郎は始めて心が解ける。團三郎が歸つた後にて、十郎は虎を思ひ切らうとして得ざる心を語れば、虎は十郎の爲に却つて自害せんとする。十郎はそれを押とせめ、仇討を思ひながら、忍びて帶二筋を二階の柱に結び下り、ひそかに二人で道行をする。「いろはにほへどちりぬるを……人をうらみ身をなげき、かなしむまじと思へども、我らごときのおろかの身三界火宅と聞時は……身にも哀を知るといふ鳴立澤にぞつき給ふ」。さて二人が心中といふ時、十郎が虎の胸元を刺すと、虎の心をためす爲の木太刀はぼきりと折れる。かくて十郎は虎の眞心を知つて、安心して連れ歸り、二の宮方に忍ぶ。

第四 (最初から少將の道行になつてゐる)——「わたるいたはし、とんどろとどろ、しどろもどろの足なみを、物くるわしのすがたやと人のやすか自を……かしこのつまど、こゝのすみく、かけりめぐつて、物くるはしき乱びやうし、……心のみだれかみゆうて恨をはるのくれ鳴立澤にぞつきにける」。五郎は行脚僧の姿にて、大磯の虎が十郎と共に心中したので、石碑をたて、回向すると見せかけてゐる時、石碑に腰かけた少將を見つけ、互に心を語つてゐる折柄、通りかゝつた提灯の紋の横木瓜にて、駕籠の主を祐經と思ひ込んで、討つてかゝり、首を見ると祐經でなく、祐經は後ろから討つて来る。争の最中に朝比奈が飛來つて中に入り、仇を討つなら兄と一緒に討てといひ、祐經は討てるものなら討てといつて、劍を五郎に投げ與へる。五郎が怒つて祐經の手首を握ると血が流れる。朝比奈は其血を盃にうけ三人で再會を約せしめる。

第五 頼朝が武州の観音への代参として、祐経を遣すときいて、十郎五郎は機を狙ふべく江戸に赴く。折柄大磯化粧坂の小櫻屋は、朝比奈から家名を三浦屋と貰つて、新に色里を開く事となる。(此處に遊女屋の十三軒の名寄がある)。愈々上棟の式を行ふといふ日、大勢の人夫の中に、祐経の一子犬坊がゐて、五郎十郎を見て討つてかゝるが、朝日の如來の加勢と、朝比奈三郎の助けによつて、曾我兄弟は無事なる事を得、却つて敵の郎等を討つが、祐経は風を食つて逃げてしまふ。

第六 五郎十郎は江戸より歸り、虎少將と共に和田義盛を訪れ、朝比奈の爲に勘當の許を乞ふて承諾を得る。丁度此時判官盛久を討伐する命を引受けよと、頼朝からの使が来る。父義盛が盛久討伐の命を受けたと聞くと、朝比奈三郎は、盛久が浅草観音近くの浅ちが原に城をかまへるときいて、早速一人で攻めにゆく。勝ちに勝つて遂に盛久と組んで、愈々といふ時、父義盛の軍が攻めて来て、遂に盛久を生捕にする。

【解説】 曾我兄弟が祐経仇討の前日物語に、主馬判官盛久の頼朝討伐の騒動を交ぜたもので、三段目四段目はなか／＼劇的に戯曲的に出来てゐるが、五段目六段目の如きは、至つて戯曲的でなく出来上つてゐる。五段目に吉原開設の場があり、それに遊女屋の名寄がある爲に、『色里開闢對面曾我』などといふ名をつけたのであらう。二段目に頼朝が能を催す場があるが、その點からいふと、時代錯誤の甚しいものである。

【原據】 曾我兄弟の事は『曾我物語』によつてゐるが、盛久の事は謡曲『盛久』や、『源平盛衰記』とも縁がうす

○博多露左衛門色傳授

【體裁】 古綴文庫藏本。『新群書類從』第五にも收む。半紙形八形四十九丁、初行に以上の内題があり、卷末には以上の内題と同様に記して、その終となつてゐる。版元木下甚右衛門。柱には「色傳授」とあり。

【太夫・刊年】 前附に土佐少掾正勝とあり、例の寶永五戊子初秋上旬の刊記あれど、眞の上演年代などは分らぬ。第五六段に江の島辨天の開帳と記されてゐるが、それと此上演との間に深い關係があらうと思はれる。

【形式・曲節付】 六段曲。第一段三段五段には、段首に形式句なく、二、四、六段は「其後」で始まり、各段尾には形式句がある。

第一「^{ナガシ}既に御船^{ナガシ}こら成て御舟^{ナガシ}たまには、辨財天を勸請し、^{キンノリ}ほららい丸とかたを打、^{キンノリ}こがねの箱や巻物るい……」

曲節付の主なるものは、
ナガシ、本フシ、キンノリ、キン詞、カ、ル、チクリ、ユリステ、フシノリ、色チクリ、色ユリ、マイギン、
ハヤ三重、サナイ、本地、トル、スエムスヒ、玉ノフシ、キンヒロイ、ハルムスヒ、本フシ引取、クトキ、
入ギン、マイハリ、アミトヤツシ、フシウツリ、三ツユリ、ユリモトシ、ツメムスヒ、ツナキ、サ、ナミ、
ヲトリ、イロヒロイ、レイセイ、アイノ手、上方節、シツメテ、犬ムスヒ、三ツ引、ユリウツリ、キンハコヒ、
人ヨセ、上ゲムスヒ、ハコヒ、ウタイカ、ル、下セメ、リヨ、シナリ、一ジノミ、ナス、ギンシナリ、
ハカタフシ、三重上ケ、アフミウツリ、エイカンウツリ、キリ山、テントン、ウタヤツシ、サツマウツリ、

本レイセイ、シクレ、イロサシ、イロサケ、ナヤシ、キンナヤシ、キンカハリ、ウツムスヒ、ハヤナゲ、ノリミ、アフミ、ウタナヤシ、本フシヤツシ、本サナイ、サイツメ、哥トメ、地ヲクリ、一ツ三重、二ツ三重、ユリウツリ、トナセ、ギンヲトシ、カイトウ、ウタイトメ、シシ、クセマイ、ホウカ、トナセ、アフミ引取、イロ地、片タ、本フシヤツシ、レイセイカ、リ、ツキカヘシ、リウクハ、セイタイフシ、クリ上ハル、中ギン、キン上ゲ、哥ナヤシ、ヘイケ

以上の如く、曲節極めて濃厚で、有ゆる曲節付がつけられてゐる。その上第三段に女郎の道中、第四段に道行東下り、第五段には四季の繪馬、音楽の場等があつて、相當に賑かである。

【梗概】 第一 九州に於て朝日長者と歌はれた天若み子の子孫博多露左衛門光次は、何不自由なく暮しながら、井底の蛙といはれるがいやで、「諸國をめぐり色里に遊び、ひなびし國詞」をみかくべく、此度蓬萊丸を造つて、美しく飾り立て、小倉増ほの助、宮城野萩之丞をつれ乗初をする。後から長崎丸山の太夫、異國和國の二人が追かけて來て、船に乗移る。やがて鵠を蒔繪にし、天の川と銘ある大盃を出して、光次は兩女と一緒に寄り合つて酒をほし、色執行の船の五十反の帆絹を、兩女に織らせる爲、二人を身請して、改めて船出すべく、一旦博多の浦へ舟をつかさせる。

九州四國の盜賊の大將に鰐のばんこすい王とて、木戸狼の助の孫なる悪黨があり、それが今敵の爲に領分を取られ、浪人となつてゐる。その一子鰐の大八は關東に住む。瑞王は赤鬼地獄兵衛、大袈裟の無佛坊、引さばきの鷲次郎、雷の八右衛門等を従へ、丸山の色里にて、和國異國の二女を手に入れんとしてゐるが、博多の露左衛門が金の力

で縛つてゐるとき、露左衛門光次もろ共手に入れようと、赤鬼と無佛をつかはす。

丁度異國和國の二女が、博多織の帆を織つて、之を光次に贈り、同時に博多織の織り方を、所の女どもに教へてゐる所である。

さて光次が船出をせんとする時、例の赤鬼と無佛坊が來つて、異國和國の二女を強奪して去りかけるが、此時光次の下部扉の貫藏が飛んで來て、赤鬼等をひねりつぶし、二女を巧にとりかへす。

第二 露左衛門光次が大阪に來て、宿をかまへてゐる所へ、瑞王の一黨が夜討に討入る。貫藏と團六が散々に敵を平げ、最後に危くなつた時、辨財天の化身として、高橋といふ女郎の妹巖が「ありとも見へぬ劍をぬき」、瑞王の咽笛に投つけて、見事に敵を滅し、光次を助ける。修羅場である。

第三 都に初菊といふ名太夫がある。光次は若松屋を頼み、手段を盡して此太夫に逢はうとし、賤しき商人風に装うて、初菊の道中すがらを近づくと、金づくでは何人にも逢はぬ初菊も、むしろ賤しき姿の商人風の男に心をひかれ、光次に逢ふ事となる。

やがて茶屋にて例の天の川の大盃を、異國女郎からの土産だとして差出し、互に飲み合つた後は、更にそれを吉原の小紫女郎へと、飛脚をたて、送らせる。ついで光次は當分流連する事として、女郎達を二組に分けて、大關關脇小結など、呼んで色相撲を催す。

やがて蒲團を土俵として、相撲の起源から述べたて、いよく本當の女相撲を戦はす、その様は「ぼたんのかけよりからし」が、小蝶をとらんと爪をとぎ、はがみをなせし勢も、かくやと見えて面白。——（道中の處と相撲の

場は共に節事になつてゐる。

第四 露左衛門光次は島原の初菊に深くなじんでゐる間に、江戸の小紫に遣した早飛脚が歸り、歌と名香柴船とを差出すと、光次は喜んで江戸に下る。「……京とはいへど、ひなびたる、馬子の歌にのりかけの、戀ぢ執行のあづまの旅、今なり平と名やたゞん、ついぬれぎぬの紫がおさへてもどす盃の……」（と道行）。やがて大井川につくと、水上が大雨にて、川止めだといふが、露左衛門は、我家はあめ若み子の子孫にて、梅雨に對して奇特あり、その爲左衛門尉にされたのだと語つて、難なく川を渡り、大磯の宿にては、虎が石を持上げようとして遂に成らず、怪しむ時、石が割れて虎御前が出る。虎は「仙女となつて此石中の仙境に楽しみすんで年久し、我すむ色の世界こそ、女仙のみか色しゆ行、よく／＼尋ねとひ給へ」といつて、光次をつれて石の中に入れば、大道開けて不思議の世界に出る。「前にはしすいの流川波二上りのばち音をしらべ、後にはまゆの山をゆるもとの月をみせ、十八公の松風は、琴のね色を吟じつゝ……」かうした國に導かれて、光次は茫然としてゐると、天女の如き白女しろなが出て西王母の殿を見せて消えたり、宮木といふ仙女が出て傾城の由來を説いて消えたりする。やがて光次は目がさめて東に下る。——（此邊には盛に機巧仕掛が用ひられてゐる。）

第五 光次が東に下つて、小紫を訪れると、彼は此程勤を退いて、龜井戸天神に閉ぢこもり、紫式部にまねて、色里源氏といふ草子を書くべく、思ひをこらしてゐると聞き、光次は天神へ參詣して、出遇ふ機會を得ようと、繪馬などを見てゐる。「先正面の右の繪は春のていかと打見へて、やよひなかばの八雲霞、吉のかめ山、嵐にも、増る上野の花盛り、このまかのまの紋づくし……」、夏の繪では隅田兩國の景など四季の景の繪馬を見る。（十二段草子の四

季の眞似である）。

小紫はやがて疲れて、二人の禿に胡弓をとらせ、自分は琴をひき、「曲はさまざま多けれど、かいでが女郎を忍ぶがさ、女郎は客をまつよいの、まがきのしよといふ曲を暫しが程調べけれ」。光次は十二段草子の牛若よろしく、一節切を暫し吹く。小紫は音に引かれて、怪しみながら禿二人に一節切の主をさぐらせる。そして自分は「……つゆの大臣光次とて、京大坂のわけの里、六十女郎をなづませし、若大臣のおすがた……」と、十二段草子の牛若風に装束を説きたてつゝ、光次がなづんだ遊女の名などをならべて、「色のゑい華の君なれば、光る源氏と申すなり」と歌ひかなでる。光次はこの琴の主が、わが一節切を聞いて、わざと歌へるものと思ひ込み、この前小紫が贈つた名香を禿に渡して、案内を乞ふ。「東の花と筑紫の月しばし詠てことばなし」。やがて光次は小紫と共に行列をそろへて、「男女の縁を結ぶの神」ときく江の島の辨財天の開帳へ參詣することになる。

第六 光次は其後小紫になじみ、ついで初菊も、長崎の異國和國も迎へ、四季の局を建て、暮し、やがて開帳中の江の島辨財天に參詣する。偶々瑞王の子爵の大八が仇討に來るが、辨財天の眷屬の爲に引倒され、説法によつて光次の臣となり、光次は九州に歸つて榮える。

【解説】 光源氏乃至浮世の介氣取の博多露左衛門光次が、金にまかせて諸國色修行に出かけ、都では初菊、江戸では小紫と、到る處名ある太夫に馴染んでゐる中に、大阪では瑞王の一族に、江戸では其子大八に、戀仇を討たれようとするが、いつも信仰する辨財天に助けられては危くのがれ、謝禮かた／＼江の島の辨財天の開帳に參詣するといふのであるが、最初から『一代男』の模倣でもあり、『源氏物語』の眞似らしい處もあり、元祿前後の時代思潮の影響と

して現れたものであることを、しみ／＼と思はしむるものがある。それでて全くの世話物かと思ふと、時々型の如く修羅場があり、主人公が窮すると、辨財天が飛出して助けるといふ風で、機巧仕掛も屢々用ひられてゐる。

【原據】相撲の事は萬治三年の『箱根山合戦』及び延寶頃の出羽掾正本『相撲祝言はんがく女軍法』に既に用ひられてゐる。又享保五年の近松の『井筒業平河内通』とも縁があるか、その五段目には童相撲の場があるが、これには女相撲が工夫され、博多露左衛門光次といふ主人公は『好色一代男』の世の介を思はせる外に、『博多小女郎浪枕』の毛刺九右衛門を思ひ出させるやうな點もある。更に五段目に於ては、小紫が『源氏物語』の紫式部にまねて『色里源氏』の草紙を著すとかいふのも、また其名を光次といふのも、光源氏にもちつたのであらうが、彼が龜戸天神にこもつた小紫を引よせる處は、全く『十二段草子』の牛若式で、そこには胡弓と琴の樂も催され、それにつれて光次は一節切を吹き、四季の景を描いた繪馬を見る場がある。また道行は全く『十二段草子』の「東下り」にまねたものである。

○女 鉢 木

【體裁】東京帝國大學舊圖書館藏本。體裁は四二三頁所述の『中將姫』と全く同様にて、八行六段曲であつたことが頼原退藏氏の未刊資料によつて知られる。内容は、拙著『古淨瑠璃の新研究』延寶享保篇七五六頁所記、薩摩外記正本の『鑑之本尊女鉢木』と大體同様であつたらうと思はれる。

○花 筏 芳 野 内 裡

【體裁】早大演劇博物館藏本。半紙形八行四十二丁。尤も第六以下は九行に書かれてゐる。柱に「花筏」とあり、又後書の題簽に「花筏吉野内裡」とあるが、内題は唯「吉野の内裡」とある。木下甚右衛門刊。『新群書類從』第五にも收む。

【太夫・刊年】前附に土佐少掾正勝の名があり、例の寶永五戊子初秋日の字がある。

【形式・曲節付】六段曲。各段首に形式句がある。

初段「扱も其後、およそ天下をひきふるに、じんせいあればたまやすく、みなばんせいと仰ぐもこれ、天のめいずるきみのとく、うごかぬみよこそひさしけれ、こゝに人王四十代の帝をば天むてん王とあかめ奉る。……」

第三段に「なつみの神事」、第四段に道行、第五段に藏王堂にて春の夕の舞の節事などがある。それよりも最も目に立つのは、次の如く第三段の最初に「三重」とあることである。

三重「いざやわかなをつみそるへ、ゆきにぬれたるこもでを、ふれやふれ／＼ちはやふる、かつての、かみにさ／＼げんと、いさみよりくる里の女の、中に一きは吉野なる、カ、ル、サ、カの翁かひとりひめなもすゞしめのすゞかのまへ……」

【梗概】第一 天武天皇の御時、先帝の御子大伴伊賀の王子が、君御調伏の御志ありとの事で、村國の大將が勅命によつて、妹鳩照姫を賤の女に扮装させて、様子をさぐらせると、白鳳元年追儼の夜、鬼やらひのまつりことの際、叛逆を遂行する企がある。（こゝに「それあめながくつちひさしきあまつひつぎのまつりこと申もおろかなりけれ

ど、まづ初春のあけそめてほしをとふる四方拜……」と節事がある。さて鬼やらひの儀式の中、大伴王子が紫衣をまとうて進まれるを、村國が遮つて一味を追拂ひ、其所に居合せた吉野の修行者、にんかい阿闍梨に御門を背負はせて吉野へ赴かせる。

第二 大伴勢は阿闍梨と村國を追跡し、遂に村國を捕へて歸る。(戦の場つゞく)。

大伴王子は今思ひの儘に位につき、政を顧みず、鴉照姫を妃として、盛に口説かれるが、姫は断じて意に従はず、専ら御門に懐れたまふ。そこへはだの友足が参内し、大伴王子の誤れる行を指摘して、諫言する。けれども王子はその言を聴かず、むしろ恐れて追撃されると、友足は自ら首を刎ねて死ぬ。

第三 すゞかの翁の一人娘鈴鹿の前が、なつみの神事をなすべく、若菜をつむ節事があつて後、にんかい阿闍梨が鈴鹿の前の心をさぐつて、やがて御門を預ける。

鈴鹿の前は御門をおあづかりしてゐる間に、君を戀ひ奉つて、一夜押して御門にその心を訴へ奉るが、御門がそれを退け給ふと、鈴鹿の前は刃をぬいて玉體に迫らうとして、雷電に妨げられ、本心に立返つて、罪の御許を願奉る。

第四 一夜鈴鹿の前が君を守護し奉つて、次の間に退いた時、君の御側に忽然鴉照姫が現れ、危険だからとて、君をお連れして忍び出る。「夢かうつゝか幻のそれとさだめもなみだかき、吉の川の川の花筏いとしき君の御身をばのせてこがるゝさゝ舟と……」、かうして道行の最中へ、又鈴鹿の前が現れて、戀ひこがるゝ君を奪ひ奉らうとする。二人は君を中にして、怨念の争を始め、鈴鹿の前は遂に二十尋の大蛇となつて君に迫る時、御夢はさめる。

此時君を奪ひ奉り、大伴王子から賞を受けんとして、龍崎巖左衛門は襲ひかゝるが、藏王権現の出現によつて、彼

が縛を縛り奉つた紐が小蛇となつて、龍崎の首に巻つき、彼を殺してしまふ。

第五 大伴王子は鴉照姫を従へようとして、今日も姫の兄村國を引出して説かしめるが、村國は反對に、妹姫を引かつぎ、敵を拂つて逃出す。

藏王堂の皇居にて、ほくてい樂、還城樂の舞(節事)があつて、君を慰め奉る中、天女姿をした大伴王子が覆面をぬいで、御門に迫る時、村國が現れて之を遮り、ついで、鈴鹿の前が現れて長刀で攻立て、敵を追拂ふ。

第六 皇軍と王子軍とが粟津原にての戦の後、王子軍が遂に敗れて、天下泰平となる。

【解説】 位評といふよりも、むしろ叛逆型の物語で、大伴王子の舉兵、没落を説いたものであるが、中に鴉照姫と鈴鹿の前の怨念の争が、御門の夢物語として聊か趣があるだけである。なほ鈴鹿の前の執心には、道成寺の清姫風の面影も見られる。

【原據】 『日本書記』天武天皇の條にも見える、大友皇子を中



丁初「志國三續」と「授傳色門衛左露多博」本正撤少佐土

心とする壬申乱を原據とするものであるが、史實とは甚だ縁遠いものとされてゐる。

【影響】 寶曆元年十月十七日から、竹本座に上演された、竹田外記、吉田冠子、三好松洛の『役行者大峯櫻』は、

本曲の一主人公たる大友皇子の叛逆と、役行者の行力とをからませたものだが、本曲の影響と見ることが出来る。
○殿飾難波鑑

【體裁】 帝國圖書館藏本。半紙形八行五十三丁。前附も奥附もあり、題簽なく、内題は以上の如くで、柱に「仁徳」、奥行に「仁徳天皇殿飾難波鑑卷終」とあり、奥附に「木下甚右衛門刊」。

【太夫・刊年】 前附に土佐少掾橋正勝の名と、例の寶永五戊子初秋上旬の刊記がある。四段目「今年甲午」とあるのが上演年に關係あるか。

【形式・曲節付】 六段曲。各段首尾に形式句あり、第三段に管弦役定め、それについて年始の物始、第四段に方角吉凶の曆、第五段に獅子の舞の節事がある。

第一「扱も其後天の時は地の理にしかず、地の理は人の和にしかず、くわは是仁のなす所、其聖徳も世にたかく、仁徳天皇と申奉り、皇統十七世に當らせ給ひめでたき帝おわします。……」

曲節中珍らしきは、イケ、ヲトリ、テントン、エイカン、キリ山、二上リ、シラナフシ、上方キン、上方ユリ

【梗概】 第一 仁徳天皇に、一の宮みつばわけの王子と、二の宮中津王子とまし、二の宮は悪相にて放逸にあらせられる。其頃百濟國から「酒の君と云し者、王仁と申て古今めいよの相人を召つれて參内」し、犀とくち（我國の鷹）を献する。二の宮の御望にて、犀を賜ふ。

やがて二十日には人々の姿繪をかけて、相を占ふ。先づ當今が大ききと申せし時の御姿を拜して、御即位の相が

あると申上げ「なにはづに咲や此花……」の歌を奉る。段々に相して二の宮を悪くいふと、宮は陰から飛出して姿繪を引さかれる。

やがて御門にはもす野へ行幸あつて、「高き屋にのぼりて……」の御詠があり、そのあとで鷹狩がある。その内に東國にて日本武尊に討れたる八十たけるの末孫、飛彈國のやその宿名が、鷹を射落し、仇を報ひんとしてゐる。「其面は二つ胴ひとつ四本の腕に糸物をもつてゐて、あばれ散すが、本朝無双の大力なる一宮のめのと難波の竹古が宿名を引捕へる。

第二 其後月並の御會のあつた夜、武内大臣の舍弟あまし内の宿彌は、怪しく扮装して畏多くも内侍所に忍入り、三種の神器を取出して逃出すが、武内に追かけられ、取かへされる。

二の宮には芦田のなをい一人姫い、わの姫の美人なるを御執心の折柄、一の宮が淺からぬ御仲ときくと、愈々其非望を達せんと圖る。折柄あまし内宿彌が来て、お頼みの三種の神器の取出しに失敗したことを語り、更に今入獄中の八十の宿名盗出をすゝめる。乃ち二の宮は牢守等を醉はしめ、之を殺すと、八十の宿名は其間に牢を破つて出で、途中に戦ひ勝つて、二の宮を住吉村に訪れる。

第三 岩の姫の御殿では、一の宮の爲に管弦が催される。「先立春のあしたより、谷の戸出る鶯水にすむかはづのこへ皆是呂りつにもれずとかや、ましていもせの中川を渡りたつせぬ、ことの糸……」だんだんと樂器の役割が定められ（これが節事）、樂終つて酒宴があり、ついで又酒の肴にと年始の物始（節事）が語られる。「あらおもしろやあらたまの年の始のことぶきは、福と徳とをならべておいて、中は恵方の神まつり……」。やがて一の宮姫君おやす

みの後、二の宮と宿名とは姫と一の宮を奪去らうとするが、竹古の奮闘にて事なく止む。

第四 やがて二の宮叛逆あり、一の宮には吉野へ急がれる。「このめもはるのあめそくきくものたちもしづやかに、かすみの衣さほひめの、ぬきてほすてふこち風に、匂ふてくるや梅の花、……木兎の宿彌が申やう、今年きのへ午の年寅卯の間あきにして午未申酉は金神にて候へば……」と色々と方角の吉凶や暦を語る(節事)。

間もなく、一の宮の一行をめぐり、あまし内は二の宮の軍を率ゐて追かける。此時一の宮達は傍の庵に隠れ、かくだの大中彦といふ老翁に助けられ、渴をいやす薬などを貰つて大に元氣を出して後、木兎竹古等は再び敵を攻立て、あまし内の軍に勝つて吉野へいそぐ。

第五 吉野には御門も太子も逃れさせ給ふが、その内あまし内は幾度攻めても城が落ちぬので、遂に降参と見せかけて、皇軍を滅さうとする。かくてあまし内は、兄の武内を讒して、三種の神器の鍵をぬすんだのは武内だと云ひ出したので、武内の願によつて、両者が湯起請をすることとなる。先づ神前にて獅子の舞がある。「あまの岩戸のいにしへにかくれし神を出さんと、やを萬の神あそび、是ぞかぐらのはじめなる、しはけもの、司にてしゆみの四州をすみかとしかすみそめたる初空の……」(節事)。之について神前の熱湯の中へ「武内手をさし入れば、あまし内つゝと引、あましかいなを押し入れば、武内公さつと引双方火焰の煙を立て大せうねつをしのぎかね、ふんぢかつてあらそひ」、勝負がないので、更に熱湯をくみかけ合ふと、武内は自若としてゐるが、「あまし内面色かはりさうの腕大熱湯にこがされて惣身ふるひこへをあげてあらたへがたや」といつて白状する。そこへ又宿名が飛來つて玉體を犯し奉らうとする時、武内が彼を熱湯の中へ投込む。やがて一の宮達も來り給ひ、再び還幸遊ばされる。

第六 還幸の後御讓位あつて、一の宮は御即位あり、岩野姫を后に立てたまふ。やがて二の宮の暴虐なる御振舞に民が苦しむと奏すると、討伐の勅使が下つて、二の宮は遂に生捕られ給ふ。

【解説】 美人横領といふことに多少の関係もあるが、又位争にも縁があり、二の宮の叛逆物語を最も重く扱つた單純な而も頗る拙劣な趣向である。

【原據】 仁徳天皇の事も王仁の事も引いてはあるが、全く一種の匂に過ぎず、第五段の湯起請は、『大伽藍寶物鏡』に於けるのは、最後に湯をかけ合ふ點がちがつてゐる。或はこの方が影響を受けてゐるものか。

○櫻 小 町

【體裁】 帝國圖書館藏寫本。原本と同體裁にしたものらしく、半紙形八九行五十六丁。版元も何も記されてゐないが、土佐少掾の曲の一たる『養老』の表紙見返の土佐物曲目中に、『櫻小町』といふのがあから、それと同物と信ずる。

【太夫・刊年】 刊年は明かでないが 上記の理由及び曲節付の點からも、土佐少掾の語物であると判定して誤な

5。【形式・曲節付】 六段曲にて、各段尾に形式句あり、第一段は「扱も其後」第五、六段は「其後」で始まるが、二、三、四段首には、形式句はない。之等の段首に形式句のない點は此太夫のものとしては珍しい。寫本ながら、曲節付も丁寧に記入されてゐる。

第一段「扱も其後松の葉のちりもせず、まさきのかづら世にながく傳へて和歌の道廣き清和のみかとのおん時、なほ親王の第五男左近衛の中將在原の業平とて……」

第二段、梅づくしの節事「誰かいふ春の色は東より先來るとはなんしほくしの花こそは、春を知らず……鶯のやとり成わら宿梅にぬふてふ笠、きつれて、つれてなりよしふりよし、しなの梅、みそめてよりは玉しるも、君がたもとへ飛梅やそれと知らせてかのかたへ心のたけをかく文のたよりもとめてやり梅の……」

多い曲節付の中、主なる曲節をあげると下の如くである。

サツマウツリ、ツナキ、ツキユリ、イロツメ、イロユリ、本フシ、ナヤシ、ツメムスビ、キンムスビ、ハルウタヒ、ウタトメ、スエカ、リ、タマノフシ、トル、本地カ、ル、ヲトリ、ユリモトシ、本地、クトキ、ヨサク、シナリ、ヒロフ、キンノリ、イロサケ、早ナケ、引取、サナイ、ホウカカ、リ、イロサマシ、キンサツマ、オンノリ、ハヤ三重、ヒロイ、カタトメ、三ツユリ、エイカン、レイセイ、アミトヤツシ、ヘイケ、ハコビ、中ハコビ、サ、ナミ、下セメ、イロザケ、下ノリ、キンノリ、フシノリ、ヲス地、アフミウツリ、シクレヤツシ、ハツミノリ、ツメムスビヒヤウシ、サイツメ、トナセ、マイハリ、本三重、合ノ手、キンヲトシ、カイトウカ、ル、住吉ウツ下リ、七ツユリ、ホウカ、三ツユリ、フシウツリ、シクレ、一ツ三重、ハヤ三重、クル、本フシ引取、三ツ引、クリ入、サシ、二上ル、二下ケ、三下ル、トメ、シヅメ

【梗概】 第一 阿保親王の第五男在原業平は天性無雙の容顏の公卿である。貞觀三年のむつき半の御歌合に列する

諸卿官女の歌人の集にて、業平は時の判者であつた。其時官女小町は「水邊の草」といふ題にて「まかなくに何をたねとるうき草のなみのうね／＼おひしげるらん」とよみ、業平が今日の秀逸だと讀上る。すると、企みある大友黒主は此歌は萬葉集に載つてゐると云ひ出し、小町を辱しめるが、やがて小町が黒主の持出した萬葉集の、その歌といふのを、「和歌の浦わのもしほぐさ浪よせかけてあらはん、春の歌を洗ひては霞の袖をとかふよ……」とて洗つて見ると、元の歌は一字残らず消えうせる。そして「うき草の三十一のわかの文字金色の光さし紫雲に乗じて現はるれば、住吉の大明神出現まし／＼て」、歌の徳をたゞへて姿をけす。黒主は面目を失ひ、小町は別業を給はり、爾來小野の小町と呼ぶ。業平と黒主には、一層和歌をはげめとのお詞あり、山鳥の名鏡を二人に預け給ふ。

其後紀有常の息女井筒姫は、戀故にたゞすの神に恵方詣に來て、業平に遇はうとしてゐる。けれども業平は小町に對して意を通してゐるから、駄目だといつて、侍者官平が姫をあきらめさせようとする時、茶屋女が來て繪馬を見せる。それには業平の歌「筒井筒筒にかけしまろかだけ、おひにけらしなにもみざるまに」と「くらべこしふりわけ髪もかたすきぬ君ならずしてたれがあぐべき」の井筒の返歌とが書いてある。姫があやしみて、繪馬の主を尋ねると、それは二人の戀を遂げさせようとして、茶屋女に變装した小町の企みであつた。やがて小町がその繪馬を神前にさげようとする時、その繪馬を奪取り、簾中から黒主が出る。そして媒を頼むといつて、井筒に戀をせまる。井筒の侍官平が之を遮つて、大立廻になる時、業平の家臣あらがねりうづの助公綱が代參に來たので、官平は姫達を彼の郎黨に托して、公綱と兩人で鳥居をやり動かして武力を示すと、黒主の部下等は恐れて逃げ去る。

第二 小町の草菴の場。「當今のお兄の子、是高親王は御外戚の王子たる記名虎が殘し、た形見の冠と狩衣を佛壇

にかざり、名虎の死を悲しんでゐられると、そこへ名虎の魂が忽然姿を現す。そして我は昔素盞鳴尊に滅された巨且將來の怨念で、名虎の妄執に代つて、世をくつかへさん爲に現れたといふ。かくて巨且は通力を見せるといつて、松の根に息をふきかけると、怪しき影が出て都の方へ飛ぶ。

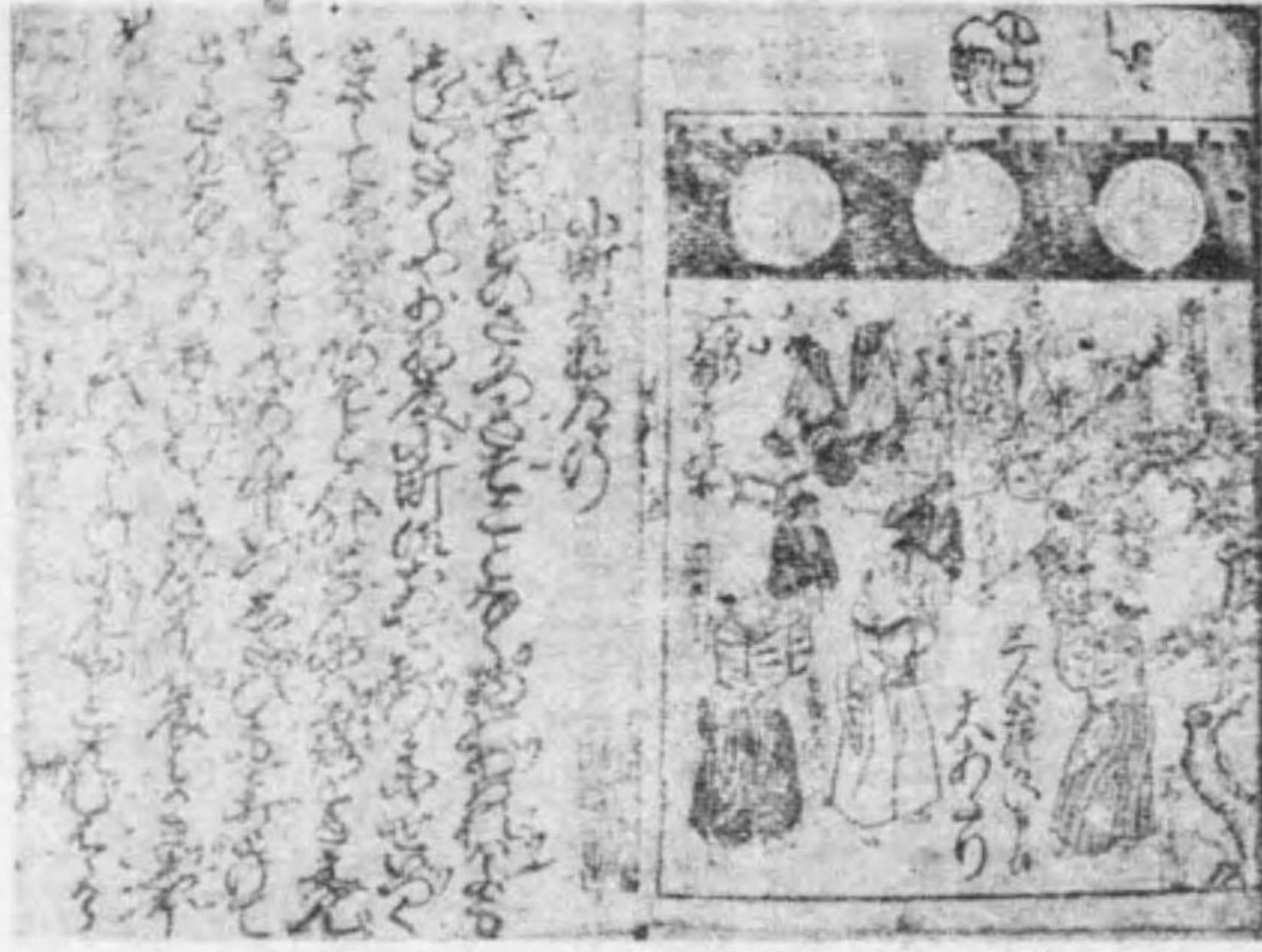
黒主は預つた名鏡の曇を拂ふ名歌を讀まうとしてゐる時、都へ飛んだ怪物が黒主を訪れて、是高親王に御謀叛の志ある故從へ、それについて、先づ業平を譏奏する必要があるとて、怪鳥を都鳥だといつて黒主にわたす。黒主が怪鳥をもつて参内した事から、業平との間が大争となる。そこへ田村丸の一子大聖丸が來つて、争を鎮め怪鳥を射る。

小町は業平を我家へまねいて、白拍子の舞などでもてなし（此處に梅づくしの節事がある。）やがて白拍子を業平にとりもつ。その白拍子といふのは、業平の幼時からの戀井筒の前である。酒宴の始まらんとする時、坂上大聖丸が勅使として來り、業平が二條后と不義ありと大友黒主が奏聞した爲、逆鱗あつて流罪の御沙汰だといつげる。業平はやむなく、東國なる官平の知邊に暫し忍んで、黒主の罪をあばかんと決心する時、黒主が兵を以て攻めて來るが、戦の後黒主は追拂はれ、業平は一旦東國へ下る。

第三 「千里もなびく吉原の、いなせの便りとはねとも、春こそきのへとらの年、その歳旦の君が名を數奉納の文車……」。東國にて業平は累といふ遊女を戀してゐると、累は業平をからかつて、ある神前にて面をかぶつて業平をなぶる中、面が顔に喰つて取れず遂に氣が狂ふ。そして淺草寺の僧が角田川へ出て、人々を教へんとする所へ來て嘆き事情を白狀する。僧は累の偽の態度を怒つて殺す。僧といふのは大友黒主であつたので、累は怨んで報復するといつて煙にまぎれて消える。（まるで他愛のない奇怪至極な場で、唯全曲に一種のゆとりをつけんが爲の悪ふさげに過

ぎぬ。

第四 「おせや男色當世の、あつま奴の高からけ心すみひけ、しやんと振出すすこ六に、皆御存じの道中も、君は



物段 「小町少將道行」 表紙見返しと初丁

初て三河の國何し、あふたるきうせきの爰八ッ橋にて候と申上れば……」。かうした文で此段が始まつて、去年此八橋にて、業平が「から衣きつゝなれにしつましあれははるくきぬるたびをしぞ思ふ」と歌つたことを、今杜若の精が井筒の前に物語り、井筒を戀人の業平にあはせるといつて案内し、それから「竹馬のくつわいさましりんからりん、りんと乗たる風俗は、雲の上人夫いかに、昔男、ういかふむりして奈良の京……月の武藏野はるく」と人間の里にそ着給ふと風情をまなぶ舞の袖おもしろかりける次第なり」と、業平の東下りの道行風にしてある。これは今累の妹都鳥が、世に忍ぶ業平の身の上を現して、業平に見せたのである。乃ち都鳥は業平から尋ねられると、自分の素性などについて下の如く語るのである。――

都鳥は元來露の前といひ、兄は河内の領主高安左衛門時春といひ、勅勘を受けて東に浪々してゐたが、勅免を願ふべく、都へ上つて紀有常の下部となつてゐる。乃ち自分は都鳥と名乗つて色里に沈んでゐるが、累といふのは姉である。姉だからこそ君につらくあたつてゐたのだといふ。

やがて二人が一間に入つたと思ふと、累の怨靈が現れて、沙門に殺された苦と、娑婆のきづなの数々が、口繩の形となつて身を苦めるといつてもがき、紫藤の姿となつて苦しむ。業平が懐中から鏡を取出してうつすと、藤の蛇身は影を消し、菊や（この名が忽然出る）がひれふし、累は茫然としてゐる。やがて菊やは立上り、「是はかさねの靈ならず、抑我はから衣の名歌の徳にげだつを得る牡若のせいれい、かりにきくやが身を使い、君好色のみ心をさとし申さん方便に、今の難儀は見せたるなり、かさねは既に狂女と成、黒主が手にかゝつて失はれんとす所、君の爲身に替り、命をまつたふなしをさせし誠のかさねはそれなるぞ、不思議をみすべしとて、立よりめんを引とれば忽一卷の卷物」が現れる。これは「都鳥の傳授の卷、委くじんを書あらはす、是を以救かんの御免を願ひをわしませ、君様々の往難も、かさねが有しくるしみも、こたんといへる邪じんのわざ、好色の道を立、情の心いやまさば行末あんおん疑なし……」といつて精靈は立去るといふ聲がして、牡若が庭に一度に咲出る。と菊屋は正氣になる。折柄官平は井筒姫をつれて来る。（まことにごた／＼とした不明瞭至極な場である。）

第五 「其後井筒の前はふしぎにもなり平卿に廻り合、をにしかさねが草の庵うき日を過させ給」ふが、なり平は揚屋にとりうしてゐるので、其故を調ぶべく、牛嶋の牛の御前といふ女の處へ、色道傳授講談きゝがてらたづねて行つて見ると、都鳥も来てゐる。かさねは家に入るなり、怒つて都鳥を引倒して、何故業平を返さぬかといふと、實は小野小町である牛の御前はいふ——是高親王が業平を色仕掛で滅さうとしてゐるので、小町と坂上大聖丸は、救命で反對に是高親王を色仕掛で滅さうとして来てゐると。事情がわかると、折柄訪れて来た井筒官平はかさね都鳥等と忍びて廊へいそぐ。「京もなにも武藏野の爰にあつめて三ヶの津、色里、かいびやく此方のためしにきかず色大

臣、日夜の酒宴ぞおびたゞし、けふのあひかた九重がしなをかへたるひな遊び、それよからんと揚屋の見せ、〇いりのていをまなびつゝ、みすの左右に京なにはの、女らわかつておしなおり物、ほかひ數てうど、ならべ立たる有様はげにめづらしうぞ見へにける」。そこへ都鳥が飾り立て、出て来て「春もはや名残の袖にことふれどしらべおきたる色萬歳」を舞ふ。

「はやしけるやら嬉しや、とくわか水にながれを、立る御ぜんせいの君達さかへてまします。神やくそくの御よそほひ玉の指ぐしくろ髪に、しやんといたゞきかぶろは盃手にもつてたにくわの口べに、いろをふくむは何よりやさしう侍、ひける、そも色里の始りは、昔結ぶの神たちの、爰にあつまり給ひて、いそぎくるわの御とのつくり、立始め給ひしは、江口かんさき室ひやうこ、此所、久しかれといわひ納めて、くもりなき、月の武藏野此里に、なびかぬ草も。・あら玉の、年の始の、あしたこそ、なをおもしろふ。侍らひけれ、かやうにめでたき折からいかでか君はとのごもの、終にまみへぬ御姿。御けんをねがふ神いさめ、はやせかぐらのしゝの曲、扇かざしていさかなてん花ふみわけて、あらわれ出るとこの山路に枕の岩ほ、うかゞひのほりしづ／＼しとん花をけたつる乱拍子、とまる小蝶をおつかけ／＼鈴をならして、狂ひ獅子、めくる色里ど／＼ぞ、先都にはほうらひの、願ひも、三つの島原より、うさもなにハの新まちや、すぐなる時に、あひ竹の、伏見の里にしゆもく町かよひてきつち、なる川の、ふかきゑにしも長崎に、かたらふなかは丸山や、道もながとに下の關、すへはあふみにしばや町、しばしあわねは、待とをく、是やさんゑのあか月のこゝち、するがのみろく町、出羽に坂たやこしちに小また、ちよのつるかに至る迄、諸國に名にあふわけの里、めくり／＼てうかれじゝ、おい廻りとび歸る蝶のはつがひひら／＼／＼かけり／＼て戀の山、

情の海もしつかなる里ははんゑいまんざい、かんにたへたる色大臣忍ひのみすをさつとあげあらわれ、給ふだりひな、今こそ御げん有事は、何よりめでたふ、侍ひける萬ざいらくとぞかなでける」

やがて屋臺人形を見せるといつて、箱を持出すと、「なり平のこうけん、そみんせうらいの孫、あらかねりうづの介公綱が太刀を横たへ、是高親王を睨んだ姿が箱の中から飛出す、ついで親王が笏にて座をうつと城廓が現れる、(皆からくり仕掛である。)そこへ坂上大聖丸が攻めて来る。難波都の女共數千萬の軍兵とかたちを現はし切てかゝる。かさね、小町、都鳥もかけつける。かさねは親王軍を破つて、業平や、兄の勅勘赦免の便りにせんとするのだといふ。それを小町が危いとて止めて大騒をする。

そこへ大友黒主が、是高親王を伴ひ出て、これまでこたんにまどはされて「思はず逆徒に組せし所に、有難や和歌三神、夢中の示現を蒙りて、本心に立歸り、則是高親王をも、御いさめを申上、早速誠の善心に、悪をてんじてほつき有、か様にゆふいん申たり、是と申も敷島のたへなる徳による所」といつて、預つた名鏡を差出し、「かゞみ山いさ立寄て見てゆかん年へぬる身はおひやしぬると」といふと、業平も預つた鏡を出す。兩鏡がかがやくと、城廓はもとの揚屋となる。こたんが姿を出して恨む中に業平黒主相伴ふて都に歸る。

第六 一同歸京して皆勅勘を許され、時春も恩典に浴する。やがて和歌三神の擁護の御禮にと、住吉へは黒主と時春、玉津島へは小町と業平を遣はされる。

小町が水かん立をばしにて法樂の舞をなし、神慮をすゞしめた後、折から和歌浦に無双の大鯨がよつたのを、浦人が追來るからとて見物にゆく。賑かに鯨がとられてゐるのを、見物に出かけた者の中に、累がゐた。小町はそれを見

つけて喜ぶ時、五十餘丈の鯨があげられた後、大きな鯨が業平めかけて襲ひかゝる。累がそれに釣をなげかけ、ついで公綱がそれを斃すと、それは久しく色々の禍因となつたこたんであつた。かくて小町は玉津島明神の垂跡、かさねはわだつみ豊玉姫だといつて、かさねは鯨に乗つて姿を消す。

【解説】 まことに複雑な仕組で、第一段前半は例の小町の草紙洗の場で、和歌を手段としての黒主の陰謀の暴露。後半は業平と井筒の戀を取持たうとする小町の計畫と、黒主の井筒に對する横戀慕。第二段は、黒主と、名虎の怨靈たる巨且將來と、是高親王の陰謀。黒主と業平との怪鳥都鳥を通しての争。田村丸の一子大聖丸の怪鳥退治。黒主の讒奏によつて業平の東國貶謫。第三段は遊女累が業平をなぶる事、黒主が累を殺す事。第四段は、不明至極な文章と仕組から成るもので、死んだ累の妹都鳥が、杜若の精となつて現れて、業平に素性をあかし、ついで累の怨靈が出る。又杜若の精が現れて業平の好色を誡しめ、其身を杜若に變へるといふ不可思議な浪漫的な場。第五段も亦滅茶苦茶に混沌たる場で、最初は牛の御前に身をかへてゐる小野小町、坂上大聖丸、都鳥が、業平を是高親王の手から救はうとする場。之について都鳥の色萬歳の舞。更に屋臺人形の見せ場。——それはからくり仕掛の戦場で、大聖丸、累、都鳥、小町等が親王軍を討破る景である。そのあとで、黒主が親王を諫めて轉向させ、巨且が之を恨む場。第六段は黒主と親王の轉向は凡て和歌三神の徳によるとして、和歌の神住吉と玉津島へ勅使として黒主小町業平が参拜する。要するに業平の井筒、小町、累等に對する好色の態度に結ぶに、黒主の邪戀と嫉妬と復讐とを以てしたもので、その間には高親王の逆心と、之を導く巨且將來の悪心を借りて筋を複雑にし、更に累の怨念と、その妹都鳥の杜若の精としての活動と、小町の寛大な心情とを取まぜ、坂上大聖丸の武力を加へて賑かにしたもので、見物は頭を掻き交ぜ

られながら、茫然と感覺本位に幻惑されたものであらう。

【原據】 謡曲『草紙洗小町』、古浄瑠璃『井筒』などによつたものである。

○大職冠二代玉取

【體裁】 古綴文庫藏本。半紙形八行五十丁。初行には、上記の題があり、奥には、唯「大しよくわん終」とある。前附も後附も無くなつてゐるが、版式からいふと、木下甚右衛門版だと思はれる。柱には「大しよく冠」とある。

【太夫・刊年】 土佐少掾の語本と思はれ、刊年の手がかりは何もないが、同じ土佐少掾物としては、文體から見ると、割合に早い頃のものかと思はれる。『新修繪入浄瑠璃史』には本曲を元祿四年刊としてある。

【形式・曲節付】 六段曲にて、各段首尾に形式句があり。

第三段に大伴家持の姫の、奈良から都加茂の社までの道行があり、更に同段に、田植の歌謡的節事がある。第四段にも多少景事的のものがある。

【繪入本】 帝國圖書館藏本は、内題を「二代の玉とり」と云ひ、小形十七行十三丁。挿繪は兩面四あり、柱には丁附以外、文字なく、終に山形屋板とある。

作者 繪入本の終には「作者中津忠四郎」と記し、文章は「大職冠二代玉取」とは少し異なるが、それを抄略したものである。

太夫 終に「土佐少掾橋正勝直傳の正本を以寫之」とあるから、繪入本は讀本であるにしても、土佐少掾の正本に

近いものと思はれる。勿論元祿以後のものだらう。

【形式】 繪入本も六段曲にて、各段の首尾に形式句が見える。半紙形正本と如何に差があるかを見ると、

初段「扱も其後仁王四十五代のみかとははしやうむ天王と申奉る、然るに天王佛法をうやまい仁政れつ正しくましますせば五日の雨のおのづから國土の民をうるほせり、扱又時の大臣をば大書官藤原のかまたり公と申奉る……」

【鱗形屋本】 普通の木下版とも異り、別に九行三十六丁にて、内題を『大職冠二代玉取』と稱する鱗形屋版がある。「右此書者土佐少掾橋正勝直之以章句附秘密音遂校合令開板者也」と奥に記して、其次に「大傳馬三丁目、鱗形屋三左衛門」と記してある。勿論六段で、文章も字體も木下版と似たものである。これで鱗形屋でも土佐少掾物を刊行してゐることが知られる。

【梗概】 初段 「扱も其後人王四十五代聖武天皇と申奉り、仁政まつたうましますせば、十日の雨おのづから國土の民をうるほせり、さて又時の大臣をば大しよくわん藤原のかま足公と申ているか悪事をしりぞけ、まつた一とせもろこしより、ほうぶつとうしありしに、めいしゆをりうぐうへとられ、手をむなしくなしける時、かまたりさんしう、ふさゞき(四字缺)いやしきあまとちぎりをこめ、ついにめいしゆを取かへし國の寶となされける、めいよのおとゞなり……。ある年漢土より貢物のとうし、萬戸將軍が釜山海の沖にて大風に遇ひ、數百艘の舟を流され、自分も蝦夷が島へ上り、爾來島めぐりをして又日本へ渡つたから、お慈悲に、留めおき給はれといふ。それはかの名珠を自分が龍宮から取返して和國の寶としたから、龍神が仇をなすのだ、便船のあるまで休息されよと、鎌足は答へ、帝へ此旨を奏上し退出する。

鎌足は館に歸り、御子房さき中納言とて十六歳にて博學なるを招き、三笠山の山上に建てた寶塔を守護せよとて、功臣山上源内てるもとを伴はしめる。

三笠山の寶塔の名玉といふは、嘗て漢の太宗が獻じて、くわけんけい、しゆびん石と云ひ、一度龍宮へとられたのを取返したもので、「いづ方よりらいしても、すこしもたがふ事なければ、おもてをそむかぬ重寶とて面向不背と名づけ、惡魔除の爲に毎日法華經を讀誦して守護してゐる。ある風の烈しき夜、右大辨大伴家持の息女もなか姫が、御門の裏から偽つて入り込み、中納言に近づいて、内裏の管弦の際に見をめて、爾來文を送れども返しなきを怨むといつて、戀を語る。けれども親のゆるさぬ戀を受けられぬといつて、中納言が姫に歸宅を勧める時、何處から來たか、萬戸將軍雲宗が現れ、戀を取もたうとする。丁度、歸つて來た山上源内は、怪みて飛出し、寶珠守護の任にある身として、色を弄び給ふはきこえずといつて、姫を送り返す。中納言は茫然として見送る。其時萬戸雲宗は「我こそむねつのけんじゆ修羅、龍王に頼まれて寶珠を奪取らん爲、萬戸となつて來りたり」といつて、「寶塔を引くづし、佛舍利を盗とり立出でんとしたりしを、房前咒文をとなへつゝ劍をぬいてかゝ」とると、通力自在の修羅も咒文に足がすくみ、天へ上らん頼りもなく、千變萬化しつゝ逃げる處を、山上源内が討つてかゝり、舍利を奪取つて首を討つ。かくて二たび玉を取返すことは全く寶珠の威光にて、ありがたしと、恐懼しながら、鎌足は源内の功をほめる。

第二 「去程に大海の底には龍宮城といふ國あり、此國は八大龍王とて、八つの王有つて、萬寶共に不足なく、五穀成就の地なり、然れども三ねつの苦あり、是をのがれん重寶には、一とせあまにとられたる面向不背の寶珠なり」、乃ち龍王は如何にもして之を奪はんとするが、神力にさゝへられてかなはず、今又けんじゆ修羅をつかはすが、源内

の爲にやられてしまふ。龍宮では如何にすべきかを評定をする。やがて龍神阿修羅合體して日本を攻める事となり、なんだとくしやかが大將にて押よせる。



第二「取玉代」 第二圖 (帝國圖書館藏)

源内は修羅を討つて寶珠を守つたといふので、其主ふさゞきは薄縁といふ名劍を帝から賜はる。其時津國より大物浦に數百の兵船が來たことを奏する。乃ち鎌足は之が討伐を命ぜられる。「なんだその日の装束にはしてんしやうじのひたゝれに、あくごふぼんのふのよろひを着、とんよくしんゐの小手をさしゐんぐわはつふのすねあてにぐちあんへいのつなぬきはき……」(と敵の武装を長々と説く)、名乗をあげて戦をいどむ。乃ち鎌足の應答あつて、互に戦になる。官軍が敵の通力になやまされる時、山上源内が飛出して、物凄ましい戦の後、「東を見ればかしまの神靈南は住吉西は八わた正八幡かすがやみわの神風に」、龍神どもは力つき降参する。そこへ加茂の明神が現れて、「かの玉を東大寺のしやかのみけんにおさめなば國土長久なるべし」といつて姿をけす。鎌足は都に凱旋する。

第三 姫が戀になやむを知つた大伴家持夫婦は、乳人のすゝめにて、丁度鎌足の代参として、中納言が凱旋の御禮に加茂へ参詣する機を捕へて、加茂の神主の計らひにて、首尾を遂げしめようと、乳人小さゝをつれて姫をも参詣せ

堂建立にちなみて、観音の功德の説明。かくして、全體が録足の玉取物語の後日物語である。全曲が甚だごとくとしてゐて、表現は頗る拙である。

尙玉取物語の後日物語として、『遊女源平全盛競』とも関係がある。

【出處・原據】 もとはやはり舞曲の『大織冠』、謡曲『海女』によつたものである。出處としては『志度寺縁起』をあぐべきであらう。

井上播磨の語物に『大職冠知略玉取』があるといふが、未見であり、延寶八年八月刊に相模掾の『大しよくはん』がある。之等は皆影響を及ぼした方である。

【影響】 岡本文彌の語物には『大職冠方便の玉』、松本治太夫物には『大伽藍寶物鑑』がある。治太夫の正本は元祿五年七月刊『新大織冠』の改作である。

又正徳二年春の上演といはれる近松の作には、『大織冠』がある。之等は皆影響を受けた方であらう。

歌舞伎としては、元祿六年に京都早雲座で、『面向不背玉』として舞曲風ものが演ぜられ、福地櫻痴作、明治二十四年七月歌舞伎座上演の『志度浦海人玉取』も改作の一種である。

小説には明和六年刊五冊物の『面向不背玉』、天明七年刊萬象亭作、式上亭柳郊畫の『面向不背御年玉』三冊、寛政元年刊けいこう作『面光不背釜』などがあり、玉取物語は相當廣く行はれたものである。

○ 蟬 麻 呂

【體裁】 帝國圖書館藏本。八行五十三丁。柱に「蟬丸」題簽は「せみまる」、内題は「蟬麻呂」となつてゐる。木下甚右衛門板。

【太夫・刊年】 前付に、寶永五戊子初秋上旬土佐少掾橋正勝とあり、はつきりした刊年はわからぬが、元祿十五年の近松の『蟬丸』の影響を受けて成つてゐるから、その以後のものと思はれる。

【形式・曲節付】 六段曲。第一段に「木引」、第三段に「涼」、第四段に「涼」、第四段に道行、第五段に「逢坂山」の節事がある。

第一「借も其後五んぎ第四の皇子をせみ丸の大君とて、御ようほう世にすぐれ天のなせるれいしつは及ぶもおよばさりけるも戀したはぬはなかりけり……」

【梗概】 第一 延喜帝の第四の皇子は蟬丸と申、御容貌世にすぐれさせ給ひ、殊に琵琶に長じ、菅相丞の詩友であらせられたので、天神の御崇信あつく、今日も北野へ御社参遊ばされる。

其頃本いんの左大臣時平公といふは、當今の御後見として威を振ひ、好色奢侈に暮してゐるが、或時郎等を集め、敵たる菅相丞が亡びて何の心配はないが、病となる事が一つある。それは先頃禁裡の歌の會にて見たはく雅の三位の娘いろはの戀しさに、三位に申遣はしたが、承知せぬ、何とか病をいやす道がなといふと、玉木の藤光は直に承引して北野へ向ふ。

木引（この一行あつて）「ゑいや／＼ゑいさら／＼ひけや／＼つな子共、北野にくるま松むめを、御神木にうへなして人の頼をあまみつの神をいさめんいざさらば……」と、賑かに松を引いて来て、いがきに神木として植えんとするのである。

蟬丸君は下向せんとして、あまたの女房が集り、松一本車にのせて引来る故を神職宮川すくねを経てたつねると、博雅三位の息女の叶はぬ戀の宿願の爲といふ。そしてその相手は蟬丸君だと聞くと、蟬丸君は悦びながらも、一生涯その道は一筋に堅く絶ちたい念願だと答へ給ふが、姫の決死の覺悟を知ると、氣の毒になつて姫の心を受入れられる事になる。そこへ六尺ゆたかな大男が二人来て、姫を奪つてゆかんとする時、老松の中より靈神が現れ、二人をふみつぶし、彼等は時平の郎等だが、「神勅にまかせつゝ老松の神靈今の急なん救ふたりなを／＼行末守らん」といつて姿を消す。

第二 北野にて失敗した時平は、此上は三位を滅して姫を奪はんとして、悪友への定國、すがねの朝臣の二人を招き、事を圖つて、其夜二百餘騎を以て三位の館へ押寄せさせる。先づ忍びの術者里見の大八が乗越えて入るが、番人左衛門國綱が捕へて引縛り、事情を語らせ、然らば命を許すからとて、敵を一人づゝ攻入らせては首をぬく。かうしてゐる中に敵は遂に一時に攻入るが、國綱の働きで追拂ふ。

第三 其後世はめでたく「あづま詞も取まじへうたふ河原の涼とて四條の川におきさをたて……思ひ／＼の涼の床興を催す……」（こゝに「涼」の一行があつて節事となつてゐる。）

涼 「はるかにつゞく燈火は天つ星とも疑はれ、しるす家名のかす／＼は、其名も四方に立田やの、もみぢはたかぬさげのかん、うかれくる人松やよりつゞくつたやの蔦かづら、まかれてねたき遊君の……（と遊女の名など讀みこみて）……涼み床いざ姫君と立よりてしばしなぐさみ給ひける。

姫君いろはの前が涼んでゐる所へ編笠の人は寛濶姿の若侍をつれて近づく。乃ちそれを呼んで酒宴を催し、扇流しをして興をそへる。

扇ながし 「げにや色ある君達に、まれにあふぎをかづきあげ取あげみれば色々に……様々の扇の品申にいとま、川浪に、ひゞきをそへてかぞへしはいとしほらしくぞ見へにける」（それから扇遊びがあつて）編笠の人に呼びかけて見ると、果して蟬丸君の忍びの涼みである。蟬丸君は夢の告にて姫に逢ひたさに來たといはれ、酒宴が繰返される時、時平は車をとゞろかして來り、畏多いとて君をかへし、姫に向つて雜言を吐くが、國綱がやり込めて時平を歸らせる、後に残つた時平の臣富田與市矢澤源五の二人が又姫を強奪すれど、争の果に追拂はれる。

第四 其後蟬丸の君は御物思ひの爲か盲目とならせ給ひ、「皇子の尊號けおりすて……御遁世有たき旨ひそかに奏聞あ」と、時平は心密かに悦びて勅許をおすゝめ申す。帝ははく雅三位を召し、蟬丸君を逢坂山に捨置き、三年間此琵琶を友とさせよとの御詔がある。

道行 「うば玉の我くろかみのあかでゆくわかるゝ里のあさぢふにおのゝしのはらふみわけてなくねをそふるせみ丸君勅でうなれば力なく……」やつれし駒に助けられ花の都を出で給ふ。

やがて逢坂山について、三位が涙の中に別れて歸つた處へ、時平は忽然一人現れて、戀のかなはぬ邪魔だ、盲目とは偽で、我に油断さす手段ときく、眼をくりぬき得せんといつて、迫害を加へようとする時、三位がかけ來り、時

平を押のけると、時平は怒つて、共に討するといふが、忽ち五體がすくんで、その兩耳から小蛇が出て、北野の神靈だ思ひ知らずといふ聲の下に、時平は悶絶する。「天みつがみの御威徳有がたかりける次第やと……」。

第五 いろはの前は蟬丸君を思ふて、父三位の風折るぼしの装束をつけ、逢坂山へ忍びゆく。

逢坂山 「第一第二の絃はさくくとして秋の風松を拂てそゐんをつ、第三第四の皇子なる此蟬丸が有様は民間そじんに落下り……」姫が、三位が来たから開かせ給へといふが、女性の聲ではあり、里人がなぶるのだらうと思つて君は無言の行に入り給ひ、琵琶を弾じてみ給ふを、姫は暫く木蔭に身をひそめて見てみると、やんごとなき賤の女が、かれいをもち來つて、慰めてゐる。姫は嫉妬の情むら／＼と起つて、庵に立入り、君に抱きつき怨を訴へる。其時賤の女は、實は蟬丸君は時平を避け、世をしづめん爲の謀で盲目と偽つてゐられる。それが天に通じて、自分は帝釋天の使として來た上界の仙女だといつて、忽ち仙女の姿になる。君も姫も禮拜する中に、帝が勅勘を與へ給ふた爲に夢中に苦みおはしますのだ、その様を見せんといふ聲がきこえて、忽然と閻魔の廳の光景が現出する。帝の様々の御なやみが現され、過去の有様、十界の姿までが見せられる。

第六 其後三位の館には、姫が見えぬといふので、一同が驚き騒ぎ、遺書を發見して迎へに行かうとしてゐる處へ、堀川の中將が勅使として來て、帝が妙な夢を見給ひ、蟬丸を許して迎へよとの事で、逢坂山へ使がいきぐ。かうなると時平の一黨定國は恐ろしくなつて、罪のばれぬ先にと、蟬丸の歸りを襲ふが、難なく國綱等に平げられてしまふ。「千秋萬歳めでたしときせん上下をしなべてみなあほがぬものこそなかりけれ」

【解説】 蟬丸君に対する博雅三位の姫いろはの前の戀を妨げ、時平が姫を強奪せんとして、様々に苦心する物語で

あるが、例によつて、文章がわざ／＼朦朧とさせた處多く、三位が逢坂山にて君と別れる場が、やゝ情味豊かなだけで他にこれぞといふ處もない。荒唐無稽な浪漫的な仕組で、誤魔化してある場面が多く、従つて變化は多い。

○蘭曲 文音 大林集

【體裁】 紫蘭文庫藏本。江戸土佐少掾段物集、最初百八丁までは、柱に「色竹大林」とあり、上段に語釋を記し、以下は各曲の段名又は外題を柱につけ、百十四段を收む。参考の爲各段名をあぐ。

一 祝言	二 同吳越の四季	三 拍田	四 笛の段
五 王藻の段	六 四季の調	七 委見のたん	八 枕問答
九 文正道行	一〇 調度づくし	一一 鳥づくし	一二 名香づくし
一三 通ひ小町	一四 業平東下り	一五 同鏡のたん	一六 なには梅見車
一七 同あしやの道行	一八、あし刈笠のたん	一九 一のや順禮道行	二〇 淺草名所
二一 染色づくし	二二 となる道行	二三 ちかの鹽釜	二四 三世相洛陽名所
二五 あまよ北野まふで	二六 巴太鼓道行	二七 同太鼓の曲	二八 兼好花賣
二九 松風鹽くみ	三〇 同狂女の段	三一 櫻姫みち行	三二 ゑしんの道行
三三 なごやのみち行	三四 葛城つぼねおり	三五 同風流しかた物語	三六 待宵の恨
三七 茶の湯	三八 浦づくし	三九 蓮生道行	四〇 蓮生高野入
四一 靜委見	四二 義經忍物語	四三 一休忍	四四 同高野入

四五 同山伏問答	四六 大塔宮熊野道行	四七 同觀音揃	四八 同忍の段
四九 東國くだり	五〇 名劍の巻のつと	五一 花世舞の段	五二 小六の道行
五三 葵の上あづさ	五四 葵の上祈	五五 虎少將道行	五六 同仕方十番斬
五七 童子よろひづめ	五八 中書王道行	五九 反魂香	六〇 中書王神おろし
六一 名女鑑數へ唄	六二 泉式部みち行	六三 さらしの段	六四 大和廿四孝道行(小袖賣)
六五 染小袖模様の段	六六 當世薄雪清水詣	六七 同こかうの段	六八 同都めぐり
六九 老松	七〇 瀧の景(源氏三代四天王)	七一 同山居ほうし	七二 同大辯坊かく明道行
七三 同いさめの官女	七四 近江八景紅葉狩	七五 紅葉狩舞の段	七六 同黒木賣
七七 同狂女道行	七八 同三井寺鐘の段	七九 白玉面影二見の庵	八〇 鳥千歳和哥の前道行
八一 同幼名所物語	八二 同田うたとみおひ	八三 八重垣兄弟法樂舞	八四 土佐日記住吉踊
八五 雪の前順禮	八六 八坂姫若菜摘	八七 同いのりの段	八八 静戀草舞の段
八九 美人揃繪合(大鏡)	九〇 橋王子筑紫道行	九一 橋玉忍	九二 初瀬の前道行
九三 金時道行(繪合)	九四 名酒そろへ(繪合)	九五 清少納言月揃	九六 清少納言道行
九七 梵天國道行	九八 梵天國舟路	九九 同舞樂	一〇〇 紫式部湖水月見
一〇一 袖鏡菊の盃	一〇二 遊覽揃金澤八景	一〇三 同ゆや萬壽道行	一〇四 同鎌倉名所
一〇五 れんげ御前道行	一〇六 名將傳道行	一〇七 篠塚五郎けんみ	一〇八 大職冠道行
一〇九 同田植	一一〇 同後の道行	一一一 同玉とり	一一二 童子山入
一一三 後醍醐天皇しんきん	一一四 同吉野御幸		

江戸土佐淨瑠璃解題 (一一)

○名古屋山三郎

【體裁】 帝國圖書館藏本。半紙形八行、總丁數は四十丁半なれど、三十丁臺をぬかして、最後には五十丁半と記されてゐる。内題は「名古屋山三郎」とあり、卷末には「名古屋山三卷終」とある。尙前附一葉及び表紙見返があり、見返には「六段物目錄」として「一、酒呑童子」から、「四九、今川かづら」まであげてあり、更に「蘭曲物目錄」もあげてある。卷尾には「木下甚右衛門」の例の廣告めいたものが半丁ついでゐる。『新群書類從』第五にも收む。

【太夫・刊年】 前附に土佐少掾橋正勝の字はあるが、例の寶永五云々の字はない。處で「出處原據」の條に記すが如く、『浮世繪類考』によると、延寶天和頃江戸土佐少掾も不破名古屋の事を淨瑠璃に語つたといひ、『役者一挺三味線』によれば、延寶八年三月には、元祖團十郎も、市村座に於て、『名古屋山三郎 遊女論』を上演して、自ら不破伴左衛門に扮したといふから、本曲は延寶頃の作か。

蓋し初代團十郎の『遊女論』によつて、名古屋と不破の争が最初に上演されたとは考へられず、又貞享二年の師宣の『名古屋山三郎繪盡』が、此事件の最初とも思はれぬから、土佐少掾の本曲がよし此事件の最初であるかは不明としても、本曲は延寶頃のものであるやうに思はれるのである。(解説の條参照)

【形式・曲節付】 六段曲にて、初段は「扱も其後」で、地は皆「其後」で始まり、各段尾には皆形式句がある。

第一「扱も其後、それけいせいけいこくの、昔を鳥羽の御代の時、嶋のせんさい和歌の前、それよりこと舊て、むろ君、或は江口の女、かりのやとりにたのしまんと、彼まどひこそ色なれや、こゝに山城の國……」

曲節付の中や、珍らしきは下の如きもので、

本三重、イロ詞、サツマウツリ、イロナガシ、ツナキ地、フシノリ、イロシナリ、イロクトキ、片ヲロシ、イロ地、本地、カ、ル、片ナヤシ、ユリモトシ、三ツ引ギン引取、切ル、サシ、ヲス地、キンツメ、トナセフシ、キンカハリ、レイセイ、早イロナゲ、イロサゲ、シヅメテ、イツヤ、シカブシ、サバナミ、ハコビ、ギン上ゲ、ヒロウ、ヲス

中にも、シカブシ、トナセフシ、キルなどは殊に珍らしく、サツマウツリは甚屢々用ひられてゐる。

【梗概】 第一 都七條嶋原の里に、上林道順といふ遊女屋がある。その家の遊女に葛城、柏木とて、優れた二人がある。禁中北面の侍、名古屋三郎左衛門正春が一子山三郎年春といふ美男と、伏見の里の不破伴左衛門景道とは遊び友達であるが、二人は或時北野の社人梅津の掃部を訪れて、彼が書いてゐる「浮世徒然草」をきかされて、勢に乗じて三人で島原に遊び、葛城と柏木を呼んで楽しんでゐる中に、禁中から使が来て、山三は思ひを残して歸る。山三の態度に思ひ込んだ葛城が名残惜しげに送つた後にて、柏木の處へは、田舎客が別れの爲に遇ひに來たといふので、伴左は柏木を貸してやることにして、さて其後で葛城に戀慕した伴左は、彼女の室に忍込んで、無理に葛城を口説く。そしてきつくはねられながらも、強ひてまつはりつくのを見ると、葛城は伴左の刀をぬいて斬つてかゝる。危い處へ人々が來て女をとめる。

第二 伴左はつまらぬ處で恥をかい、胸がたまらず、それも山三が有る故と思ひ込むと、彼を無いものにしてしようとする。折柄山三の父正春は山三の放蕩を諫めようとして廊に出かける。偶々山三と伴左とは廊で出遇ふ。此時戀のことので山三はされて争ふが、伴左は斬つてかゝり、遂に負けて逃げ出す。そして逃げる途中で、提灯に山三の家の紋をつけた通行人を見つけると、せめての腹いせにと斬つてかゝる。山三の父は危い處を山三に助けられるが、負傷の爲に死ぬことゝなる。

第三 山三は父を伴左に討たれたが爲に浪人となり、木幡の里にかくれてゐる。これを知ると、葛城はたまらなくなつて、一思ひに廓をぬけ出して山三を訪れる。二人は遂に心中して悲みをいやすことにし、北野の七本松まで道行をする。そしていざ死なうとする時、連歌の會から歸り途の北野の社人梅津掃部が見つけて、自害せんとする二人を助ける。そして今伴左は西國方へ逃げてゐるから、山三は美作にゐる梅津の伯父方へ立越えて居よ、その中には再び島原へ遊びに來るだらう伴左を見つかることも出來よう、葛城はそれまで道順の家へ歸つて、勤めをつゞけてをれとの梅津の計畫に、二人は従ふことゝなる。

第四 梅津から道順方へ葛城を送り還すと、道順は喜の中にも、葛城が逃亡したことを憎んで、葛城を局勤めに引下げるが、葛城はこれも戀しき人故と我慢をしてゐる。けれどもあまりに冷遇されたりする中に、葛城は狂氣になつて、遂に道順から大阪口へすてられる。附添のかめ女が葛城を慕ふて行つて慰めると、葛城は彼女を山三かと思つて狂的態度になるが、そこへ、西國にて立身した山三が立歸つて、葛城を見つけて悲みの中にも大に喜ぶ。

第五 葛城と山三とは梅津を訪れ、愈々仇討の歩をすゝめるべく、打つれて道順を訪ひ、山三は先づ葛城身請の金を

支拂はうとする。處が道順で見ると、狂氣の葛城を追拂つて捨てたといへず、残念ながら病死したといふと、折柄その側に忍び姿でゐた葛城が、笠をぬいで正體を出す。道順は甚恐縮して、山三の仇討の加勢をする事となり、今此里へ忍び來る人々の態をまねて見せよといはれると、道順は已むなく廓通ひの眞似をし風流な踊りをする。(こゝが所作事になつてゐる)。やがて道順の女房は、此節毎夜廓に通ふ不思議の五六人があり、何れも大小紋所同じ様な出立をしてゐるといふ話をする、それこそ敵伴左なること疑なしと、一同勇んで其夜も此人々の現れるのをまつ。

第六 その夜葛城をさがしながらうろくしてゐる五六人が、道順の家に立寄るを見つけて、遊女空蟬が伴左らしきに應對して、編笠を引ぬがせると、それは正に伴左であつた。それを見ると山三は立よつて斬りつけ、互に争ふ中に、伴左が首尾よく討たれ、山三は葛城と心靜に二世の契を結ぶことになる。

【解説】 名古屋山三が葛城に戀したがもつて、遊び友達であり戀の邪魔者である不破伴左に父親を討たれて悲觀し、戀人葛城と共に心中しようとする時、友人北野の社人梅津に助けられ、其加勢と畫策によつて、遂に親の仇であり、戀の邪魔者である伴左を首尾よく殺すといふのであるが、此當時にあつたらしい事件を仕組んだものであらうと思ふ。山三と葛城とが心中に出かける處は、如何にも珍らしいもので、これが立派に、延寶頃のものであるとすると、『會根崎心中』前のものとして注意を要する。それにしても心中の道行といひ、女郎屋の主人道順の廓通ひの踊といひ、到る處に廓情調のたつぷり出てゐる點は注目に價する。

【出處・原據】 名古屋山三郎のことは、『塩尻』『墨水銷夏漫錄』『安齋隨筆』『松屋筆記』『嬉遊笑覽』等にも見えるが、山傳京傳編『浮世繪類考』中の「不破名古屋傳奇考」に記すことが、根據を最も明かにして居る。

「貞享二年の印本に菱川師宣の筆の繪草紙二冊あり「名古屋山三郎繪畫」と號す。詞書ありて往古山城國小幡の里に、名古屋山三郎といふ者は父三郎左衛門正春の仇、同國伏見の里に住む不破伴左衛門といふ者を討たる事、北野のほとりに住む梅津嘉門並に遊君高間の葛城等が事をしるせり……僕案するに、延寶天和のころ、土佐掾が淨瑠璃に筋を作てかたりたるが、自然兒女の耳に残つて漸く世に傳へしと覺ゆ。延寶八年江戸市村座芝居に於「遊女論」といふ狂言に、原祖市川團十郎始て不破伴左衛門に扮作す……………」(『浮世繪類考』)

又『烟霞綺談』には不破萬作と名古屋山三郎が、共に秀次の愛した美色で、山三は後に山左衛門と改名し、伊木宇左衛門を斬つて返討されたと記し、名古屋と不破の草履打の説をあげて、不破伴左衛門といふは不破萬作の誤であることなどを述べてゐる。かうした異説は異説を生んで、次第に變化して行つたものと思はれる。

兎に角本曲などが元となつて、名古屋山三と不破伴左衛門と葛城との三角關係は、後に至つて色々と發展するのであつて、これが所謂鞘當物の源をなすともいつてもいゝのである。

【影響】 本曲と殆ど同一の筋である『なごや山三六條通』には、山三の父と伴左の父とが、云ひ合せて、子供達の廓通ひをやめさせようとして忍んでゐる處があつたり、最後には女郎屋で禿の踊を見せたり、又第一段には女郎の道中を加へたりして、色々な技巧が凝らされてゐる點から見ると、『なごや山三六條通』は本曲を改作して賑かにしたものであると思はれる。(『古淨瑠璃の新研究』の延寶享保篇参照を要す)

又土佐少掾の『傾城通俗三國志』及び『續三國志』の外、歌舞伎狂言『なごや山三』などと大に關聯してゐる。狂言本『なごや山三』は元祿十二年二の替の布袋屋梅之丞座興行にて、八丈島から歸洛した不破伴左衛門が、親友名古屋山

左衛門に傾城葛城をゆづることから出發してゐる。

歌舞伎狂言としては、延寶八年三月の『遊女論』、元祿十年正月江戸中村座の『參會名護屋』、元祿十二年六月中村座の『葛城小夜嵐』の外、『日本文學大辭典』には、『葛城吳越戰』、『女若二河白道』、『名古屋大全』、『不破即身雷』、『不破伴左衛門島原狐』、『葛城弘徽殿』、『不破名古屋初冠』等も影響としてあげられ、曉鐘成の『嘶の苗』によれば、山東京傳の作たる不破物『むかし語稻妻表帟』を改作して、文化五年正月道頓堀角座では『けいせい輝草紙』、中座では『傾城品評林』として、東西競演して大に繁昌したといはれる。

又文政六年三月市村座の鶴屋南北作『浮世柄比翼稻妻』も影響の一つであり、所作事に於ては文政十年正月江戸河原崎の常磐津『廓春譽編笠』、天保二年十一月江戸市村座の清元『廓花對編笠』などを數へることが出来る。

讀物としては、文化五年月光亭笑壽作、『不破名古屋再度達引』、同年欣堂間人作『名護屋山三
傾城葛城時代世話大内鑑』などがある。

○當世薄雪

【體裁】 東京帝國大學國語研究室藏本。半紙形四十九丁。後書の題簽及び初行には唯『薄雪』卷尾に「當世薄雪卷の終」とあり。前附奥附等は失はれて、版元不明なれど、木下甚右衛門版であることは類書から推定し得る。

【太夫・刊年】 土佐少掾の語物目錄及び版式から、土佐少掾の語物と見て間違ない、極めて珍書である。刊年は不明。

【形式・曲節付】 六段曲にて各段首尾に形式句がある。

第一「扱も其後、げにや四かいの涙風も、しづかにすめる君が代の、民もゆたかにさかふなる、戸さゝぬ御代こそめでたけれ、

爰に人王百六代……」

曲節付の主なるものに次の如きがある。

ツナギ、イロコトバ、ツキユリ、スエムスヒ、片ヲロシ、イロツメ、ツメムスヒ、早三重、シツメテ、ギン本三重、
下ノリ、中ヒロフ、フシノリ、ノリミ、小ムスヒ、大ムスヒ、キンユリサゲ、ナヤシ、片ナヤシ、本フシ引取、人
ヨセ、イロナゲ、カ、ル、トヨノフシ、ハルウタヒ、フシウツリ、イロクドキ、イロサゲ、本地、サシ、イロサシ、
ウツリサナイ、イロナガシ、カイトウ下リ、イロ三ツ引、舞ハリ、ウタウツリ、アイノテ、ユリモトシ、ツキカエ
シ、イロユリ、サ、ナミヤツシ、上方ユリ、上方地、イロ地、片クリ上ゲ、アイノ山フシ、サツマウツリ、ユリス
テ、トル、三ツユリ、一ツ三重、キンカハリ、イロナトシ、サシムスヒ、アサツマフシ、玉ノフシ、サナイヤツシ、
二人ウタヒ、シテ、ワキ、舞フシ、ユリモトシ、ハコビ地、リウクワヤツシ、ナス地、ギンクリ、ユリウツリ、レ
イセイヤツシ、二ツ三重、舞有、ヒシグ

【梗概】 第一「人王百六代後奈良の院の御時、尊氏の末葉源の義輝が天下の政務を取行ひ、數度の朝敵を誅伐し、諸大名之に従ひ世は靜である。其頃園部の衛門清春といふ北面の武士があり、十八歳にて、義輝の覺めでたく、文武二道に通じてゐる。又横雲王子といふは、先帝の御弟にて、當君には御おち君にあたり、御母の胎内に青龍が宿ると見て出生あらせられただけあつて、御相好入鹿や真鳥に似、御舍弟高根王子と共に御位を傾けん御心あり、弘治元年の春義輝の伊勢參宮の機を利用せんとし給ふ。乃ち諸大名を召されると、南都のゑんけい法印、陰陽のかみ、占部宿禰等集る

もの多いが、横雲王子が勝利の祈を命ぜられると、宿禰は「我國は神國にて帝位の御事私ならず、ことに近年軍多く漸く治まる此時に覺し立給ふは大きなひが事なり……これは延喜のみかどの寒夜に御衣をぬかせ給ふせい徳こそあらまほしう候」といつて諫言する、と横雲王子は怒つて宿禰を引さかれる。人々は皆恐れて連判張に署名する。所が清春は名を思ふて連判に加はることを躊躇する。一大事に及ぶかと思ふと、王子は勝手にせよといはれるので、清春は一味を辞して歸る。法印はやむなく一味して、南都に歸つて調伏の法を行ふ。そこへ清春は横雲王子からの使者だといつて、長櫃に隠れて来て、時を計つて飛出し、法印を謀叛加盟の一人として引さらつてゆく。

第二 禁裏には横雲王子の悪事を知り給はず、しゆんけうの御會を催されてゐる。そこへ清春が法印を召取つて訴へる。朝廷には驚いて諸將を召す。集る軍勢二萬。横雲王子は三萬の兵をもつて押寄せる。兩軍の戦酣なる最中に、義輝の軍が攻入つて、王子の軍を退却せしめる。

第三 横雲王子は一先づ筑紫へ落ち給ふ。其頃舊臣に甘露寺右大辨兼連といふ公卿がある。姫一人あり、名を薄雪御前といふ。或時姫は清水寺に参詣して清春を見そめ、其歸途に彼の袂を捕へて、「いひそむる戀路にまよふ玉づさの結ほゝれたるものをこそ思へ」と一首を送るが、清春は振切つて歸らうとする。姫は更に人目も恥ぢず口説く。けれども清春は、立願あつて女と詞を交さじと誓つてゐるといつて立去る。姫は此時下人に尋ねて始めて彼の名を知る。

清春は嵯峨野の奥に春の一夜琴を弾してゐると、薄雪はめのと夫婦の手だてにて、「月毛の駒にむちをうち御馬ぞへにはめのとこの夫婦前後を守護しつゝ、しとくとあゆませ、近づく、琴の音がきこえる。姫は立よりて月の宿をかしたまへといつて、やがて烏帽子狩衣をぬぎすて、戀を語り、遂に清春を口説き落してしまふ。

第四 やがて義輝は横雲王子征伐を命ぜられ、清春を先陣として弘治二年正月二十三日に都を立つ。かうなると薄雪は悲しい別れをせねばならぬこととなり、乳人瀧野にすゝめられて、清春の目出度歸洛を祈る――。

「都あたりの神社舊跡佛かくをおがみめぐらせ給ひけり、東にはぎおん清水ちしゆの櫻のめも春におとはのたきの落くれはあらしに花のかずちりて雲井のうちに鶯のさへづる方をながむればあさひうつらふ宮寺に……その夜はそこにつや申あけてくらまの山つたひめぐり……四國九國この身よりあかりいさめいさみつほどもなく、たつる願も數多き大物の浦につき、つくしの舟の順風を待たび暫くおはします、かの薄雪の心の内うれしきとも中々申はかりはなかりけり」

第五 横雲高根の御兄弟の王子は、鎮西にて至つて評判悪しく、附従ふもの甚だ少きによつて、安樂寺へ祈願をせられる。

清春は筑前の國府について、陣を取つて休息してゐる處へ、薄雪姫が乳人と共に着き、清春と對面して喜ぶが、女を連れたとあつては外聞も恥しいといふので、清春は薄雪を安樂寺へ預ける。

高根王は安樂寺に祈願して、朧月夜に邊りの景を見る「梅の花がさ春も来てぬうてう鳥のこすへかな松の葉色も時めきて十かへりふかきみとりかな……」。(この邊景事)この時高根王子は老人と女とを見て、怪しみながらも、宮守と願人であるときいて安心し、飛梅や老松のことなどを尋ね、更に翁をして此社のいはれを語らしめられる。「まづ社だんは玉をつらぬめいきやうのひかりあざやかに北にがたるせい山あり、南はけいもんちくかんのもとに……紅梅殿も老松もまつしやとげんじ給へりや、されは此二つの木は我朝よりもろこしに徳をあらはしとうの代は……」と、更に秦

の始皇が松を太夫に封ずる物語などをする。代つて女が「さて天神のそのかみはつくしの土にはて給ひし、おんりやうはなるいかづち遠き雲井にかけり来て、さんせしおとゞをかいつかみ、本望をとげ給ひ、僧正のかちゆへにたちまちうらみ引かへて、ながくきんりのしゆご神とならせ給ふも有がたし……」と物語る。(此間が舞曲や謡曲がうりになつてゐる。) やがて時を見計つて、翁は清春の姿となり、高根王子を取つて押へ、朝敵なるの故に首打落し、姫をつれて陣所に歸る。

第六 「足利の義てる公くら手の庄を打立て、國府の江に着せ給ふ」所へ、左衛門清春が薄雪と共に、安樂寺にて高根王を討つたといつて首を奉る。やがて更に朝敵討伐に向ふ。

(こゝに戦の模様がしばらくあつて後) 横雲王子を、「やがて生捕りそれよりも義てる公の御目にかけて都へかへちんなされける、千秋萬せいめでたしとてきせん上下おしなべてみなあほがぬものこそなかりけれ」

【解説】 横雲王子の叛乱を、義輝と北面の武士清春とが鎮定したといふまでのもので、其間に清春と薄雪姫との戀をあしらつたに過ぎない、至つて簡単な構想である。

【原據】 寛永九年刊『薄雪物語』の主人公園部左衛門は深草の里にすみ、二十歳の時清水寺に詣り、等しく參詣した一條殿の御内さいさき和泉の女薄雪を見そめ、しげく艶書を送つて遂に契を結んだ。本曲では園部の衛門清春が、甘露寺右大辨兼連の姫薄雪御前に見染められ、嵯峨の奥に隠れてゐたのを口説き落されたことになつてゐるが、外題を『當世薄雪』としたのは、もとく、『薄雪物語』が徳川時代初期の流行書であつたことにあやからせたもので、戀人同士の名までも似たものにされてゐるのでも知ることが出来る。横雲王子の態度は全く寛文期の『大友真鳥』の大友真鳥

そつくりであり、薄雪御前が嵯峨の里に清春を口説きに出かけるあたりは、『小倉山百人一首』に於て、式子内親王の定家に對する態度などにまねたものか。又、本曲には『天神の御本地』其他寛文期の公平物の色んな仕組が應用されてゐる。

【影響】 寛保元年五月竹本座に上演された『^{時代}新薄雪物語』(文耕堂、三好松洛、小川半平、竹田小出雲作)は本曲の影響である。假名草紙の『薄雪物語』は、貞享三年森田座にて『薄雪物語』として脚色上演され、元禄十三年三月には山村座にて『薄雪今中將姫』として上演されてゐる。之等が本曲と關係あることは云ふまでもないが、『新薄雪物語』は歌舞伎としては、竹本座で上演の年に、伊勢の芝居で元祖歌右衛門によつて、翌二年には大阪中座で上演され、江戸では延享三年五月中村座で『新薄雪物語』として上演されてゐる。

○源氏花鳥大全——荆山

【體裁】 東北帝國大學藏本。小形十七行十一丁。初行に「花鳥大全序」とあつて、其下に「初段」とある。柱にも「花鳥大全」とあり、奥に刊記の下に小傳馬三町目、木下甚右衛門板とある。兩面繪四。稽古本では「源氏花鳥大全」又は「荆山」と外題されてゐる。源氏を冠せたのが原曲の名であらう。

【太夫・刊年】 奥に土佐少掾直正本とあり、寶永六己巳正月吉日とあるが、六年は己丑である。従つて己丑を信すれば享保二年刊となり、年號に重きを置けば干支に誤があることとなる。普通には干支を重んずべきであらうが、これは少くも寶永頃或はひよつとすると、もつと前のものか。つまり繪入本と稽古本の刊年などの混じたものか。

【形式】 六段曲にて、第三段以外各段首尾に形式句がある。繪入本には段付が初段二段目とあるが、稽古本には第一第二となつてゐる。

初丁初行には「花鳥大全序」とあるほどあつて、「いわゆるけいざんと申はそもそこの……」から始まつてゐるが、その序が十一行で終ると、▲をおいて、本當の初段は改めて「扱も其後梅花の清くかんばしきも……」で始まつてゐる。これが稽古本では明かにされてゐる。

【稽古本との差】 即ち稽古本には、序の長い文の前に「荆山」の題がつけられ、それと本當の初段と差別がつけてあり、三段目の「管弦」、「歌仙」、「うはなり打」、四段目の「貴布禰の道行」、五段目の「花山寺御幸」、「絲繰」等、別に見出しがつけてあつたり、第三段の始に於て、「ますみの鏡引かへて我は恨みでくらせとや……うつゝと詠せし

詩の心」までが、「そらのけしきと思ひ出のらんかんに立盡して」の前にあつたりして、繪入本より稽古本の方が聊か詳しい處を見ると、繪入本の方が略されたものか。

【荆山】 帝國圖書館藏本。半紙形稽古本「花鳥大全」を見ると、その前に「荆山」の題名をもつた二丁半があり、之を加へて、全一冊が八行四十四丁で、太夫土佐少掾と版元木下甚右衛門とある廣告の一行が前付になつてゐるが、それには例の寶永五年の刊記は削られてゐる。尤も別に寶永五戊子の刊記のあるものもある。奥には「源氏花鳥大全卷之終」とあり、柱には「花鳥」の字がある。

『荆山』の曲節中主なるものを見ると――

ヘイケ、 ホウカソウ、 サイツメ、 ウツムスヒ、 霧山本フシ、 片ヲロシ、 片田節、 玉ノフシ、
カイトハ下リ、 レイセイ、 ツキカエシ、 アミトヤツシ、 ギンコトハ、 モロナヤシ、 タイナイヤツシ、
二上リ、 トル、 セツユリ、 ヲス地、 上方ユリ、 マイハリ、 ヲトリヤツシ、 一ジノミ、
上カ、ル、 半ナヤシ、 トナセ、 ツナキ、 哥トメ、 アイノ手、 アイノ山ウツリ

【梗概】 荆山（これが「花鳥大全序」と題する繪入本の序文である）。荆山といふのは楚國の山の名で、先づ此山の説明があつて、阿倍晴明は此處へ陰陽道の修行に行つてゐることになつてゐる。晴明を見ると師伯道は、谷川を目かけて柱杖をなげる。晴明がそれを取らうとして谷川に飛込むと、杖は飛龍となつて活躍する。晴明がそれに切つてかゝると、龍は晴明をかつぎ上げる。伯道は始めて感心してほきの眞傳なる一巻をわたし、晴明の家寶とする金鳥玉魂集なるものも皆その中にある、日本に一大事が起つてゐるから、之を携へて早く歸國せよといふ。晴明は飛龍の頭

に乗つて姿を消す。

第一（繪入本には、此語なくして直に荊山から此處へつゞいてゐる）「偕も其後梅花の清くかんばしきも、ばなはだやせて事たらず、桃はまたこへたれ共、色ふかふしてなつめるとや、思ふになをくかたちよく、あいすべきも世にまれなり、爰にくわうとう六十五世の帝をば花山の院と申奉る」。時の關白は藤原頼忠である。后妃あまたある中に、藤壺の女御弘徽殿の女御二人がすぐれて君寵を蒙り、弘徽殿の女御には殊に君の御心が深いので、藤壺は朝夕之を妬み、思ひに胸をこがす。時の武將には源氏には頼光、平氏には維茂の弟左官重茂がゐる。「誠に寛和の時」である。

今日加茂の競馬の御まつりにて、兩將二人の女御に供奉して、右近の馬場へ出る。やがて競馬の賑の中に、秦の道満といふものが出て、我家の天文の秘書金鳥玉兎集にて占ふと、帝王位を去らせ給ふ變があり、後の内「御てうあいの一たる方たいゐしんとかたがひ、てんだう火木の悪性、是國家どうらんのもとゐ、私しならぬ御大事」故、言上するといふ。そこへ「かたへの松に白雲のかゝると見へしが中よりも、晴明はとんでいで」、晴明の秘藏を盗取つて寫した道満の化の皮をむかうとすると、道満は之に反して却つて自分を正しいと云ひ張る。けれども彼の秘書なるものを開かせて見ると、いつか白紙に變つてゐる。狼狽して逃行く道満を、頼光四天王に引捕へさせる。

かくて頼光は祭の半ばに、弘徽殿を守護して歸らうとすると、右大將かけかた、平重茂は藤壺の歸らぬ中は、それをさせぬといつて争ふが、頼光の四天王等はあばれて歸つてしまふ。

第二 右大將景方と平重茂とは、藤壺女御にたのまれ、道満を語らうて企んだことが、晴明の歸朝によつて敗れ、おまけに道満を引ばつて行かれたので、企んだ事が暴露しはせぬかとの心配から、更に相談を廻らし、今夜頼光を夜

討にして、道満を盗取つて害し、更に弘徽殿をも失はんとし、それも叶はずば、朝敵の名を立て、帝都を闇にせんとする。

頼光は今宵直に参内して一切を奏上すると、藤壺は親里へ、道満は遠流の罪として頼光にお預けの勅がある。頼光は其夜宿直の役の事とて、一切を保昌に托する。

ところが後夜の頃、平の左官重茂は三百餘騎を野武士の如く出立せ、姉が小路へ押よせ、ともかく廣庭へ入つたが、中門の守が厳しく、入りかねてゐると、保昌が物音に怪しみ、門を開いて戦となり、危い處へ四天王が大内よりかけつけ、勇戦するので遂に重茂は逃出す。

第三 藤壺は親里にあつて、大内山の方を見やりつゝ戀ひつ恨みつしてゐる。

管弦（繪入本には此題もない。）歌カ、リ「千年ふる、君の霧山本フシ おまへのまつがゑに、ひなつるは、すをくへば、池のみきはに龜あそぶ……」と琴の音さえて月清き文月七日、御門が弘徽殿に成らせられる時、藤壺の女御は怨言をのぶべく近よるを、御門に従ふ左中將これなりが遮つて引隔てる。

歌仙（繪入本には此題もない。）主上と弘徽殿とは歌仙の歌をかりて、お物語がある「……あるは待佗ねもやらで、ふけ行かねの聲きけば昔は物を思はざりけりとよみにしはげにもことはり」と女御が申すと、月かたぶかぬその中にと簾中に入らせられる。

うはなり打（この題も繪入本にはない。）くねる心の藤壺はいよくまさる亂かみ、ほぐれかねたる思をば、筆にいはせて……御簾の内へたんざくを、なげ入れ給へば弘徽殿、たれやと取上見給ふに、小野の小町が歌と見へ、色見

へでうつろふ物は世の中の人の心の花にぞ有ける」とあるので怪んでゐる中に、藤壺は「守刀をぬき持て、御簾の中へかけ入らんとし給ふを、弘徽殿刀を奪ひ、君には向ふ邪淫の罪我をな恨み給ひそと心もとを指通す差通さるればき

も現もきへくと成らせ、……夢は破れて藤壺は御目をさまし……君を戀しと思ひねのわが心から見る夢よな。夢にもまけるは口惜しと藤壺は今の思ひを知らせんとて丑の時詣をする。

第四 陰陽の頭晴明は源頼光と共に、頼忠公の所に至り、寶祚を呪咀するものがあることを述べ、家の秘密の法にて邪魔障礙を祓ふといつて白紙で鳥をつくり、それを飛ばして、其行衛を明かにせられたいといふと、渡邊綱が馬で追行く。

貴布禰の道行（この題も繪入本にはない。）「花さかば、つげんといひし山里の其音づればあらねども、わが身は出る戀のやみ、かなわに燃る怪火に……」と、藤壺の女御が「丑みつ過る比ほひに貴船の宮につく」までの道行。

渡邊の綱は紙鳥の後を追つて、貴船の山につくと「藤壺は神前にひざまづきなむやきぶねの大明神今宵七日のまんさんなり、足を空にし詣たる印を見せて給はれと」祈つて、「神木に打向ひ此釘は弘徽殿にうつ成ぞ、にくしつらしの一念は鬼ともなり蛇とも



「全大鳥花」本正掾少佐土 刊年六永寶

なり終には思ひしらせんとてうくと打給へば、大杉より血流れて貴船の川もくれなるに、錦をさらす如くなり。更に、女が主上を呪ふと見ると、綱はそれを押止め故をたづねると「君諸共にかうきでん、命をたちて長き世のしんぬの胸をはらさん爲扱こそかくははからふなり」といふ。綱がなだめるが少しも其甲斐ないのを見ると、綱は「太刀ぬき持てはたと切る、はつと云て藤壺は渡邊に飛かり持たる太刀にかなくりつく」を胸もとさし通し川に投げて綱が歸らうとすると、うづまく淵の底から、藤壺の怨念は忽ち大蛇となり、橋をかるくとかつぎあげる。そこへ白紙の鳥來つて、綱をつかみ去る。蛇身は怒りもだえ神木にまきつき苦しげにつく息猛火と燃上る。

第五 關白の館に晴明頼光が會合してゐる所へ、白紙の鳥は綱と共に庭上に降る、と同時に鳥は伯道と現はれ、晴明に向つて「我は是唐の伯道、汝に與へし一卷の秘術をしるせし其きどく今こそ思ひさとりらめ、此上とても其如く妙術をきはむべし」といつて、文珠菩薩となり、光を放つて飛ぶ。

やがて綱は鳥の様子から、藤壺の女御のことを語つてゐると、弘徽殿の女御の行衛がわからぬと訴へ、上下の騒となる。

主上には弘徽殿の残された「吹ちらす秋の露にて、身を知りぬうき世の秋にあはではてめや」の一首を見たまひ、義かね是なりをお供にて花山寺へ成らせられる。

花山寺御幸（繪入本には此句がない。）「哀れもよほすおか野邊に、夜すがらとはす螢火も、きへぬ思ひのあれはにや、虫だに胸をやこがすらん……」、やがてとある賤が屋にて、疲れを休めさせられ、わくかせのわざを御覽ある。絲繰（此題も繪入本にはない。）「まさうの糸をとりかへし、むかしを今になぞらへて、君にもつるゝ糸柳、亂て

もなを麻ぎぬや、賤かうみのよる迄も、世渡るわざこそ物うけれ……。かうして賤の女の手わざを見てみると、賤の女の面色替り、角を出し、頭に頂く金輪の足の、ほのふの赤き鬼と成て」捨てられて怨めしやと、いひながら主上をにらむ。義かね等は剣をもつて切拂ふ。そこへ頼光は五人の郎黨をつれて、主上の前に膝つき、晴明の知らせによつて馳せ参じたといふ。その時藤壺の怨靈馳來り、八面の惡鬼となり、「我はもと山田のをろちが一念、藤壺ねたみの一心に入替て玉體に近づき引さき捨、まこくになさんと計りしに、晴明がかち頼光が武勇、三種の神器に恐れつゝ本望達せぬ悔しさを、つかみさかんと呼はる」を、四天王等がすた／＼に切り、頼光は首を切る。

第六 「其後頼光四天王の者共は君の御供仕り、だいに還幸なし申せば、安倍の晴明弘微殿の御供し、急ぎ参内仕り、秘密を以て御行衛を」さがしたと奏する。そこへ勢州の探題左近の太夫がはせ來り、右大將景方、平の左官重茂が鈴鹿山に城をかまへ、謀叛を企てると奏する。頼光勅を蒙つて征伐に向ひ、謀叛の張本重茂をば綱が生捕り。定光末武は景方を捕へる。

【解説】 花山の御門の御寵愛深き弘微殿女御に對する藤壺女御の嫉妬と、源平の争とを結びつけたもので、「源氏物語」のとは人物の關係が違つてゐるが、これはわざとの構想に出たものであらう。これについては「古淨瑠璃の新研究」「慶長寛文篇」、寛文十三年の『花山院后評』、延寶の加賀掾正本「殿上うはなり討」等を参照するを要する。

【出處】 『本朝通鑑』『大日本史』等に記されてゐる、花山天皇の御事蹟をもとにしたものである。勿論「源氏物語」とも關係がある。

【原據】 上述の如く寛文十三年の『花山院后評』に據つたものであるが、其最後に於て、本曲では、御門は御退位

ないことになつてをり、又弘微殿女御も阿倍晴明が行衛をさがして連れ歸ることになつてゐる點が、構想上最も異つてゐる。従つて、本曲の結末は舞踊にはなつてゐない。

尙、第四段に於て藤壺女御は、貴船の社へ丑時参をして呪咀を行つてゐるが、此丑時参は、「太平記」に、嵯峨天皇の時、公卿の息女が嫉妬のあまりに貴船の社に祈つたとあるのが最初であらう。ついで延寶期の『あふひの上』等にも用ひられ、而も詞章すらそれから借りられてゐる。(延寶篇の「葵の上」参照)

【影響】 『花山院后評』の影響は、同曲の終に記したが、本曲と享保元年七月豊竹座上演の海音作、『花山院都巽』との間には構想上多少の關係があるが、詞章上にはない。

○酒 願 童 子

【體裁】 紫蘭文庫藏本。帝國圖書館にもある。半紙形にて、初二丁は八行、二丁目裏より九行、三十九丁半。初行に「酒願童子」。卷末には「酒典童子」とあり、柱には「童子」とある。前附に版元木下甚右衛門刊とある。

【太夫・刊年】 前附に土佐少掾橋正勝の字があるが、例の寶永五云々の句はない。けれども刻版目錄には最初にあげてあるから、割合に古いものか。段物寄せ本には兎角終の方に出てゐる。即ち寄せ本では新しいものほど前へつけたものと思はれる。

尙「大江山酒吞童子」と題する九行本に、延寶六年版があるといふが、その刊年あるものを見ぬ。従つて此正本かは明かでないが、曲節付から見ると、此正本は相當古いものの如くである。

【形式・曲節付】 六段曲。各段首尾に形式句あり、最初の曲節付に「中序」とあつて、六行までは非常に曲節付が多し。

曲節付中主なるものに、次の數種がある。

中序、 切ル、 サシ三重ニモ、 ラス地、 ヒシグ、 イヤハアア、 大ムスヒニモ、 地ハコビ、
此三重大事有口傳、 キザミ

第五段「きとくの酒の事なればそのあぢ甘露の如くにて心ことばにのべがたし
各段首を見ると次の如くである。―― 三重さしうけく (此三重大事有) のむほどに……」

第一「扱も其後仁王六十六代の帝を一條の院と申奉る、内には三綱五常……」

第二「其後渡邊の綱鬼神のかひなを切しより世の中靜に聞えしが……」

第三「其後ともはるいつはり給はぬよしことふんみやうにしなければ……」

第四「其後六人の人々はまだ夜をこめ立出てやうくいそがれるほどに丹後路にさしか、り……」

第五「其後六人の人々は鬼か城にぞつき給ふ……」

第六「其後頼光のいでたちには肌にはにしきのひたれ……」

【角太夫本との比較】 延寶四年の角太夫本と比べると、やゝそれを略したものである。繪入本「頼光山入」は更に之を略したもので、各段は繪入本も、八九行繪無し本も同様に始まつてゐる。

【梗概】 第一 前半は謡曲「羅生門」をその儘かりたもので、或夜の保昌の話で、渡邊綱が羅生門の鬼神を退治す

べく、しるしをもつて出かけ、鬼の腕をとつて歸る。後半では、鬼は綱の叔母に化けて来て、腕を奪ひ還して歸る。

第二 上總の住人藤原友年は、池田中納言國高に一人の姫を強要し、拒まれたときくと、酒吞童子の眷屬が女装し

て姫を奪つて愛宕へ逃込む。これを友年の所行と思ひ込んだ國高は、友年と戦ふ。四天王の一人定光は理づめにして兩者を退陣させる。

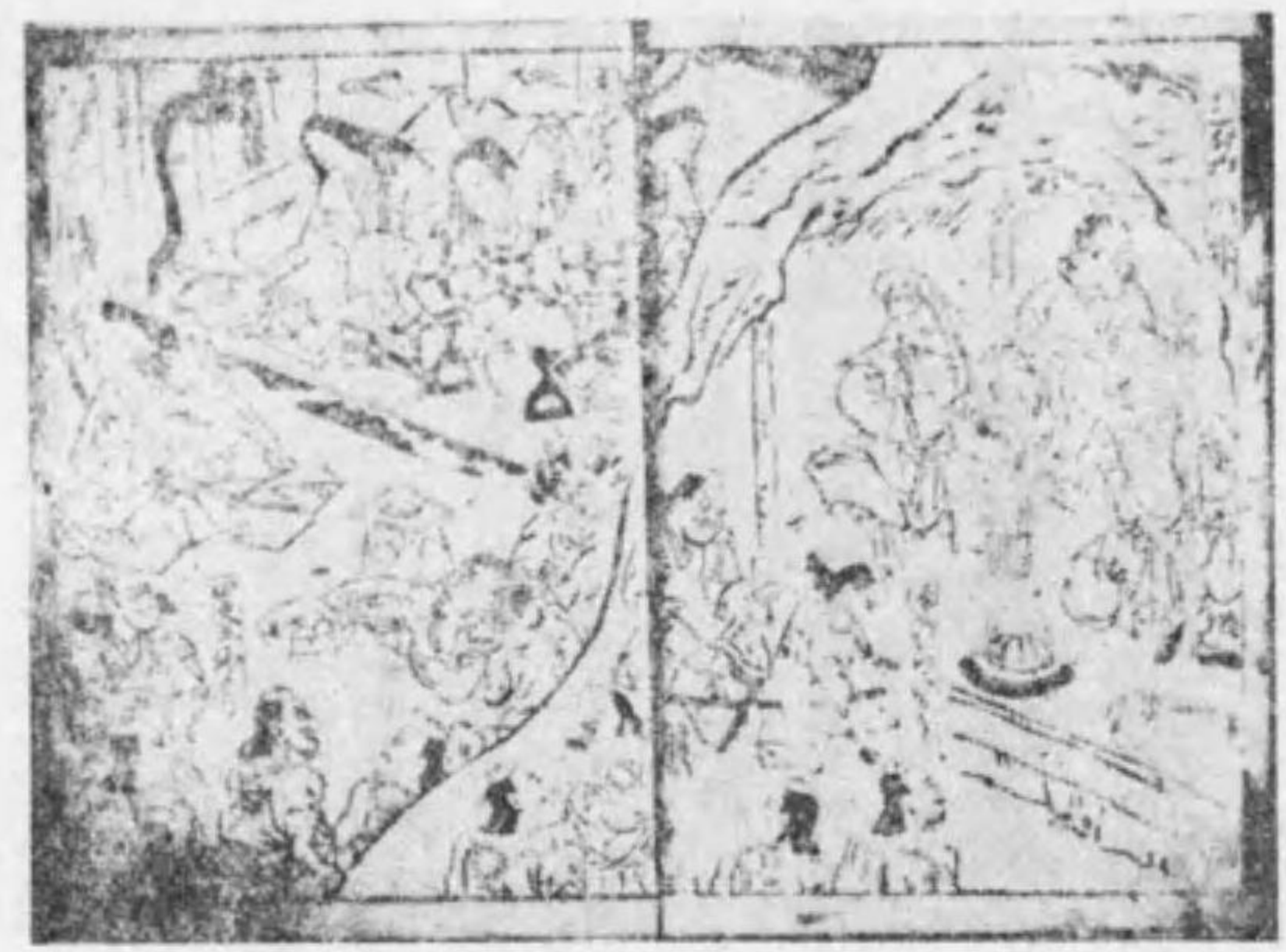
第三 友年の疑がはれる、國高は占によつて、姫が酒吞童子に奪はれたらしいと知り、その爲頼光等に鬼神退治の勅命が下る。即ち一同は山伏姿で大江山入りをする。

第四 頼光及び四天王等の一行六人は大江山の麓につき、山人に出遇つて鬼が城の所在をきき、毒酒を貰つて三社の神達に案内される。

頼光はかぶとを貰ふ。やがて川上にて血のついた小袖を洗つてゐる花園姫に出遇つて、酒吞童子にさらはれて來た姫達の不幸なる物語をきき、童子の城へ案内されてゆく。

第五 六人の人々は鬼が城につき、巧に童子に對面して、偽つて酒宴を催うし、童子に毒酒をすゝめる。童子は甘露の如き毒酒をのんで

靜に己が來歴を語り、今の身の榮華を誇りながら、頼光一黨を恐れてゐる。頼光等は巧に童子をだまし、愈々酒をすゝめては歌ひつ舞ふたりする。



(藏大帝京東) 「入山光頼」 ?本掾少佐土

第六 やがてハハは姫達に案内されて奥深く進み、童子を見事に斬る。その首は虚空に舞上る。更に茨木童子、石くま童子、虎熊童子など数多の鬼を斬る。そしてこれまで鬼にとられてゐた姫達を呼出して都に歸る。頼光は津の國河内の本領に加へて、備前播磨美作を添へて賞せられる。

【解説】 所謂頼光一黨の酒吞童子物語にて、角太夫正本の酒吞童子と筋には變りなく、文章が幾分裝飾的になつてゐるやうであり、四段目が土佐正本では四五兩段に分けてある。

【原據】 平安朝の末頃山賊の巢窟となつてゐたといふ大江山傳説に、頼光の武勇物語をつけ加へたものらしく、謡曲『羅生門』お伽草子『酒頭童子』等も此物語の發達に加勢したものと思はれる。此物語は既に慶長頃に語られたといふが、殘存正本では、寛文三年の新宮内正本は古い方で、同様ものが十數種あり、影響としても近松の『酒吞童子枕言葉』『傾城酒吞童子』以下數種があり、其他の淨瑠璃や小説類を生み出したことも少くないが、之に關しては拙著『古淨瑠璃の新研究』慶長寛文篇に詳記した。

○頼 光 山 入

【體裁】 帝國圖書館藏本。小形十七行十二丁。題簽もなく、後書に「頼光山入」とあり、初行は空白なれど、柱に「山いり」とあり、正本太夫から「頼光山入」であることは明かである。挿繪は兩面四あり、第一の繪及び第二の繪に「あし奥村政信」と記されてゐる。

【太夫・刊年】 「土佐少掾橋之正勝直傳之以正本寫之令板行者也」と奥に記され、享保六年辛丑初春の刊記があ

る。

【形式・曲節付】 六段曲。各段首尾に形式句がある。曲節付はないが、奥に「さつま太夫家の本ふし」の語が見える。

【解説】 要するに半紙本を更に少しく略したもので、角太夫正本と比べると、一二三段は一二三段に、角太夫正本の五段は六段にあたるが、角太夫正本の四段目が大體「山入」の四五段となつてゐる。

○蓬 萊 源 氏

【體裁】 紫蘭文庫藏本。半紙形八行四十三丁。柱に「景清」とあり、表紙にも、卷末にも、内題も皆「蓬萊源氏」。前附にも奥附にも、木下甚右衛門刊とある。

【太夫・刊年】 前附にも奥にも、土佐少掾橋正勝の名が見え、前附に、例の寶永五戊子初秋の句が見える。

【形式・曲節付】 六段曲。各段首尾に形式句があり、一段目に祝儀献上物、三段目に福引、四段目に曆賣の節事がある。

第一「扱も其後、じんはよくものいはずして人なくはし、れいはまたうごかずしてひをたす、かゝるみちあるくにかぜ、なびかぬくさ木もあらざれば、君はちよませくと、あふぐもおるかつるが岡、正八幡宮御建立……」



多少變つた曲節付には、左の如きが目立つ。

ウタトメ、 相ノ山、 上ゲ、 ラス、 ツナギ、 シヲリ、 ハヤナケ、 ツキ入、 フシノリ、 ヒロフ、
色三重、 中ハシリ、 サシ、 上方ギン、 サイツメ、 ツバキ地、 色ハコビ、 ウツムスビ

【梗概】第一 頼朝が鶴岡八幡宮を建立して、祝賀の式を行ふと、諸大名から色々の祝物を贈る。乃ち鶴を贈つた朝比奈をして其品々を披露させる。そして頼朝が歸館といふ時、三保谷四郎が景清を捕へて来る。景清はまた頼朝に報ひんが爲に、わざ／＼捕へられて頼朝に近づかうとしたのだといふが、その時頼朝が乗つてゐる筈の車の中から、朝比奈が飛出し、かねて斯の如き事あらんを恐れて、頼朝は先に歸らせて自分が代つてゐたのだといひ、景清を討たうとするが、景清は他人に用はないといつて四郎等を投げて姿を消す。

第二 熱田へ奉幣の代参をした秩父重保が歸つた後にて、頼朝は昨日捕へた景清を引出せといふ。引出して幕をとつて見ると、それは景清でなくて、三保谷四郎である。頼朝は怒つて四郎の出仕をとめる。

秩父の重保は景清の娘人丸姫に馴染みて、今鎌倉の自分の家へ連れて来てゐるが、一日人丸姫が外出して見ると、景清逮捕の高札が建て、ある。乳人お篠と共に悲しみながら、姫がそれを見てゐる處へ、三保谷四郎が来て姫に濡れかゝり、無體にわが家へ連れてゆかうとする。折節通りかゝつて、その様を見つけた重保が之を咎めると、四郎は此女こそ景清の縁者ならん、取調べて景清の所在をさがすのだといふが、重保の叱責に恐れて歸宅する。

けれども四郎は人丸の姿が忘れられず、丁度その夜重保の宿直の番なるを幸、郎等をつれて、姫を奪取るべく重保の留守宅を襲ふ。そして攻入つたのは四郎だと本田親常から目星をさゝれると、四郎は重保が景清の縁者をかまくまふ

故に捕へに來たのだといふ。かくて暫く戦の後、重保の父重忠がかけつけ、四郎に向つて戦の故をたづね、遂に四郎を降参させてしまふ。

第三 春の夜を重保は人丸姫のもとに忍び、めの童に福引などさせて慰む。「春の初めの賑はとしくひめのをばしまのたなにたなびく朝霞、いたりいたらぬ宿もなく、くるまざしきにまとひして、われも／＼と福引のつなをあらそひとり／＼に……」。やがて重保が女をかまくまふは怪しからぬ奉行所の命によつて來た、重保早々切腹せよと呼ぶ。乳女小笹は氣をきかし、重保等二人を逃し、自ら顔に紅をぬつて、男装しながら敵を待受け、吾こそ朝比奈の三郎ぞといふ。果して敵は三保谷の一黨で、朝比奈の聲に驚いて逃げ出す。

第四 朝比奈三郎は今日元服して、その門出に景清を尋出さうと思つてゐる時、空鶴といふ仙人が現れて、以前朝比奈が鶴を愛した禮だといつて、今日景清が馬の立止まつた處にゐるから捕へよと教へる。

景清は頼朝に近づく手だてとして、今日「悪し事をばみつのとや、よき事ばかりみの年とあらたまりぬる若水のつきぬいづみぞたのしけれ……」と、曆賣の節事を歌ひながら、人丸姫の隠家にて、曆を賣つてゐると、奥から重保が出て來て、その曆賣を景清と睨んで捕へようとする。姫は始めて父と知つてすがりつく、最初は父ではないと隠してゐた景清も、遂に今日まで三十餘度も頼朝をねらつて果されぬ不運を歎く。姫は父を助けたさの之までの苦勞を述べ重保は頼朝へ仕へよと勸むる所へ、朝比奈が來て、景清に討つてかゝらうとする。

重保との問答の後に、朝比奈は景清を捕へて、重保と共に景清を頼朝の前へ引く。

第五 景清は捕へられて、龜井谷の岩屋の牢に入れられてゐる。そこへ重保と人丸は龍虎に扮して、様々の和漢の

例をひき所作事をして、景清の心を和けて、頼朝につかへよと口説く。三保谷は来てそれを妨げる。又朝比奈は来て勤める。景清は遂に兩眼をくちり出して重保の勸に従ふ。

第六 景清は日向に所領を與へられて、其處にすむこととなり、又平家の餘黨難波七郎八郎は景清と心を合せて頼朝を討たうとする中に、景清が降参したと聞くと、鎌倉からの討手をまちうけ、鋸山にこもる。朝比奈三郎が命を受け、八百の兵を以て、之を難なく討滅す。

【解説】 平家の殘黨惡七兵衛景清が頼朝を討たうとして、遂に頼朝に屈して日向に隠れるまでの物語の間に、畠山重保と景清の女人丸姫の情事を編込み、それに三保谷四郎の人丸姫に對する横戀慕をからませたものである。五段目に於て獄に繋がれつゝも、頼朝への降伏をすゝめられ、兩眼をえぐつて、遂に節を屈するに至るまでの、景清の苦衷を描いた處が山であらうが、無くもがなの六段目をのぞいては、全曲が割合に引締つた戲曲的劇的場面に富んでゐる。土佐物の中では優れたものに數へられよう。

【原據・影響】 舞曲「景清」や、それを参照したものといはれる寛文十二年の古淨瑠璃「かけきよ」や、近松の「出世景清」に據つたものであるが、別に元祿頃の松本治太夫か、山本角太夫の正本に、「鎌倉袖日記 付タリ日向景清」があり、その改作ともいへるであらう。尤も「袖日記」には、別に其改作、正徳五年正月刊「人丸姫戀慕縁」又の名を「日向景清」といふものがある。本曲はそれらと相當縁が深いから、正徳五年後のものでないにしても、或は元祿寶永頃のものか。後の景清物と凡て多少の縁がある。

江戸土佐淨瑠璃解題 (二)

○唐 玄 宗

【體裁】 東京帝國大學圖書館藏本。小形十七行十二丁。兩面繪四、畫師奥村政信と刻す。奥に「小傳馬三町目木下甚右衛門板」とあり。題簽は失はれてゐるが、後書にて中央に「唐玄宗」とあつて、右肩に「しやうき大臣明鏡の姿」、左に「やうきひ温泉の姿」と記されてゐる、元題簽にあつた句と思はれる。

【太夫・刊年】 太夫名はないが、土佐少掾の語物にこの外題があることが傳へられ、版元、類版等の點から、土佐少掾の語物といはれる曲と同じと思はれる。刊年は奥に「寶永五戊子年正月吉祥日」とある。

【形式】 六段曲、各段首尾に形式句がある。

初段「扱も其後抑是は仁王四十五代聖武皇帝につかへ奉る藤原中などん清川にて候扱も我君はぎやうしゆんしうぶにもはぢ給はざるまつり事天下こそぞつて萬世と御代をことふき奉る、然るに唐の玄宗皇帝……」

【梗概】 初段 聖武皇帝はすぐれた御門にて、其善政を聞くと、玄宗皇帝は日本を征服しようとする。それがわかると、我朝の一大事ぞと、熱田の宮へ祈願の爲勅使をたて給ふ。

すると宮では、神子が御説に答へて、震襟をやすめ奉るべく、白鳥が現れて、直に雲井に飛ぶ。

其頃の唐帝玄宗は明君にて、臣下には右將軍し、明、はんやう官、安祿山、ちんげんれい、及び力のある高力士などがゐる。日本を討つには智謀の人が入用だといふので、天下に有力の士を求めると、鐘馗が現れて試験を受けるが、落第して自殺すると、玄宗は彼を憐んで、鐘馗大臣として葬らせる。

又しゆふといふものが悪逆を逞しうするので、左將軍くわてきに討たせ、その首を觀覽あらうとすると、首が吐いた息から鬼形が飛出し、鐘馗の亡魂だ、大臣といはれた恩報じに來たといふ。かくて今度は鐘馗としゆふとが争ふ。

二段目 玄宗の兄をねい王といふ、あまり勇猛な爲に、位は玄宗がつぐ事となつたが、彼は最初楊げんゑんの美女玉くわんを手に入れようとして、ゆふこうげいを遣して強奪させようとした事がある。

元來此玉くわんといふのは、楊州の郡主楊げんゑんの女、楊國忠の妹で、もと至つて悪女であつたが、一日庭に出て遊んでゐる時、日本熱田の神靈が白鳥となつて來て、彼女の顔をなでると、見る／＼三十二相をそなへた美人になる。そこへねい王の使が來て玉くわんを請うたので、楊げんゑんは之を承諾して使と共に歸す。すると其處へまた玄宗皇帝が后にするからとて、玉くわんを求めて來る。楊國忠は乃ち父と相談して、ねい王の使の手から、再び玉くわんを取かへさうとして追かける。當然戦となる。ねい王は叶はじと見ると、獅子を放つて戦はせるが、豪勇なる高力士は見る／＼獅子を抱きつぶしてしまひ、ねい王がかつがせて逃る姫の輿を遂に奪還す。

三段目 玄宗は玉くわんを后とし、之を楊貴妃と名づけて愛する。兄の國忠妹の三人皆榮華に暮し、安祿山も土産を贈つて來る。やがて玄宗は華清宮に行幸する。四季の景の敘述が此處にある。「四季の景一々詠給ひける、先東のすきこそ春くはていと名づけつゝ霞める山に消え残る雪の内より咲く梅の……」。

かくて玄宗が貴妃と共に奥殿に入ると、楊國忠は玉座に坐り込んで、帝の名を以て李太白を招く。招かれた李太白は傲然たる國忠の様を見ると大に怒り、靴の儘庭に出る。國忠はそこは玉座だといふ。玉座だとあらは我靴を取去れといふと、國忠はそれを引ぬがして放り投げる。嘲罵は喧嘩となり、李白は遂に劍をぬいて國忠を追かける。玄宗は驚いて之をとめる。

四段目 安祿山が我家に茫然としてゐる朝、白雲が庭上の松に舞ひ下つて二つに割れ、中から化神が出て、「我は是大日本あつたの神靈大和武のみこと也汝が主君玄宗我朝を」亡ぼさうとすると聞いた故、此國を乱し、初志をやめさせようとして來たから助けよといふが、祿山が之に従はうとせぬを見ると、神靈は飛下りて一撃を加へる。祿山は失神する。やがて覺めた祿山は、玄宗の世を奪はうと決心し、勅勘の身なる李白を招き、皇帝の周圍にある楊一家を亡ぼさうとする計劃を傳へると、李白も加勢を誓ふ。楊國忠を恨むもの皆集り、兵四十一萬に及ぶ。やがて楊國忠の軍は恐をなし、戦には勝つたといつて、玄宗が楊貴妃と共にのがれてゐる驢山に赴き、酒宴に列する。

安祿山の軍は長安に迫る。くわてき、しゆめい、ちんげんれい等が、敵が迫り來つたから落ちられよと、告げに來る。玄宗は驚き悲しんで貴妃と同車で落ちてゆく。

(道行) 「世の中は何にたとへん朝がほの露のまがきの花の末千代までもといはふ長安の……馬くわいが原にぞつき給ふ」。

そこへ李太白が近づき來り、安祿山の叛逆は楊國忠を失ふ事にあるからとて、玄宗の許を得て、高力士をして國忠の首を討落さしめ、更についで楊貴妃の首を貰ひ、御代泰平なりと叫ぶ。玄宗長安城へ還幸する。

五段目 其後しゝめい、くわてき、李太白三軍の粹を以て、さしもの安祿山を討破り、高力士ちんげんれいは安祿山を生捕つて、三將軍の前に引來る。

さて玄宗は楊貴妃を失ふて後は、そのことのみ思ひ煩うて病に臥す。偶々庭の橘の實の中より仙客一人忽然と現れ來り、りんかうの方士にて八千餘歳の仙人だが、「貴妃のみ魂のある所尋求めて相伴ひ思ひをはらせ申さん」と奏する。かくて帝の望によつて、鸞に乗つて空に上つて、隈なく貴妃の魂をたづねる。「爰に日本あつたの神そくさんの日の本を方士に見せじと海上にあらはし給ふほうらい山方士はるかに見つけ」蓬萊に近づき、袂の玉笛を吹いて樂に合せると、天女が一人立出て「かんでうに御座の時せいしぼさつの作らせ給ふ玉の笛、御身をはなたず持給ふ御笛にまぎれなしいかなる人の持來りうきねを我にきかすらん見て參れとの仰にて侍ふ也いか成人ぞ」といふ。やがて請じられて宮に入り、妃に遇ふて、今一度歸つて帝の惱を癒したまへとて、帝の送つた玉笛を渡すと、妃は紀念にと、簪を届けよといふ。方士強ひて歸國をすゝめ、たゞ今玄宗の形を見せるといつて「ほつす以ててい前のぼたんに向ひじゆもんをとなへふりまはせばふしぎやな忽に玄宗の御姿を結びしは見るにたへなる仙術也」。

やがて妃と玄宗の間に物語がある。方士が妃をつれゆかうとすると、「水からは元上かいに住仙女成がかりにやうかの子と生れ君と契りも深み草千代も替らぬ縁成しを君日の本に望をかけひたすら軍略有事を神國なれば神いかり、あら神此國に渡りつゝかく代を乱し君と我つきぬ契をさけ給ふ水から誠になつかしくはその御心をやめ給ひ御政道正しくおさめ給はゞ御代長久」と妃はいふ。方士は更に簪の代りに紀念を乞ふと、玄宗と祕に云ひかはした、誰もしらぬさゝめ事「天にあらは比翼の鳥地にあらば連理の枝と成るべしと申しあはせしかことをは」印に奏せよといつて別れ

る。方士は海上を菩薩の如く仙術によつて歸る。(繪を見ると方士が尋ね來て笛をふき龍首の舟にあり側に天女一人、その上に大真殿と額のある窓にきよくひが顔を出してゐる)。

六段目 「其後ぬい王は長安城を乗取しが、しゝめいくわてきに追をとされ、はんやうに身を忍び、時節を待ておはせしが官軍共を近附て思へはゞ口惜や玄宗を討ほるぼし」たいといつてゐる時、安祿山牢を破つてはせ來り、ぬい王を助けて野心を遂げようといふ。

そこへ右將軍しゝめいがせめて來る。直に大戰になつて、やがて安祿山が逃げる。高力士が追かけて斬つけると、洞から「血氣さつと立、内より神靈あらはれ給ひ、我は是大和たけの神靈也、玄宗ゆへなく我が國を望ゆへかくはからい代をみだす重ねても我朝に心をかけば中々にあんをんには立ましとの給ふみこへ諸共白雲に打乘て東の空に飛給ふ」。一同長安に歸る。「かくて日本のたいりには一の宮の神主あつたの宮の神官一度に參内仕、去ル年の御代參勅命によつていこくたいじことゆへなく日本せいひつになされたるよしみつけ有て則此一卷をけんすべき旨御たくせんにかかせ、參上いたし候と御前にさし上る時の關白いそき開き見給ふに長ごんかとめい有て、此度いこくの玄宗代をかたふけ給ひたることをしるせし文哥也、御門を初諸卿皆神めろをかんしつゝ夫よりも神主にはしゆんくの御ほうび下されて、あつた並に一の宮御さうゑいのみことのりけに給はれは徳正に天下太平目出度とてきせん上下おしなべて皆あふがぬものこそなかりけれ」。

【解説】 玄宗が日本を征服せんとしたといふ傳説を中心として、玄宗と楊貴妃の關係、安祿山の乱などを結び合せたものである。熱田の宮と楊貴妃との關係が如何にして起つたか、所謂垂跡説から出たとしても、『劍卷』にある新

羅王が熱田大明神の寶劍を盗ませんとしたといふ傳説などが其原かも知れぬ。尾崎久彌氏の研究によれば、熱田に楊貴妃廟の存在を記したのは、足利時代の萬里和尚著『梅花無盡藏』で、その中の詩「謁熱田楊貴妃廟」と、謠曲『楊貴妃』との間頃に此垂跡説が出来たものとされ、玄宗が日本を攻略せんとしたといふ妄説は、大永三年の「樋河上天淵記」に記されてゐると。尙、この點では『熱田大明神の御本地』（寛文五年）とも關係がある。

【原據】『長恨歌』及び謠曲『楊貴妃』によつたもので、寛文三年西澤太兵衛刊の『玄宗皇帝』内題「楊貴妃物語」とも關係がある。

○坂東安房国立山城攻

【體裁】帝國圖書館藏本。小形十六行十四丁。柱に「はんとう」奥に「大傳馬三丁目、屋板」とあつて屋號がけづられてゐる。

【挿繪】 兩面五あり、第一は「加茂のけい」の所で、「加茂の明神のしやたんより白羽の矢東へとぶ」とあり。第二は多田滿仲軍攻よせ、敵大將真正が城壁より見下ろす圖。第三は、はつせの前岩木を討つ所。第四は滿仲の前にて、修行者ひしや門になり、左丁には旗そろへの下に、滿仲の座がある。第五の左は、たこが舟にある一角坊をまく繪で、その右方に依藤太と真正が舟にゐる。

【太夫・刊年】 奥に「右此本者天下一土佐少掾橋之正勝直之以正本令板行者也」とある。従つて土佐少掾の語物であることは明かだが、刊記は削られてゐる。けれども「天下一」の字がまだ残つてゐるから貞享前のものであると思

はれる。

【形式・曲節付】 六段曲にて、首尾に形式句あり、曲節付は三重があるのみ。

初段「さても其後それ天はかるくすんでのほり地はおもくとつてくだる。かるがゆへに上じんをこのんでたつとければ下ぎを守つてつゝしむ爰をもつて君臣是にていして國家をたもつ、爰に仁王六十一代朱雀院の御宇に……」

【梗概】 初段 「せい和天王第六の王子さだすみ親王」御子經元の子を多田滿仲といふ。郎等に仲光と其弟仲正、うらべの友定、せきのや八郎忠常がゐる。

房州立山の城主平の判官貞正とて、將門の甥がゐる。郎等に長狭の六郎行ちか岩木の八郎國重、其他鬼が島の一角坊とか、大唐から渡つたふてんじやくなど飛行自在の曲者もゐる。又真正の思ひ人に、初瀬の前がゐるが、これは七條中納言道房の弟道村の女である。道村が安房につれて流されたのを真正が奪取つたのである。真正は逆心を抱き先づ滿仲を討たんとして、長狭の六郎をして、都に忍んで時を窺はせるが、容易に目的が達せず、六郎は乞食となつてねらつてゐる。

一日滿仲は加茂の競馬を見にゆく。ところが、三番目の競馬にて滿仲の愛馬千鳥は途中で走ることをやめて、騎手は落ちるといふ不思議があつたので、滿仲が歸宅すると、其途中で、怪しき乞食が斬つてかゝる。仲光は乞食と渡り合つて遂に之を殺す。

二段目 仲光は乞食が携へたる回文を手に入れ、滿仲に見せると、滿仲は直ちに兵三千を以て真正を攻める。立山城では滿仲が攻寄せるときいて、道村を城代に残し、自ら一萬餘の兵を以て鋸山に滿仲軍を迎へる。滿仲軍が關東

に進むと、渡邊黨を始めとして集るものが頗る多い。やがて鋸山にて雙方の烈しい戦がある。(寛文期の公平物と何の差もない)。

三段目 満仲軍も容易に攻落し得ぬと見ると、真正方では御臺や姫に盛装させて、陣中にて酒宴を催す。満仲は怒つて攻入らんとするが、諫められて、一旦陣を引いて再舉をはかる。後を追ふ敵を討つて隅田川まで引き、田原藤太に迎へられ、その言によつて彼の城、府中へ入る。かくと聞くと、真正は田原藤太の城を攻めようとするが、其時初瀬の前は進み出て、自ら遊女の姿に扮し、満仲に近づいて色仕掛けで討たうといふ。そして忍びの名人たる大力男岩木八郎國重一人をつれて出かける。

道行 「かゝるみだれのその中をいとなまめいたるそのすがた人のとがむる事も有、かたちをやつし行べしとやがてしやうぞくなされける、物もうでに事よせてうきふししげき竹のつゑすげの小がさをまぶかにめし……あさ草川を打わたり、むさしの國に入給ふ、はつせの前の心の中いたはしき共中々申ばかりはなかりけり」。

四段目 初瀬の前は田原藤太の城に近づき、城門にて番人に頼んで召使はれん事を求めるが、一切受つけぬ。そこへ田川庄司が出て来て、藤太に取次ぐと、藤太は満仲公のさびしさを慰める爲にとて初瀬をかゝへる。月の淋しき一夜、初瀬は満仲の室に近づき、都の者だとかき口説くが、満仲はさすがに大事の前の事とて容易に近づけぬ。けれども初瀬が道村の子として憐むべき境遇にある事を物語ると、満仲は遂に引入れる。初瀬は此時附添ひ來た岩木國重を近づけて、却つて彼を斬り、満仲の心に従ひ、後の美女御前を生むに至る。

五段目 立山城を預つてゐる道村は初瀬の前の事を聞いて心配してゐると、一日修行者が來て姫の文を届ける。早

く城をのがれて満仲軍に來れといふのである。乃ち道村は修行者の言にまかせて、小舟に乗つて逃出す。一角坊があとから追かけ、危くなつた時、道村が、「なむ日本の諸天善神救はせ給へ」と祈ると、日輪が舟のともにと下ると見え、老翁が現れ、團扇をもつて煽き、一角坊の舟を吹きもどし、道村の舟だけが無事品川につく。

満仲軍では乃ち軍勢をそろへ、道村と修行者の案内にて、海路を攻入る事とする。修行者が色々軍略を教へたと思ふと、多聞天の姿となつて消える。

六段目 さて大戦となつて風が荒れ出すと、田原藤太は龍宮に向つて加勢を乞ふ。と忽ち御へいが浮び上り、敵船に落ちて大章魚となり、一角坊にからみつく。藤太は敵將真正を海中に投込む。かけ上らんとする處を、初瀬の前と仲光が熊手にかける。藤太が其首を討つ。

【解説】 七條中納言の弟道村と其姫初瀬の前とが、安房に流されて、將門の甥真正に捕へられてゐる間に、真正は多田満仲を攻める。満仲は戦不利と見ると、退いて府中なる依藤太に頼る。之を見ると、初瀬の前は色仕掛けで満仲を滅さうといふので、従者一人をつれて依藤太の陣に入り、満仲に近づいて、却つて従者を斬つて満仲の室となり、依藤太と力を合せて、父を救ひ真正を滅すといふのである。

【原據】 結構上多少行き方はちがふが、寛文延寶頃に盛に行はれた『和國美人哥謔』即ち『小袖賣』の影響として生れたものと思はれる。又陣中の酒宴は『三浦北條軍法比』にまねたもので、天和貞享頃に女の武勇物が流行してゐるから、その一つに數へてよからう。尙普通の依藤太物とは縁が薄い。

○日蓮上人御一代記

【體裁】 舊南葵文庫藏、東京帝國大學藏寫本。傳へる所によれば、前島春三氏文庫にも同一の寫本所藏があると。表紙題簽に版元として「木下甚右衛門」と記す。六行六十一丁になつてゐるが、原本はもつと行數が多かつたかと思はれる。五段目に日蓮身延入の節事が、寄せ本の一部をぬいて入れてある。又青々園文庫にもある。

【太夫・刊年】 題簽に「土佐少掾」の字が書入れてあるのを信すべきも、刊年は不明である。

それから次の「書入の註」を見ても、本曲は土佐掾と虎之助と、六之允とが語つたものと思はれる。前島氏藏の寫本には、

此一卷者、享保十六年辛亥歲、日蓮大上人、被爲當百五十年御忌、同年十月、於土佐掾興行之、且法花行者、改文句等之誤、增補之也、依之於太夫元、殊令祕事云々、

と記されてゐるといふが、東大本にないのを見ると、何人かの後書であらう。そして百五十年御忌では日蓮の時代との隔りが多いので、それが果して何處まで信じ得べきか。かくて、享保十六年の上演物にしても、それは増補云々の句からも再演と思はれる。又同寫本に刊本がないと記されてゐる曲でも、所見刊本が數種もあるから、愈々同寫本の記述には信を置き難いのである。

【形式・曲節付】 六段曲にて、各段首尾に形式句があり、曲節付も大分ついてゐる。最初が「初段」とある。

初段「扱も其後、本地上行日蓮大菩薩の由來を委尋るに姓は三國氏……」

大序は寛文四年版『日蓮記』に近い。然し同様ではない。

【書入の註】 なほ三田村鳶魚氏の「土佐掾研究」（「歌舞伎研究」所載）によれば、前島春三氏藏の本曲寫本には、初段の日蓮が剃髮する所に、「此間に何グテツ坊ヤ、一子出家スレバ、キウゾク天ニ生ズト云、有ガタイ事デハナイカ」と記され、東條左衛門が堂供養に往く所には、「此間同音ニ題目ヲ唱」とあり、ついで説法の處には「間ヲ置テ談義吟、是ヨリ三味止ル」とあり、更に「同音ニ題目」と記した所が二ヶ所もあり、二段目には「亥十月十七日虎之助語ル、平日は六之允語ル」と記され、五段目身延の説法の處には、「七面ヲ虎之助、日蓮ヲ太夫語ル」とあるといふ。それが爲に、三田村氏は、土佐掾を日蓮宗の人と思はざるを得ないといはれてゐるが、それは明かでないにしても、以上の書入は、東大本にはないのを見ると、太夫か、稽古者か、適宜に註を入れたものと思はれる。

【梗概】 初段（第一とはない） 父は聖武帝の御末にて、ぬきな重忠といふ。重忠故あつて、安房國長狹郡東條の里、小湊に放たれ、漁夫となる。母は清原氏、常に朝日を念じ、或日日天胸を照すと見て孕む。貞應元年二月十六日誕生する。釋迦入滅から二千七百七十一年である。如來は二月十五日に涅槃に入り、日蓮は二月十六日に誕生。十二歳にて學問すべく清澄寺に入る。道善坊を師とし藥王丸と云ふ。

十八歳にて髪を下ろし、自ら日蓮といふ。三七日虚空藏に智慧を祈ると、六十の老翁が出て智を與へるといつて消える。即ち夜蔭に鎌倉に至り、淨土の法を學び、更に近江に入り、再び清澄寺に歸り、三十二歳の三月廿八日、「朝日に向つて合掌し、初て南無妙法蓮華經の七字を唱」へる。爾來法華の道を説くと、東條左衛門は日蓮の説法に服せず、機をねらつて彼を害せんとする。或時東條は日蓮を招いて説法せしめると、日蓮は法華經の由來を説き、法華經

の功德を述べて、最後に「佛を願ふ輩は尊むべきは法花經、敬ふべきは釋迦也、所謂法花經を信せずして爾前の經を尊み、有縁の釋迦をすて無縁の彌陀を頼む故、たとへ堂塔建立し、彌陀を安置申共阿鼻地獄に落つべし、只何事も南無妙法蓮華經の外は他事なし」といふと、東條景信は大に腹を立て切つてかゝらうとするが人々に止められる。

第二 やがて日蓮は鎌倉に至り、松葉谷に庵を結び、其後承久元年「駿河の國一切經の藏に入り、諸論の考へ、立正安國論と云本一卷を記し」、執權最明寺時頼に獻する。日蓮は天下を諫めること三度に及ぶが、これが其初度である。其頃鎌倉諸宗の僧は、日蓮をねたんで、時頼に訴へ、佛法障得の僧として所罰せよと求める。乃ち日蓮は伊豆の伊東に流される。八郎左衛門友高が預つてもてなす中、友高はいつか病んで危篤に陥るが、日蓮が祈ると忽ち本腹する。弘長三年十一月時頼が死んで時宗がつぎ、菩提の爲に流人を赦す事となり、日蓮は免されて鎌倉に歸る。其後日蓮は郷里に歸つて母を訪れると、母は此時丁度死んでゐる。日蓮が「我弘むる法花經、日本に流布すべくは、諸天善神只今母の一命を助させ給ひて親子の對面なさしめ給へと法華經を繰返し聲をはかりに讀誦有る」と、母は蘇生する。やがて日蓮が鎌倉に歸る時、東條は昔の怨を以て討たうとして、小松原に兵を伏せて討ち、日蓮の弟子十人と戦ふ。東條は遂に戦ひやぶれ、十羅刹女の責を受けて狂亂し、七日の間に血を吐いて死ぬ。

第三 文永八年日でり續きで民が苦しむので、極樂寺の良觀は雨を祈るが降らぬ。日蓮は乃ち之と力を比へて祈ると、壇上の龍魚雲に乗つて舞上り洪水とふる。良觀は怨んで又讒言する。相模守は、日蓮を擲取つて、龍の口にて斬れといふ。日蓮は人々に向つて「日比の望叶たり、此度かうべを刎られて、しゝそんじやの跡を汚し、名をは十方世界の諸佛の淨土に流さんと騒ぐけしき」はない。頼綱が故を尋ねると日蓮は「是は我國を重んじて申所の法問也、一

切の衆生らが、法花經をたのますして、無間地獄に落べきを、助けん爲の利益也、日蓮いやしめ給ふ共日本國の柱ぞや、我を殺さば日本の柱を倒すに似たるべし、……」と叫ぶ。頼綱は此惡口を憎んで、日蓮日朗等四人を土籠に押込め、やがて龍の口に送つて斬らしめる。さて太刀取が日蓮を斬らうとすると刀は折れる、鎌倉には星が落ちて「日蓮を過て失はゞ子孫を滅し、國土をも亡ぼさん」と叫ぶ。頼綱は驚いて日蓮を助けしめる。

第四 その後色々の不思議があつて、日蓮は死罪をゆるして、佐渡に流され、三年過ぐれば赦免といふことになる。日朗の歎の中に、十月十日に出發し、同廿一日に寺留から船を出し、佐渡へ急ぐ。海上海荒き時、日蓮舩に立つて自我偈を讀誦し、七字の題目を書いて流すと、赤衣青衣の二童子が現れて、漕げ／＼と叫び波は靜まる。舟がついて後、塚原の野中に捨てられて風雨にさらされてゐると、阿佛坊といふ大念佛者が來て、議論を戦はすが、論破されて受法し、夫婦で日蓮をいたはる。或時近所の惡僧共が集り、日蓮を罵つて改宗を迫り、却つて説法されて皆珠數を切つて受法した。

第五 文永十年二月八日、相模守も頼綱も、共に日蓮を許せといふ夢のお告を得て、日朗等を招いて赦免あり、日朗が日蓮を迎へにゆく。日蓮は鎌倉に歸りて相模守に對面するが、やがて鎌倉にゐることがいやになつて、身延山に入る。(こゝで此地方の景と彼の生活とが節事になつてゐる)。一日七面山の太蛇が十六七の少女となつて現れて、日蓮が此處に來て、法花經を讀誦し出して以來、山中に其聲みちて、鳥獸から蟬まで功德を蒙り、我が下知に従はず、その爲飢えてこまるから、山を去つて我を助け給へといふ。乃ち日蓮は、昔十羅刹女即ち鬼子母が人の子をとつて食ふ習を釋迦からやめさせられ、法花經の信者となつた長物語をして、太蛇を教化する。其處へ、はきいの中將が來て

女性が日蓮に侍してゐるに驚く時、少女は七つ胴の十丈の大蛇となつて、正體を見せる。

第六 その後大聖人は弘安五年に至るまで、九年の間身延に在つて、法花經を讀誦し、その秋武藏に下り池上に着く。やがて弟子を集めて形見分けをして、十月十三日辰の刻に遷化する。池上に葬り、ついで身延に遺骨を埋む。「誠に日蓮は上行菩薩の再誕、一大事の妙法を天下に廣め給ひけり、さんたんも人にこへ、末代濁世に現れて、衆生をすくひ給ひつゝ、佛果の縁となし給ふ」。

【解説】 日蓮の誕生から死までの一代記であつて、他の古淨瑠璃の日蓮傳記よりは、割合に順序よくまとめられてゐて、承應三年の曲よりは矛盾が少ない。

【原據】 承應三年の『日蓮記』とちがつて、これには蒙古襲來の事など、第五段の初にほんの少しくふれてあるだけである。されば承應の曲よりも、むしろ寛文四年の六段曲『日蓮記』を改作したといふべく、否それにほんの少しばかり手を入れたといつていゝもので、却つて寛文版の太夫が土佐少掾ではないかとまで疑はしめる位である。又延寶五年十一月の角太夫正本『鶴飼寺物語』とも大差ないものである。出處は『日蓮上人眞實傳』なるべく、謡曲『身延』『現在七面』等が参照されてゐる。

序に三田村氏の記述によると、前島本の卷末には「註畫讀大尾」とあり、(東大寫本にはその字がない)従つて同曲は、「蓮祖の註畫讀を其の儘に脚色したもののは云ふまでもない」とは三田村氏の説である。

【影響】 之に關しては拙著『古淨瑠璃の新研究——慶長寛文篇』、承應二年正月刊『にちれんき』及び寛文四年正月刊『日蓮記』の項に詳しく記した。

大峯の本地の正本

○大峯の本地

【體裁】 東京帝國大學舊圖書館藏本。額原退藏氏の調査によると、小形、繪入十七行本にて、奥に大傳馬三丁目ろこかたや新板とあつた。

【太夫・刊年】 太夫は不明ながら、奥に貞享二年丑の二月吉辰とあつた。

【形式】 額原氏の調では六段曲。その初行に

初段「さても其後それしつかにかんがみればりや……………」

とあつたから、各段に形式句があつたやうに思はれる。

【奥淨瑠璃本】 小倉博氏の所藏寫本中に、「お國淨瑠璃」として同名の曲がある。その初行を見ると、

「扱も其後それしつかにかんがみればりやう醫の百病……………」

とあるから、蓋し本曲と同一のやうに思はれる。即ち次に奥淨瑠璃によつて其筋を見る。

●大峯の本地（奥淨瑠璃）

【體裁】 小倉博氏藏寫本。従つて原本の體裁は明かでない。

【太夫・刊年】 共に不明。

【形式】 六段曲にて、各段首尾に形式句あり、四段目後半に道行がある。

【梗概】 初段 「扱も其後それしづかにかんが見るに、良醫の百病を治するも六けいによつてしり申せりやう薬ひとしからず、されば如來の御法をしへあまたにわかじ行事きによつてのほうべん也、爰に大和國葛城の郡大峯山の由來をくわしく尋るに、仁王四十代天武天王の御時」うばらの里に、右少將豊つぐとて、公卿がある。今年十七歳、博學の君子と尊まる。弟を月若丸とて二歳。去年父の右大辨刑部の少とよとみ卿が死んで、代々の後見たるとよらの爲次、嫡子平太爲秀、同平太爲つなが、陳平韓信の文武を以てかしづく。

豊次が人生の徒に過行くを思つてゐる一夜、七尺餘の大法師が現れ、「御身すでにかせうそんじやの再誕として、濟度方便のためかりに此秋つ洲に出生し給ふ、されは我欲界の有様を見るに、しんよく罪障の雲蔽つて眞如の月明かならず、煩惱は所をせき菩提は千里の外に隠る、みなくわいもふして佛といふ事をしらす、法をないがしろには何ぞ、此時りやくし給はずせいくわん空しからん、早忽思立給ふべし、我は是不動明王なるが……佛法守護の其爲に是迄まいり候也……」とて、虚空を招けば、こんがらせい高の二童子が下り、老僧雲に入るかと見ると、忽ち不動明王となり、上天する。

豊次は文を認めると、其儘母に遺書をして出立ち、吉野の奥へ入る。

翌朝爲次が遺書を見て、母に上ると、「我はかせう尊者の再誕、衆生を利益せんが爲假りに御腹をかり」た。……「人々の後生ぼたい御心安」かれと記し、「法に入道のほだしとなるものはうき世に残る心なりけり」と一首をそへてある。母が恨歎くと「一子出家すれば十族天に生ずと」いつて、爲次は目出度いと語り、月若を世に立たすべきを誓ふ。

二段目 「其後右少將豊次は役氏をかた取ゑんの正かくと御名をかへ」給ふ。小角白鳳九年卯月初吉野山に入つて見ると、遙の谷より螢數千飛來り、眼前を照らす。更に奥深く分け入り、明けゆく空を眺めて休む時、童子が一人來て、入山の故を問ふ。「我は阿字本不生の深より即身即佛の峯に上て不二の月を觀するなり」と答へると、童子は頭を下げて「我は此上にすむさ王權現」にて、道しるべに來たといつてやたの地藏の錫杖を捧げて消える。小角又難所に遇ふ。ふと百丈の大蛇が現れ、小角をのせて向岸につく。更に山深き所に大なる岩やがあつて、金色の光を放つ。小角は此處を住所と定める。

其頃葛城山に鬼神有り、第六天の魔王の心を一にして、日本の天狗共を語らひ、帝都を傾けんとして意を得ぬ中に、小角が岩屋に入ると知り、先づ之を討たうとして押寄せ。と不動明王こんがらせい高が現れ、利劔をもつて外道を苦しめ引縛つて去る。外道は乃ち小角に降參する。

三段目 「其後役の正角は葛城山にとちこもり、木の葉をあつめ衣とし、せうゑん木の實を食となし、難行苦行限りなく、廿四年の星霜をへて、ついにみつじやりとくこしてあちの大ぐうを仰ぎ、くわうせうを見通力自在の御身

とならせ給ふ」。ある時行者は金峯山へゆく。山は葛城から遠くないが、人間の通ふべきたよりなく、乃ち山神に橋をつくらせ急ぎ渡る。

その頃又葛城下の郡に、あたきの源内定くまといふ惡逆無道の倭人がゐる。彼は或時葛城山に来て、一言主の神が役小角の爲に縛られておはすのを見ると、都に奏上して、役小角が謀叛すると讒して討伐の勅を給はり、先づ手段として、小角の母と弟月若丸——今ゑもんの介とよ久と云ふを縛り、小角の心を動かさうとする。そして源内は大和のうはらを攻め、小角の母を捕へると、豊久は已むなく我から敵に捕はれる。

四段目 源内は二人をからめ取、悦んで参内し、賞を給はる。二人は牢舎に入れられる。

役行者は「國家安全の法を行ひもうあくぶせんの衆生を利益せんと晝夜是にかんしんを碎く」中に、叛逆の名を受け、母と弟が投獄されたことを歎き、前鬼後鬼に語ると、鬼共は日本六十餘州の天狗、三千世界の外道を集めて、都を襲ひ、奪返さうといふが、小角は之に對して「我れ法力をばげみなば天下をくつがへさんも易かるべし、去ながら天地に四つの恩有、第一國王の恩、二つに法の恩、三つには父母の恩、四つには衆生の恩是也、我ていとに有ながらいかで王命をそむくべき、一旦命に従つて重て本意を達すべし」といつて、捕はれて罪を受くべく、鬼共に惡心を起すなといつて、都に出る。

小角は直に参内して罪を謝し、伊豆大島に流される。——「京九重のていとを出歸洛をいつと松坂や、すへ白川のおもにかすよりも……（東下りの道行文）……下田の浦を打過ぎて雲井を出てけふははや廿三日と申にはなにあふ島にぞ着給ふ。」

五段目 役行者は大島にあつて、世の様を見ると、倭人世を擅にし、不快至極である。乃ちかゝる地に空しく過すことの淺ましきを歎いてゐると、一人の女が龜に乗つて波間を來る。聞くと下界に住む者なるが、行者を如來の來迎と思ひ、身を浮めん爲に來たといふ。小角が呪文をとなへると、龍女はお經の功力により、成佛得道の身となり、八大龍王が現れ、八りん曲を奏して海上に舞ひ遊ぶ。

大ほう三年如月末、櫻の雪といふ難題にて、都には歌合がある。折ふし空中に惡鬼二人現れ、源内定熊を引さいて消うせる。ついで星一つ下り、中より童子現れ、役小角が衆生濟度の爲に來れるに、咎なくして讒者の爲に漂泊の身となり、母弟まで投獄の身となる事天命も恐ろしいといふ。直に勅命あつて母子は許され、豊久は三位の中將に任せられる。

役行者は通力自在の事とて、急ぎ都に上る中、小夜の中山にて山賊強盜を見つけ怒ると、彼等の太刀はだん／＼に折れ五體がすくむ。かうして行者は盜賊等を恐れしめ、説法して惡事をやめさせる。

役行者を勅命によつて迎へに行つた六位の安元は、草津の宿にて行者に遇つて驚いて連れ歸る。行者は直に大和に至つて、母と弟に久し振りに遇つて喜ぶ。

六段目 「其後役行者は國々修行なされつゝ、法を説き奇特を見せ、無縁の衆生を悉く結縁」し、又大峯に立歸る。

ある秋弟子達が太峯へ集る、行者は葛城山へのぼる山伏達に向つて……「およそ山伏といつは形は不動明王のそん容をかた取なり……煩惱は是菩提也生死は即ちねはんなり、……」と説法して山へ導き、やがて一人の山伏が、遠州

大とく庵にて嘲弄せられた話をきいて、前鬼後鬼をして、見る／＼その庵の鐘をとつて來させる。「とにもかくにもゑんのうばそくの御法力末世の奇特是なりけり千秋萬世國家長久の御たのしみ目出たし共中々貴賤上下おしなべて皆仰がぬものこそなかりけり」

【解説】 要するに役行者の生立であり、生活記録であり傳記である。其間に超人的な奇怪が頗る多量に編込まれてゐるが、最も我等の注意を引くのは、彼が孝心の厚いことよりも、彼が國家安全の法を行ひ衆生を利益せんことを勞しつゝあるに係らず、悪者に嫉妬されて、母と弟とを縛られたのを歎く折柄、奪還をすゝめられると、「天地に四つの恩有り、第一國王の恩、二つに法の恩、三つには父母の恩、四つには衆生の恩是也、我帝都にありながらいかで王命をそむくべき」といつて、例へ我に罪なしといへども王命に逆ふことの畏多いことを述べて、母と弟の奪還に反對してゐることである。眞に皇室に對する崇尊の念厚きものでなくして、どうして此言が出ようぞ。

思ふに詞章やその技巧や、色々の點から、奥淨瑠璃の本曲は、貞享二年の東大舊藏本と同一と見てよからう。

【出處・原據】 役行者に關することは、『續日本記』『本朝列仙傳』『古今著聞集』『日本靈異記』『扶桑略記』『元享釋書』等にも出てゐる。殊に大峯山に於ける僧の生活は『元享釋書』卷第二十九の末項「大峯比丘」の條及び同書卷第十五の「役小角」の條に載つてゐる。之等に據つた所が多い。

井上播磨の語物中に『役行者』があることは、其段物集『忍四季揃』中に「役行者花賣の四季」があるによつて明かであるが、これがそれと同物でないことは、本曲中に、その段がないことで察せられる。そしてともと本曲が大和掾の曲にもとづいてはゐるにしても、播磨の語物を未見なるが爲に關係は不明である。

【影響】 之が後の元祿頃の伊藤出羽掾正本山本河内掾作『役行者傳記』や、寶曆元年十月竹本座上演の『役行者大峯櫻』などを生み出してゐる。

尤も寶曆元年の『役行者大峯櫻』は、その前の寛延二年刊の『ゑんの行者』に多く負うてをり、それがまた黒本『大峯物語』を生んで、又十返舎一九の『大峯山陀羅助始』などに多少の關係をもつてゐるのであらう。

義經記

【體裁】 東京帝國大學圖書館藏本。半紙形十七行、初卷及六之卷十五丁半、二之卷十五丁、三及七之卷各十六丁、四及五之卷各十四丁にて七之卷まであり、挿繪は兩面六あるが多く、四卷と七卷には五ある、各卷の奥に「大傳馬三町目うろこがたや新板」と記す。京都帝大寄託古梓堂文庫藏本も同版である。

【太夫・刊年】 これには元祿二己巳年正月吉日と奥に記されてゐる。此曲は土佐少掾の語本と傳へられ、又此正本にも後人の筆にて、さう記されてゐるが、最初からその刷込まれてゐるものを見ず。今日見るものは大抵元祿二年の此版で、萬治三年の上方版もあるといふが未だ見ぬ。

【形式・曲節付】各巻六段づゝに分たれ、各段首尾には形式句がある。曲節付のあるものもあるときくが、此正本には曲節付はない。

『義経記』からとつたものにて、試に初巻の文を少しづゝあけて見ると、

初巻首「さても其後人民たかぶるときんばがいし、うては之をせいすとは五うんりつはせうふくの道也。ま事に天うんしゆんくわんしてゆくとしてかへらすと云事なしかるかゆへにふきにいわくかうれうくひ有、みてる時はひさしかるべからず。しんだいそんほうをしつたゞしきなうしなはるはひとりせい人か。爰に仁王七十八代二條のいんの御ちせの御時くわんむ天皇のべうふいださい大貳清もりとてゐたいかうけの名將有、さてちやくしには左衛門の介しけもり……」

二段目「其後いたばしやよし平はかげすみに近付て此由かくとかたり給ひ泪をながしおはします六郎此由承げに御どうりしごくせり……」

三段目「去程になんばの次郎つれとをばあく源太のくびを取六原さしてぞかへりける六原になりしかば此由かくと申上る清盛は聞召……」

四段目「去程にきよもりの御まへにはなんばの次郎をめされて……」

五段目「其後されば人の心をまとはす事しきよくにしくはなし日比は清もりもときはをさがし出なば火にも水にもなしなんと心をつよく思われけるが、ときはな一め見るよりもいられる心もよばくと命をたすけるのみならず七條しゆしやかにすへ置てわきてさいあひせられけり……」

更に轉じて七之巻を見ると

七之巻首「さても其後それ君はぎ有しんはおこなひ父は子をいつくしみ子はおやにかうをつくしあには弟をあいしおと、はあにをうやまふいわゆる六じゆん是也しかるにじゆんをすてぎやくにならふはわざはひをまねく故也爰にかまくらのさきの右兵衛の介よりともばからうしうその外八か國の御家人共をめしあつめ頼朝仰ける様はいかにかたかた聞給へ誠によしつれがむほんにおいてうたがふ所なき間いそぎうつてをつかふべし去ながら一大事に思ふゆへ……よしつれを大將にてやすひら兄弟一身の上は五十れん三十年せめたゝかふといふ共人のみそんする斗にてせめおとすことかたかるべし……」

七之巻六段め「去程にしきとやす平兄弟はたかだちを打ほろほし頼てぎけいの御くびをかまくらのへぞおくりける……」

七之巻終「……願くは梶原父子がからうべをはねよしつれにたむけられは今生後生のうらみ有べからずばんたんひつしにつくしがたし文治五年閏四月廿八日ひやうへのすけ殿源の義経判とそよまれける……衣川のほとりにしんぞうにやしろをたてしん八まんとあがめおなしくうちじにのさむらい武藏坊辨慶鈴木龜井をさきとして以上九人の人々をもまつしやのしんといわひつゝ四月廿八日には……かくて梶原父子共よしつれの御たむけについに御ついはずとぞきこへけるなをく源氏の御ふいゆう、せんしうばんざいまいらくめでたしともなかく申ばかりはなかりけれ」



（藏大帝京東） 卷之五 「記 經 義」

浄瑠璃の演出

一

今日の一般の人々の中には、浄瑠璃といへば、直ぐに義太夫節を思ひ、義太夫節前に於ける浄瑠璃の存在すら知らず、下つては豊後節系統の浄瑠璃などは之を浄瑠璃だと思はぬものが少くない。よし思つても、全然別のものだと思ひ、義太夫節の浄瑠璃以外に、浄瑠璃のあることを忘れてゐたり、氣がつかなくなつたりする人が餘りに多いやうである。それほどまでに義太夫節の浄瑠璃といふものは、一般人の頭の中へ久しく浸み込んでゐるのであるが、此義太夫節の浄瑠璃も、時勢の變化とか、嗜好の推移とか、新作の絶無とか、他の藝術の侵入とか、經濟上の關係とか、其他様々の影響を受けて、段々衰微に傾きつゝあり、現状の儘で推移して行つたら、其前途が如何なるものであらうかは、他の系統の浄瑠璃が立派に之を暗示してゐると思ふ。

ところが此義太夫節の浄瑠璃は色々の點から見ても、世界に類例のない發達を遂げた、最も素晴らしい日本獨特の藝術の一つである。いつまでも之を保存して置きたい、又之を保存する價值のある藝術である。けれども、どうしたら之を保存して置くことが出来るであらうかと、如何にせば之を昔のやうに再び發展させることが出来るだらうかといふことは、今私の云はうとすることではない。少くとも時勢と角力をとる事は、私の夢想だもし得ることでないから

である。けれども此藝術に嗜好と關心とをもち、研究を續けてゐる私にも、専門家諸氏に取つて貰ひたい希望がないでもない。よしそれが燈火滅せんとする前の藻掻きに等しい試みに過ぎないにしても、今日殊更に考慮を煩はさいではゐられないことが澤山ある。今先づ演出上の一二の點について述べて見たい。

二

第一には出し物の點である。今日の浄瑠璃の出し物といへば、文樂でも素浄瑠璃會でも、ラヂオの放送でも、大體に固定し切つてゐるやうである。大抵十種か二十種か多くても三十種五十種を出ることは殆んどないであらう。而も單に浄瑠璃劇としてでなく、最も優れた最も本質的な操浄瑠璃の味の點から、私の最も尊重してゐる近松物の如きは、「重の井」以外には殆んど上演されない。今日上演される「夕霧」にしても「梅忠」にしても、皆改作物である。それでも「吉田屋」や、「新口村」などはまだくゝいゝ方である。所謂「河庄」や「炬燵」が、近松の「天網島」のやうな顔をして上演されるに至つては、話にならぬ。かの「時雨の炬燵」の如きは、節付の點からは兎も角、文學としても劇としても、悪作悪作の代表的なものである。

あれが近松の作と思はれてゐようが、ゐまいが、そんなことは別としても、あんな悪作悪作が、いつまでも浄瑠璃として語られ、歌舞伎として上演されてゐるといふことは、可笑しいよりも、嘆かましいよりも、呪ふべき事である。

今日は昔とちがつて、様々の點から人間の眼があいて來た時代である。只眼をつぶつて眠つてゐて耳だけ樂ませて

満足してゐるといふことは出来なくなつた時代である。只徒らに大衆の機嫌をのみとるといふことは宜しくない時代である。成程淨瑠璃の淨瑠璃として起つた所以は、それが貴族藝術に反抗して、大衆平民の爲といふことであつた。そこに淨瑠璃の貴い所があり、義太夫も近松も、大衆平民を對象とした處に、この藝術の意義があり、長所もあり、又それが當然でもあつた。けれども近松は、單に大衆の機嫌のみをとらなかつた。表面は空とぼけてゐながら、其實は高い立場に立つて、寧ろ大衆を導き大衆を教育し教化する一面には、頭のある人をも慰ましめようとした。それは彼の文章を見ても直ぐにうなづけることである。そこに彼の淨瑠璃に文學的價値が豊富であり、少數學徒の賞讃をも博した所以があり、彼の藝術の永遠に生命をもつてゐる所以もあるのである。

三

由來大衆は尊ぶべきであり、殊に劇藝術の發展と意義との上には、最も大切な對象でもあるのであるが、彼等は何にでも飛びつくが、何にでもすぐに飽いて來るのである。善いから好くのもなく、悪いから厭ふのでもない。彼等の好悪には何等の深い根據もない。彼等は只渡鳥の如きものであり、群魚の如きものである。一匹が動くといふだけで動くのである。ジャズが來れば直ぐにジャズに走る。直ぐに飽いて來る。歌謡曲が出來ると、すぐにそれに走るが、直ぐに又飽いて來る。最初から品物の本質的な良否などは問題にせず、只變化を求めて駆けずり廻るのである。少數の熱情的翫賞家や學徒は、そこへ來ると頗る趣を異にし、善いものでなければ決して之を取上げぬ。大衆の議論や意見なんかは問題にしない。大衆の嗜好のみに耳を寄せたり、そのみを標準にしたりするやうなことは決してない。

淨瑠璃の専門家は、所謂通人の言などには耳を寄せないで、少しはかういふことをも眼中に置いて、出し物を選択してはどうであらう。食はんが爲とか興行上からは、勿論大衆を相手にする必要があらうが、時には最も優れた淨瑠璃作者の傑作の一つや二つは、東京に於ても折々の出し物の中へ加へて、せめて、之を原作通りに上演することを考へて貰ひたいと思ふ。つまり職業とか人氣とか、商賣とかを考へる一面に、自分達が高貴なる藝術家であるといふ自尊心をもつて大衆に對し、大衆にも高貴なる藝術を知らしめて貰ひたいものである。藝人であるといふ以上に、藝術家であり、藝術の演技者であり、美の創造者であることを自覺し自信して、その能力を發揮して貰ひたいものである。そしてそれにはまたそれだけに自分の頭も進めて貰はねばならぬ。單に節廻しの點とか、含まれた意味の表現とかいふやうな點のみを見て、淨曲の善惡高下を判断するだけでは駄目である。音曲家としても文藝家としても、一人前の頭をもち、もたうとすることに努力しなければ駄目である。只人氣のみを考へたり食ふ事のみを考へたのでは、駄目である。何はさておいても食はねばならぬ、専ら食はんが爲の職業であるとのみ考へるのは、藝術家の墮落である。そんなことでは食ふことさへろく／＼出來ない筈である。近頃經濟觀念が大分變つて來て、藝術を雲の上のこととするのは間違だ、藝術家だとして食はねばならぬといふ考へが強くなつて來たが、一體で日本といふ國は、外國ほど藝術を尊重しない國である。日本では學者や藝術家はろく／＼食へないのが本當だ。餘りに食ふことのみを考へないで、

も少し立派な藝術家としての態度と魂とを、出し物の上にも見せて欲しいものである。それが淨瑠璃といふ古典藝術の保存上には、今日殊に重要な問題の一つであると思ふ。かくしてこそ淨瑠璃を謡曲の如く、もつと善い意味に普遍化することも出来、淨瑠璃の生命をもつと長からしめることも出来る方法であると信ずる。

私が淨瑠璃の専門家に望む所の第一の點は、彼等が藝人であるといふ以上に、眞の意味の藝術家であるといふ自信と態度とを以て、大衆に對すべく、先づ淨瑠璃そのものに對する頭をつくり、優れた古典を出し物に選ぶことをも忘れないでほしいといふことである。

四

第二の點は、淨瑠璃の本質を理解して人形附で演出するといふことである。

淨瑠璃の本質とは、いふまでもなく、それが人形劇として發達した事である。勿論、淨瑠璃の最初は、單なる語り物として起り、只夢幻味、浪漫味に充ちたものであつたが、人形を取入れて、漸くそれに寫實味が加へられることによつて、夢幻味と象徴味と寫實味との融合した、優れた淨瑠璃が近松によりて生み出され、それが竹本義太夫と三味線彈竹澤權右衛門と、人形遣辰松八郎兵衛とによつて演出されて、素晴らしい藝術となつた。この時代の淨瑠璃は寫實味よりも、浪漫味の方がまだ多量であつた。

音楽としても、人形の立場から見ても、よし多量でなくても、せめては浪漫味が兩々相半ばするか、少くとも四分はあつたやうに思はれる。やがて、二世義太夫により、人形遣吉田文三郎によつて、一層寫實味を増して、歌舞伎化

され、近松の死後に於ては、この傾向が更に著しくなり、所謂、淨瑠璃の全盛時代が來たのであるが、要するに近松以後の淨瑠璃は、非常に歌舞伎化された淨瑠璃である。むしろ、歌舞伎に征服され、殆んど歌舞伎同様になり、遂に歌舞伎のために亡ぼされて來たのであるが、それには、種々の原因が數へられるにしても、淨瑠璃の叙事的歌謡的浪漫味が減じて、著しく寫實味が増加したといふことが其主因の一つでなければならぬ。勿論この場合の寫實化といふことの意味の一つには、淨瑠璃が、其表現上人形を遠ざかり、人間に近づくといふことをも考へなければならぬ。かくして淨瑠璃の語り方に於てさへ、東西の差別が現はれるに到つた。江戸の淨瑠璃は表現上寫實味よりも浪漫味歌謡味を重んじた傾向に發達したが、京阪のは一層寫實味を加へて行つて、寫實的表現に重きを置いたものとなつた。かくして文樂の淨瑠璃も、さうだが、文樂の人形も、今日では殊に寫實味が勝つてゐるやうである。だから近松の淨瑠璃のやうな、寫實味の割合に少い、浪漫味の多い淨瑠璃は、演出するに六ヶ敷いといふことを、今の太夫もいひ、人形遣も言つてゐる。

だが、淨瑠璃は、歌舞伎とはちがつて、歌舞伎より一層浪漫味歌謡味の多いのが本當である。これを今一度考へ直す必要はないであらうか。之れを考へ直せば、近松の淨瑠璃の味が分り、淨瑠璃としての價値が分るのである。古典の貴さが分るのである。單に戲曲的、劇的價値のみを問題にする時に、淨瑠璃は淨瑠璃を遠ざかつて歌舞伎になつてしまふことが分つて來るのである。

五

と同時に、淨瑠璃が淨瑠璃として存在し、其價値を全うするには、どうしても人形が伴はねばならぬことが分つて来るのである。素淨瑠璃は淨瑠璃の變態であることが益々明かに分つて来るのである。即ち淨瑠璃を本當の淨瑠璃たらしめるには、出来るならば人形を附加へての演出が最も意義ある演出となるのである。といつて、凡ての場合に、必ずしも文樂のやうな、寫實味の勝つた人形が必要とはいはぬ。あゝいふ人形の寫實的傳統的表現を巧にするには、相當の年月と腕とを要すると共に、愈々職業的意義を濃厚ならしめる。淨瑠璃界の今日の觀客範圍を顧る時に、興行上それは問題にならぬといふ聲が飛出すであらう。文樂にでさへが、人形遣擁護運動が起らなければならぬ時代であるに、素淨瑠璃に人形の附隨を考慮することは、望ましいことではあつても、實際は天に上るよりも六ヶ敷いことだといふものがあらう。そこに文樂の人形遣桐竹門造氏が、苦心に苦心を重ねて、漸くに女の子の一人遣の人形を案出した所以と意義とがあるのではなからうか。あんな女の子の、幼稚な一人遣を相手にして、淨瑠璃が語れるかなどいつてはいけない。私は寧ろ、あゝした人形の遣ひ方の浪漫味が、却つて淨瑠璃の本質に適してゐる處もあるやうにさへ思つてゐる。寫實本位、技巧本位の人形よりも存外面白い處があることを、私は「女文樂」とか呼ばれた門造氏發明の一人遣に認めて非常に喜んだのであつた。

それにしてもあの「女文樂」なる人形は其後どうなつたであらう。少くとも義太夫節以外の淨瑠璃として、既に滅亡に傾してゐるものが、あれを取入れることによつて、餘命を保つ方法を講ずることは、最も策の得たものではなからうかを、私は昔で「女文樂」を淺草に見た時に提案したのであつたが、誰しもあの人形の操り方を馬鹿にしてゐるのは惜しいことである。

六

今一つ私の特に演出上の問題にしたいのは、音樂としての注意である。竹本義太夫が偉かつた一點も此處にあるのであるが、それは太夫としての音聲の大きさといふ事である。美しい音聲でなければならぬのはいふまでもないが、昔の演技場と、今日の演技場とは、大きさが異なることを忘れてはならぬ。文樂のやうな専門の演技場は、到る處に望み得ることではない。せいゝで、四五百人位しか入場者を容れ得なかつただらう昔の演技場に比べて、今日では倍も四五倍も容れるところで演出しなければならぬことが、屢々あるやうである。かうした場合に於て、太夫たるものは、おれの藝術を全聽衆に快く味はせてやらうといふ程の自信と用意とがなければならぬ。いくら普通の太夫と、チヨボとの社會的地位が異なるにしても、チヨボだとして、何を語つてゐるのか分らぬやうな、語り方をしたので、演技者としての資格のないは勿論、淨瑠璃そのものを恥かしめることが、甚しいと思ふ。

これに次いで問題にすべきは、三味線彈の藝術的觀念である。太夫が語つてゐる場面々々について、もつと藝術心を働かせることが必要である。何んでも勢ひに任せ、腕に任かせて、只弾きさへすればといふのが、三味線彈の態度に少なくない。太夫の音聲を殺すほどなら、弾くよりも弾かない方が、すつとよい場合が澤山ある。甚だしい例は、淨瑠璃劇が歌舞伎に演ぜられてゐる場合に、俳優が臺詞をいつてゐる間に、糸を矢鱈にチャン／＼とあしらつてゐる者がある。弾いてゐる方では何とも思はなくとも、聴いてゐる方では、非常に邪魔になるのである。弾きただけで、軽い爪弾きかなんかで弾いたら、どれだけか場面にふさはしからうと思ふのに、まるで藝術も何も分らぬかのや

うに、夢中で弾いてゐる人がかなりある。さうしたことは、素淨瑠璃の場合でも、時々見受けるやうである。あれは皆自分の事だけを考へて、淨瑠璃といふものが、綜合藝術であることを忘れてゐる爲めである。忘れてゐなくても、自分のみが一生懸命になりきるからである。

自分だけが一生懸命になり過ぎる例は、文樂の太夫にも、屢々見る處である。人形なんか無視して自分だけで語つてゐるのである。三味線の場合にはそれが更に甚だしい。三味線彈のウン／＼といふ懸聲の多くはそれである。元來が勢をつけるための懸聲を、甚だしいのになると、殆んど三味線の一音毎に出すものさへある。音楽上から言へば、雜音であるあの懸聲が、不快を覚えしめること甚しいものがあるに、それを心得て居ない人が澤山ある。心得てはゐるだらうが、今日では惡習となつてしまつて、覺えず知らずやるらしい人が、随分ゑらい文樂の三味線にもちよいちよいある。

西洋音楽などでは、咳一つの雜音さへ許されない。いな演技者どころか、見物席の咳一つさへが、唾棄され、呪咀されてゐるのである。日本音楽だとして、それを而も演技者に許してゐるのは、悪い習慣に過ぎないのである。淨瑠璃が浪漫味と寫實味との融合でなければならぬからには、音楽的表現にも、十分頭を働かすべきだらうと思ふ。

これらは今日殊に淨瑠璃の演出上、表現上に對する、私の希望であり、意見である。決して他人を傷け、他人を打たんがためにいふのではない。だから、私の意見に反對する人があつても、それは意見の相違である。従つて反對の意見をもつた人が、私を鞭つたとしても、私は之に對して打返すやうなことは斷じてしない。喧嘩は絶対に私の性に合はぬ。私は只一個の學徒であり、研究家であり、紳士である。(昭和九年十二月淨瑠璃時報發表)

江戸土佐淨瑠璃解題

(一三)

○遊女源平全盛競

【體裁】 古鞆文庫藏本。帝國圖書館にもある。内題は唯「全盛競」とのみあり、卷末には上の如くある。前附があつて木下甚右衛門刊であることが知られる。半紙形八行五十丁。不思議に本書は丁附と實丁とが符合し、他の諸曲の數丁を異にするのと比べて珍らしいことである。柱に「全盛」とある。

【太夫・刊年】 前附に土佐少掾橋正勝の字があり、寶永五戊子初秋上旬の刊記も見える。

【形式・曲節付】 六段曲。各段首尾に形式句がある。

第一「扱も其後四かい波うごかね國秋津すのめぐみのどけき日陰こそげに日の本のしるしなれ。爰にそがかいの大匠の子、い
るかと申は……」

第三段に姫兄妹の道行、第四段に遊女の色軍の勢揃、第五段に遊女の全盛踊の節事がある。

曲節付中、珍らしいものは、

三ツユリ、サイツメ、クリムスビ、二上リギン、馬方フシ、ムメノ節、シクレフシ、アイノテ、セツユリ、

近江ウツリ、琴ギン、ホウカソウ、相ノ山、虎ヤカ、リ、人ヨセ地、諷ヤツシ、虎ヤキン、上方フシ、花笠フシ、キリ山、拍子ノリ、リウクワ、三ツ引

姉^{ニヤリ}ごをよらはおこしたもれ石があるぞいのなんぼ坂でも、こちさ落ちはなんつかしの戀^{アイシテ}、城^{アイシテ}の小性衆ははせ寺^{ムメノフシ}まいりこしも、つらせず、車もいらす、くつの召かへ二十五足^{シクレフシ}、我^{シクレフシ}はくるしきわらんすの……大路^{オトギン}や、初瀬^{コトギン}の寺にそつきたまふ。(第三段姫兄妹の道行)

とかく^{キリ山}ゑんゆへ引れてこゝに來る町々、用心^{ハナカサフシ}きびし(五段の踊)

【梗概】第一 蘇我入鹿は舒明天皇崩御の後、逆心を起し、りとう、りくどうといふ二人の魔術の沙門をして、志度浦にて、外道の法を修せしめる。其時面向不背の玉を海底にさぐらされて、死んだ娘の父と、干珠満珠の二名玉の爲に敗れた唐帝の臣たるやそらといふ方士とに出遇つて、入鹿は共に手下とし、鎌足を失はんと圖る。

都では皇極天皇が御即位あり、興福寺に納めた面向不背の玉を叡覽あらんとの事で、取寄せて房さきの中納言が守護してゐると、異形が來つて奪取つて去らうとする。房前は死力を盡して之を奪還す。

翌春即位式を行はせられ、天皇が不背の玉を叡覽遊ばされた時、入鹿は願ふて、自分の師りとうにも拜することを許されると、やがてりとうは玉を拜して後、「是は眞珠にて細工して釋迦の像をえがきたり、日本無双の名玉とは申がたし」と難する。そして名玉か眞珠かは、冷水にて洗ふとわかると云ひ出し、洗つて見よとの勅命に従ふと、「ふしぎや光明かけ失て、水はにこり名玉は眞珠の玉とな」る。鎌足は自分の運命は是迄と自害せんとする時、「二度名玉を尋出して日本の寶とせよ」との繪言に、鎌足が謹んでゐると、入鹿は鎌足が眞の名玉を尋出すまで、大織冠の官

名を自分が預るといふ。其時鎌足の後見山上源内は飛立つて、これ「天下を掠めとらん」企だといつて、沙門りとうを調べるといふが、入鹿が制し諸卿か引分ける。

第二 入鹿は沙門りとう、りくどう、唐のやそら及び海女の父庄司を近づけ、企がうまくはこび、鎌足が名玉さがしに出れば、留守にはわが逆心成就疑ないと喜ぶ。そしてやそらは此度手に入つた不背の玉をもつて唐へ歸り、代りに數萬の軍を日本へ送れ、之を以て逆心を成功するといふ。又りくどうには、鎌足が館を出た後、房前山上の二人を魔法をもつて討てといふ。

鎌足が色々と手筈を定めて出てゆくと、其後で、床の懸繪が動いて、一疋の鬼が飛出す。山上源内が怪しんで、今一つの繪の鬼を切ると、それはりくどうであつた。其夜鎌足が密に忍び出たのは、王位をかすめる所爲だから、鎌足の官を奪ひ、家を召上げよと、入鹿に勅命があつたといつて、りとうが大將となつて鎌足の館を攻める。戦の後に源内の妻白菊は房前と妹姫をつれて大和に落ち、源内は若君自害とさけび、家に火をかけて逃げる。

第三 房前とその妹香白女及び白菊の三人は、「黒木めせく、黒木めさぬか、おちこち人よ花を折そ、黒木となしてやせやおはらのしづのめにやつす姿もしほらしや……」と黒木賣となつて、初瀬の寺につく(こゝに道行)。扱開帳のあるはせ寺について三人は一夜をあかすと、夜半に觀音は枕上に立つて、「身をふかくかくす草木も色丸山里に住なは玉や出なん」といふ歌を残して消えたといふので、白菊が之を判じて、長崎丸山の色里に遊女としてすまば尋ぬる名玉も出るといふので、明方に房前一人を残して二女は出てゆく。やがて房前が目をさますと、そこに休んでゐた島原の名女郎夕霧はなつかしと思ふ房前を見て、言葉をかはし、二女の後を追かけんとする房前を引とめ、過し春

東山の花見に見そめてより忘れかぬる爲、此處に通夜をして縁を求めると語り、命をかけて遂に口説き落し、共に二女の後を追かけて長崎まで下る事にし、一先づ都島原の夕霧の家へゆく。

房前は夕霧を根引することにし、夕霧はまた「長崎丸山に色よきいきぢ全盛のならぶ方なき君有よし」、即ち丸山へ全盛くらべにゆくとて、朋輩達を招き、意中を語ると、一同も供がしたいといふ。「さあらば踊に事よせて彼里へ参るべし」とて、夕霧は「思ひつきたる出立を」物語る。「抑丸山と申は花をかざりし色里にて、だて大やうのふりときく、よのつねにては叶ふまじすぐれきれうのかぶる共、……いさ立給へや女郎達しくみ踊は花軍小てうのぼたんにたはふれし扇拍子をしつとんく又ふりかへりてうく……いさ打立んそれくと踊用意と聞へける實風流なる色軍此出立はいかならん……」といふと、房前も同意して丸山へいそぐ。

第四 鎌足は名玉をさがして、故郷戀しさに都に歸る途中、山上源内にあふと、源内はその後の様子や、入鹿が遂に天皇を押籠め奉つたことを物語る。乃ち中大兄皇子を頼みて回復を圖るべく二人は都にいそぐ。

やそらは面向不背の玉を盗取つて歸り、肥前までゆき、順風をまつ間を、丸山に遊ぶ。そこには面向不背の金山とて、近頃から評判の太夫がゐる。やそらはそれになづみて、今全盛の大臣と呼ばれ、今宵もそこにいそぐ。「よもおさまる八島の波、しづかにてらす日の本のためでたためしうたふなる……夕霧をどりの中よりも八文字にけだしつまゆうを、あらし立てむかひ、是は都の島原に夕霧と申つ、數ならざりし身なれ共、此長崎の丸山に面向金山様とかやつき出しの御せんせい十八公の御よそほひけふ始ての御げん社、此かたにても願ひし也……」とて、遊女の踊中間の夕霧が金山に出遇ふと、初見らしい挨拶をして、夕霧は金山に向つて、面向不背の金山といふ名はをかしい。普通

の名にしるといふが、馴染のやそらは之に反對する。けれども夕霧はなほもその名は面向不背の玉から出たのかも知らぬが、かゝる玉はないさうだ、あんなものは偽物のごまかしものだといふと、やそらはその名玉が何のないものか、これこそその名玉だといつて、人々の前へ差出して見せる。成程見ると、「光明四方に輝きて疑もなき名玉」である。夕霧も金山も有り難き名玉を拜まうといつて立寄り、懐剣をぬいて左右よりやそらを刺通す。白菊が加勢する。一同が騒ぐ時、房前が出て事實をあかす。金山こそは房前中納言の妹香白女であつたのである。一同は國司の家へ退く。

第五 御門が紅葉御覽かたぐ、はやともの明神へ御幸あり、海人の庄司が警護し奉つてゐる間に、志度の浦の海人が来て、わめを刈る鎌を奉り、和め刈るしぐさをおめにかけると夢を見た折しも、山上源内が忍びて、庄司を殺して御門を救ひ奉る。そこへ入鹿が入つて来て、三種の神器の御渡を願出る。此時源内は入鹿に諫めて、朝敵の悪名を徒らに取られんよりは、御位争をされてはといふと、入鹿は悦んで、「すまいのろん、天のあたへを待べき也」といひ、「十歳以上より男にたらぬわらんべを左右にたて」、春日山にて相撲興行といふことになる。やがて「相撲の始りは天竺靈鷲山にて釋迦佛みのりの花の庭にふく嵐やくき大だが悪、しづめん爲に十六の、羅漢に仰せて相撲の手を取出させ給ふ」と説き、「御即位の結ふすまひは何々ぞ、そりに取ては大そり小そりくるりくとめぐりて……」と、相撲づくしがあつて、雙方の少年の相撲が段々に運ばれ、天皇方の力士として源内の子八力が最後の勝を占めた時、入鹿が引手物を與へると、八力を大石にて殺さうとするが、其時鎌足は飛出して入鹿を退治する。天皇は大内へ還幸し給ふ。

第六 房前中納言等が面向不背の名玉を、丸山にて取かへして歸ると、夕霧は大和にて三百丁を賜ひ、又沙門りとう

は鬼神となつて内裏を襲ふが、名玉が利剣となつて切拂ふ。鬼神は今度は獅子となりて攻めかけるが、大蛇が獅子に捲付き、尾先にて打つて微塵に碎く。其時金色の姿が現れ、面向不背の玉を、一度は「海女となつて龍宮より取かへし、又此度入鹿が悪に失たりしを我力にて取かへし、二度朝家の寶となす。誠ははせの觀世音讚州志度寺と同一躰、必疑ふことなかれ」といつて、はせの御堂に入り、現れた龍神は龍の都に歸る。

【解説】 面向不背の玉物語の後日物語に、入鹿退治を組合せたもので、先づ唐使と入鹿とが魔法によつて結び、唐使が名玉を盗んで逃げることにし、之を房前中納言と其妹と名妓夕霧とが、長崎丸山の色里にて、唐使をあざむいて奪ふことにし、鎌足と源内とは、子供相撲の際、入鹿を刺すといふ仕組である。夕霧を鎌足の時代に引出し、彼女をして房前に戀慕せしめたのは、時代錯誤であるといふよりも、其奇想に時代人を驚かしたことであらう。その他房前と其妹を黒木賣たらしめて、馬子唄を歌はしめるとか、遊女に色軍の勢揃をさせるとか、遊女をして全盛競の踊をさせるとかして、美しい賑かなものたらしめたことは、相當見物を喜ばせたことであらうと思はれるが、其東西の遊女の全盛踊をしたといふ所に外題の出所があるであらう。

【原據・影響】 入鹿退治物としては舞曲『入鹿』、寛文期の『大職冠魔王合戦』、延寶期の『鎌足朝敵退治』が先例となり、玉取物語としては、舞曲『大職冠』によつた延寶期の淨曲『大しよくわん』、松本治太夫の正本『大伽藍寶物鑑』、同じ土佐少掾の『大職冠二代玉取』などが本曲に先立つものと思はれる。又相撲によつて地位を争ふものには、延寶期には『相撲祝言はんかく女軍法』があり、近松作には、享保五年三月竹本座上演の『井筒業平河内通』がある。松本治太夫の『萬歳五色松』も之に近いものである。又『四天王丸山遊』でも京島原の遊女が丸山に押しか

けて行つて大に活躍してゐる。

○相生源氏

【體裁】 古綴文庫藏本。帝國圖書館にもあり。半紙形八行四十五丁。柱に「相生」、前附及奥附に土佐少掾の名と木下甚右衛門刊の字がある。終に「相生源氏卷之終」

【太夫・刊年】 古綴本には前附に寶永五戊子初秋上旬の刊記があり、土佐少掾橘正勝の名が奥附にも前附にもある。

【形式・曲節付】 六段曲。各段首尾に形式句あり、第三段に盃づくし、第四段に頼朝朝日の前道行、第五段に正月の祝盡しの節事がある。

第一「借廣其後あら玉の年ゆたかにて門ことに、千代のかげそふ松竹の、色にあへてやもろ人の若やく春こそたのしけれ、まかゆくみよにいづのくにいとらにわたらせ玉ひにし、源の頼朝公いとうを立て北條の四郎時政を御かたらひ……」

曲尾「……千秋萬歳めでたしと貴賤上下安謐皆仰がぬ者社無けれ」

曲節付の主要なるもの、

上方、エイカン、カイトウヤツシ、アミト、二上り、クトキ、サナイ、ギンナヤシ、上カ、ル、トル、ウタトメ、節ノリ、サシ、サツマウツリ、リヨ、哥ナヤシ、哥ウツリ、ヘイケ、片タ、色三重上ケ、サイツメ、上方ヤツシ、シ、ウタ、片ナヤシ、フシウツリ、キンハコビ、一ジアゲ、トナセ、マイハリ、人ヨセ、キンツキ入、マイキン、上方フシ、アイノ山ヤツシ、クルハコビユリ、デハウタ、印ソロヘ、マリウタ

ほうひ人のかうをかくとしてまちへてひらくやとの梅
君をデハウキいわへばわがみもたのし

【梗概】 第一 頼朝平家討伐の院宣を蒙り、先づ山木判官を討ち、伊豆土肥實平の城に入つて越年し、節分の祝を終つて、翌日藤九郎盛長をつれて伊豆権現に社参し、神樂をあげて後、神馬を曳いた二女を見ると、何者なるかを問ふ。すると女は三十三度の駒を曳いて夫戀の立願に來たといつて、頼朝に戀をしかける。北條時政の女朝日の前と、侍女白雪であるとさると、頼朝は姫との間に千代の契を結ぶ。白雪も盛長にぬれかゝらうとするが、其時股野五郎兼久が來て、大事をひかへた身の輕卒を詰り争ふ處へ、又土肥遠平が來て股野をたしなめる。股野が怒つて大手水鉢を投げると、遠平は受けて投返す。遂に五郎がまける。

第二 頼朝が時政の邸へ掣入をした夜、盛長が次の間で番をしてゐる所へ、白雪は火のない火鉢をもち來つて、我が胸の炎ゆる火を指さし、切なる思を打あけて、遂に盛長を口説き落した時、障子の穴から見てゐた股野五郎が、狼籍呼はりをする。そこへ時政が來て遂に白雪を追放せしめる。ついで五郎は盛長にまで逐電せよと迫るが、頼朝に叱られて悄然として歸る。五郎は我家に歸つて郎等と謀り、「北條の館に寄せ、朝日の前を奪ひ取、頼朝を生取て、六原へ差」出し、家に花を咲かさうとする。やがて夜更をまつて北條の館を圍むが、夜盜だといつて名を名乗らぬ。けれども義時、盛長等が奮闘して之を追拂ふ。

第三 侍女どもが雪投をしてゐるのをやめさせ、頼朝が酒宴を催してゐる時、外に盃々といふ聲がして、「たちかへる春はまづゆきげながらのあさくもりくもると見るもかすみなり、これによそへてかはらけをうちくもりとやなづ

けん……」と盃盡しを歌ふものがある。商人風なので引入れて見ると、それは勘當された白雪である。白雪は朝日の前にとりついて泣く。朝日の前は同情して、晴れて盛長と夫婦にし、再び侍者たらしめる。其時股野五郎は又頼朝を討たんとして忍び來るが、格闘の後盛長に追立てられる。盛長は危険を察して、頼朝を岡崎四郎の家へ忍ばせる。

第四 土肥遠平が鶴岡八幡へ代参して歸る途中、大男が女を引立てゐるのを見つけ、大木に登つて忍んで見てゐると、それは股野が朝日の前を奪取つて歸るのである。やがて股野が女を口説き出すので、よく見るとそれは朝日の前でなくて、白雪である。白雪が朝日の前の室にゐて、頼朝夫婦を逃がしたのに違ひないと思ふと、股野は頻りに頼朝の在り所を白状せようとして拷問する。其時遠平は側の大木を下りて敵を追拂ひ、白雪を肩にかけて歸る。

「おさへくよるこびありやわが喜びのくる春を外へはやらじ、とくわか御まんさいとよ、君もさかへてましませば、民もゆたかにうろのをん……たかさいしきの糸のしまやとをきせいこの八景をこゝにうつせしそのけしきしはしながめて朝日の前立やすらひてあれみたまへ……」(道行)と頼朝夫婦が道を急ぐ所へ、大庭景親が梶原景時曾我の太郎祐信を語らひ、草を分けて尋ね來る。頼朝は驚いて朝日の前を刺殺し、自害せんとする時、朝日の前はそれを止め、二人で大なる伏木の洞にかくれる。曾我梶原が洞にのぞくと、頼朝夫婦は黙然として立ち、兩人を見て討つて捨てんとするが、此時景時が押止め、頼朝の顔を見て、「六徳兼備御生徳てんがあるじと成給はんその相疑ましまさずと祐信に目合し、御命は兩人が預り奉つて候也」といつて、各々名を名乗り、蜘蛛の糸を身に引かけ、洞中には人形なしと偽る。けれども大庭は梶原等の態度を疑ひ、洞の中を改めて捜さうとする。かくて雙方争ふ中に、洞の中から山鳩が二羽飛んで出る。愈々三人の争が烈しくなる時、風雷雨雷して、大庭の頭上に惡源太義平の靈が落ち、大

庭を微塵にする。やがて頼朝等は無事岡崎の館に入る。

第五 岡崎四郎の館へ頼朝が逃れた處へ、土肥遠平は白雪をつれて来る。やがて源頼義が平忠経退治の時の例にならつて、頼朝は武藏松橋にて旗をあげる事とし、ついで鶴岡八幡に社参する。さて賑かに祈願をこめたところへ、畠山重忠が来て松を植えて祝をする。「君を祝へば我身もたのしたのしき、あそびを正月は、そとに松竹にきはしく、うちにとしたなしめはへて、まいてついたちうら／＼と……はるのいはのおさむる日也とや……たのしき春こそ久しけれ」と、正月の祝づくしを述べた處へ、賤の男が七十すんの大ゑびを車にのせて来ると、重忠が曲者とにらんでとがめる。問答の後に遠平が大ゑびを射ると、ゑびは二つに割れて、股野五郎が飛出して斬つてかゝる。又遠平が追散す。

第六 股野五郎景久は重忠に計略を見破られて失敗し、伊豆相模安房上總が頼朝の手に歸したので、やむなく伊豆の島に渡り、箱根以西を従へて平家に力をそへんとしてゐる時、遠平軍が伊豆に攻めて遂に五郎を討滅し、遠平は頼朝が旗揚をせんとする松橋へいそぐ。

【解説】 頼朝が時政の女朝日の前と契るに至るまでの物語について、股野五郎景久が絶えず頼朝をねらつて、遂に土肥遠平に討たれてしまふに至るまでの経路を述べ、その間に頼朝が股野にねらはれて、岡崎の館にのがれる爲に、(石橋山の挿話を流用して)大木の洞にかくれて、梶原と曾我に助けられる話を交へたものである。一言にて云へば頼朝が山木判官を滅してから關東に旗揚までの戦記的物語。外題は頼朝が朝日の前との結婚に因んだものであらう。

【出處・原據】 『源平盛衰記』に出づ。萬治四年の『石橋山合戦』(古浄瑠璃新研究慶長寛文篇八〇三頁)及び『頼朝三島詣』『頼朝伊豆日記』にもよる。(古浄瑠璃新研究延寶享保篇一八二頁参照)

江戸土佐浄瑠璃解題 (二四)

○泰平篁三世往來

【體裁】 帝國圖書館藏本。半紙形八行四十四丁。初行に「泰平篁」、巻尾に「三世往來」とある。木下甚右衛門板。けれども本當の外題は上記の如くであると思はれる。

【刊年】 例の如く前附に「寶永五戊子初秋上旬、土佐少掾橋正勝」とある。

【形式・曲節付】 六段曲。初段に序の文があつて、各段首尾にも形式句あり、曲節は多い。曲節付の一つに「舞有」と記した所もあるが、其他の曲節中主なるものは、

相の手、一字ノミ、ヒロフギン、エイカン、トルキンハコビ、哥トメ、サバナミ、上ケムスヒ、トナセ、ギンナヤシ、シグレ、本片タ、馬カタフシ、ギンサツマ、ハヤナゲ、リウクハヤツシ、ウタ、サナイ、カイドウ、ウタウツリ、舞有、上ル、一ツ三重、キンノリ、サツマウツリ、アフミ地、二上リ

「二上リ」の曲節は、七夕の由来を述べた邊りにある。――

「あまの川と キンヒロイ ニ上リ いふだいかを ウタ 中にへたて、東には……」

七夕の由来の文は

「そもたなはたいにしへの源ふかくたづぬるに彦半星といふ星のまたつまさだめなかりしころ、いつ玉たれのひまよりかはた